

天塩川水系流域及び河川の概要 (案)

平成14年11月

国土交通省河川局

目 次

1. 流域の自然状況-----	1
1－1 河川・流域の概要-----	1
1－2 地 形-----	2
1－3 地 質-----	2
1－4 気候・気象-----	5
2. 流域及び河川の自然環境-----	7
2－1 自然環境-----	7
2－2 特徴的な河川景観や文化財等-----	33
2－3 河川環境を取り巻く背景-----	43
2－4 市民活動-----	46
2－5 自然公園等の指定状況-----	47
3. 流域の社会状況-----	49
3－1 人 口-----	49
3－2 土地利用-----	50
3－3 産業経済-----	51
3－4 交 通-----	53
4. 水害と治水事業の沿革-----	55
4－1 既往洪水の概要-----	55
4－2 治水事業の沿革-----	62
4－3 過去の地震災害と地震対策-----	64
5. 水利用の現状-----	67
5－1 水利用の現状-----	68
5－2 渇水被害の概要-----	70

6. 河川の流況及び水質の現状-----	71
6－1 河川流況の現状-----	71
6－2 河川水質の現状-----	74
7. 河川空間の現状-----	78
7－1 河川敷等の利用の現状-----	78
7－2 河川の利用状況-----	80
8. 河道特性-----	85
9. 河川管理の現状-----	88
9－1 河川管理施設-----	88
9－2 砂利採取-----	88
9－3 水防体制-----	89
9－4 危機管理への取り組み-----	91
9－5 地域との連携-----	94

1. 流域の自然状況

1-1 河川・流域の概要

天塩川は、我が国最北を流れる大河川で、その源を北見山地の天塩岳（1,558m）に発し、山間急流部を西北流し名寄盆地に至る。さらに流域の中核都市士別市、名寄市で剣淵川、名寄川等の支川を合わせ智東の狭窄部を流れ、天塩平野を流下する間に、多くの支川を集め、南下して、天塩町で日本海に注ぐ、流域面積 5,590km²、幹川流路延長 256km の1級水系である。流路内の人口は、上流部の士別市、名寄市など川沿いに形成されている平野部に集中し、流域全体で約 10 万人(H12 国勢調査、13 市町村)が生活している。

当流域は、上川・留萌・宗谷支庁の 3 市 10 町 1 村からなり、北海道北部の社会・経済・文化の基盤をなすとともに、多様な自然環境を有していることから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

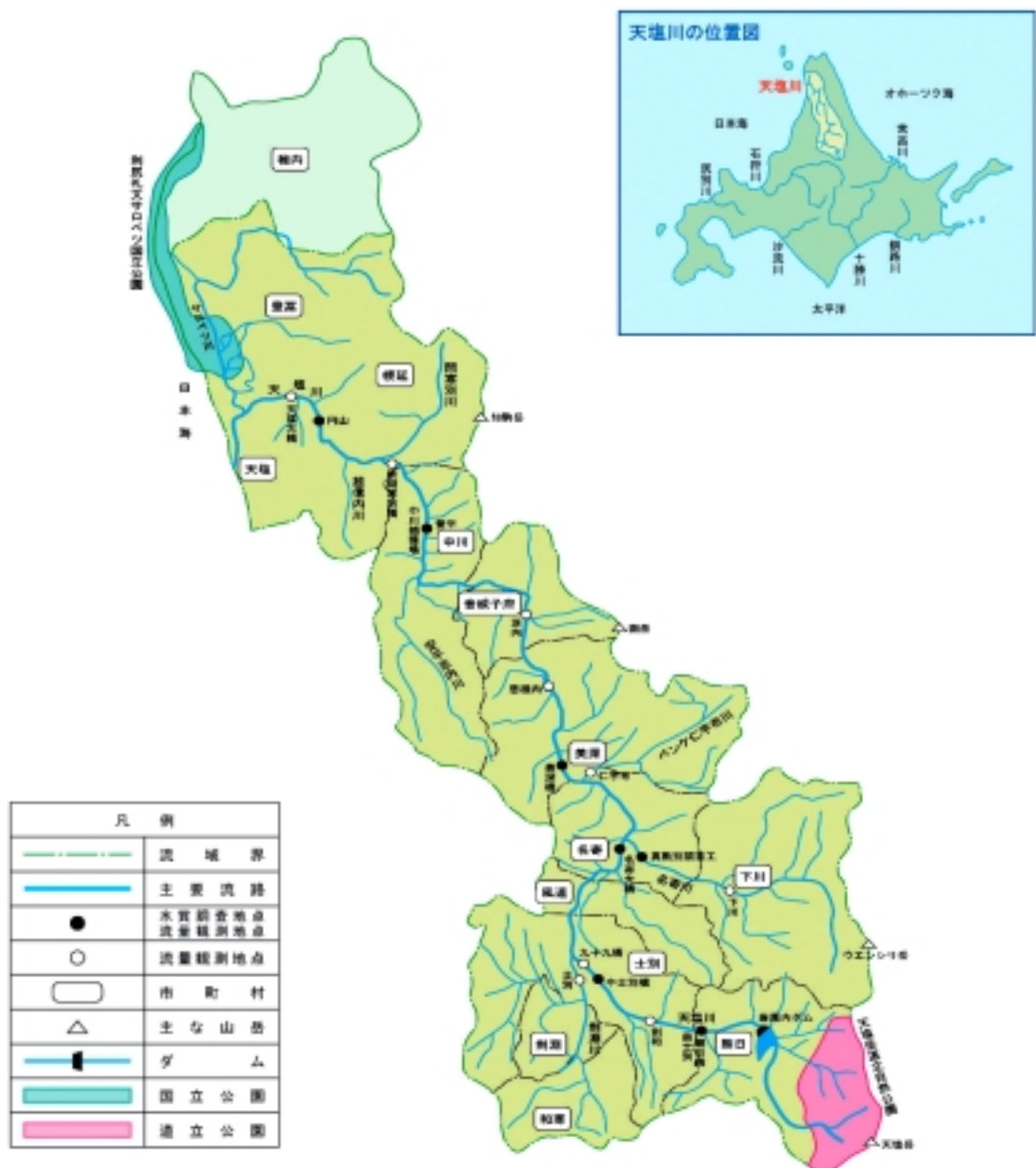


図-1 天塩川流域図

1-2 地 形

天塩川は、地形的に見て上、中、下流部の3地域に分けられる。

「上流部」は、源流の発する天塩岳から名寄川合流点までを指し、豊かな自然環境に恵まれた山間を流れる地域である。

「中流部」は、名寄川合流点から問寒別川合流点までを指す。名寄盆地は、オホーツク海沿岸の浜頓別から道央の富良野まで続く、“中央盆地区”のほぼ中央に位置し、上流部の和寒町から美深町にかけて発達している。

名寄盆地の東・西にはそれぞれ、北見山地、天塩山地が走っているが、両山地とも標高は1,000 m以下で、山脈状をなさずになだらかな山形を示している。

中流部から下流部にかけては、川沿いに泥炭地の分布する天塩川低地を形成している。

「下流部」は問寒別川合流点から河口までを指し、広大な畑作と酪農地帯の天塩平野やサロベツ湿原が広がる地域である。宗谷岬まで連なる宗谷丘陵が天塩山地まで延び、さらに日本海側に近づくと、宗谷丘陵の一部をなす丘陵群や台地、河谷低地などがモザイク状に分布し、河口付近ではサロベツ川を中心としてサロベツ湿地帯が広がる。

1-3 地 質

流域を大きく区分すると、上流部は日高帯、中流部は白亜系向斜帯、神居古潭構造帯、下流部は第三系褶曲帯が主となっている。

日高系はさらに日高東縁帯・日高中央帯・日高西縁輝緑岩帯の3帯に細分化される。流域内に含まれるのはそのうち日高中央帯と日高西縁輝緑岩帯であり、日高中央帯は粘板岩・チャートなどの堆積岩類とこれを貫く深成岩類から成る。

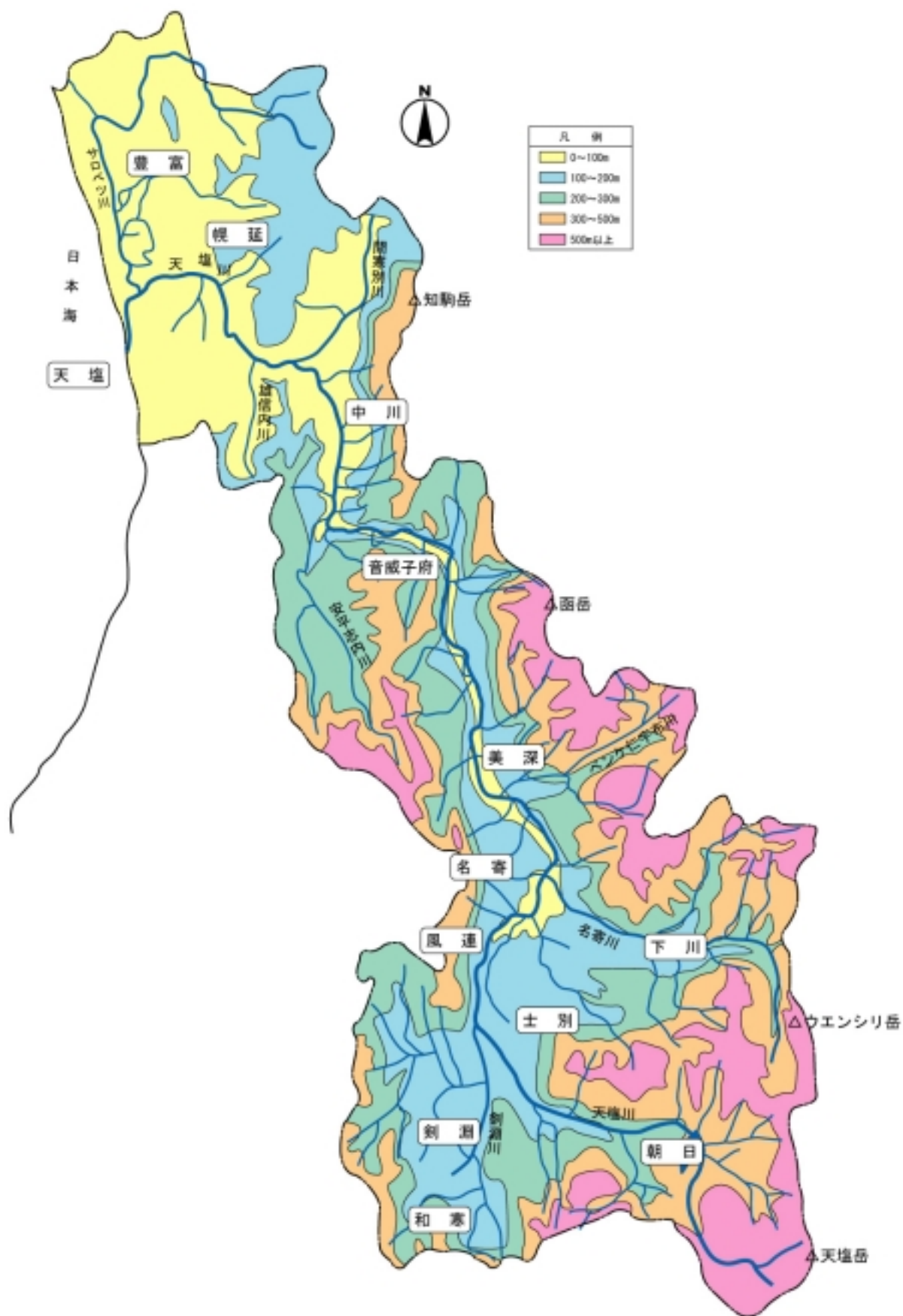
また、日高西縁輝緑岩帯は、主として先白亜紀の塩基性火山噴出岩類から成り、蛇紋岩を伴っているがほとんど変成岩類は発達していない。

これらの日高帯は北見山地の一部を構成している。

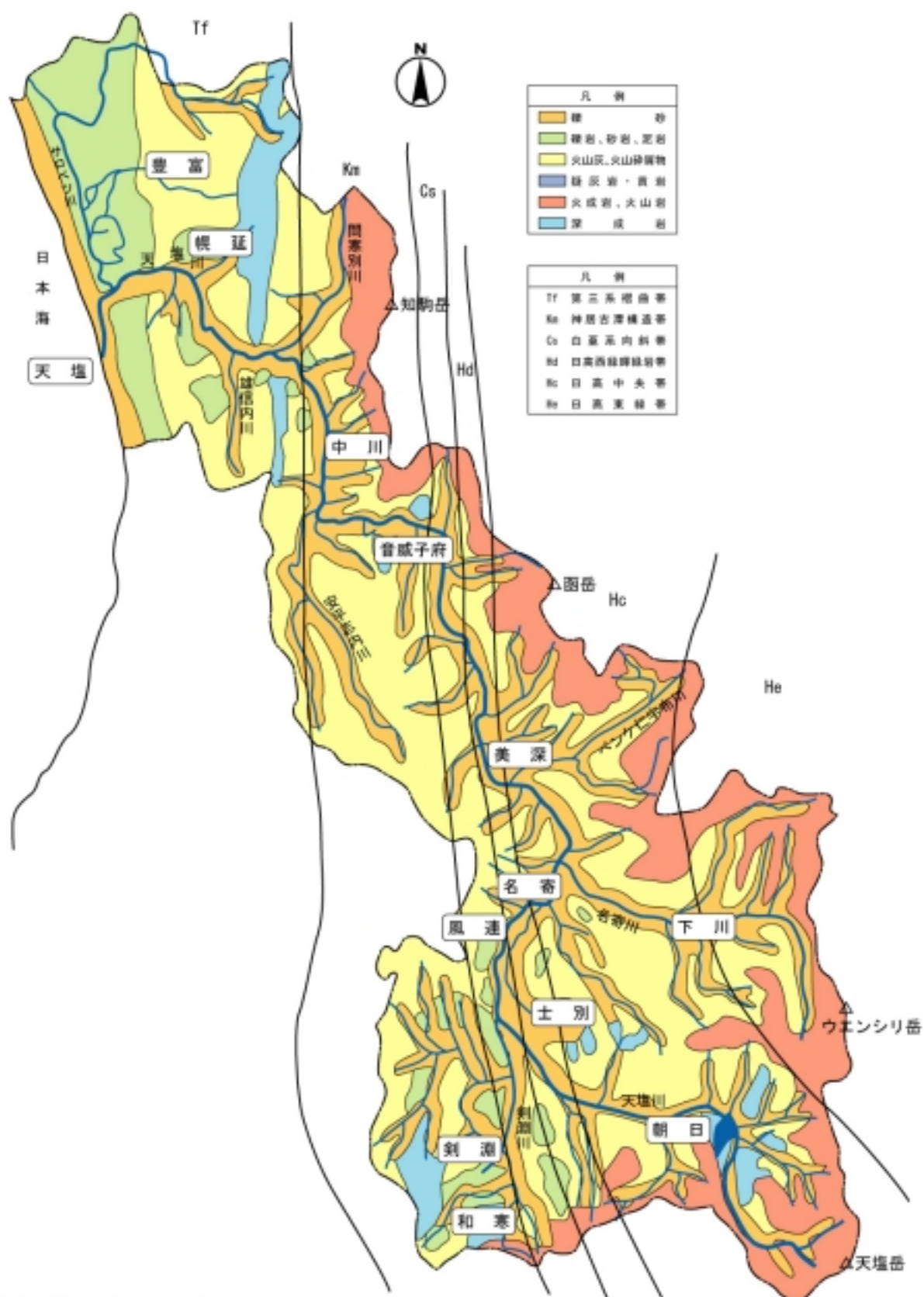
神居古潭構造帯では、先白亜紀の塩基性火山噴出岩類が大量に発達しているとともに、大小様々な規模の蛇紋岩が伴われている。本構造帯は、天塩山地の一部と宗谷丘陵の南東部を構成している。

白亜系向斜帯は、塩基性火山噴出岩類を全く伴わず、砂岩、頁岩およびそれらの互層を主としており、西側では天北隆起帯などの天塩山地の一部となり、東側では名寄盆地を構成している。

第三系褶曲帯では、新第三系の碎屑岩類が主体となり、天塩山地を構成する。



図－2 等高区分図



出典：土地分限図(岩谷・厚狭支庁)-国土庁土地局(354)
土地分限図(上川支庁)-国土庁土地局(352)

図-3 表層地質図

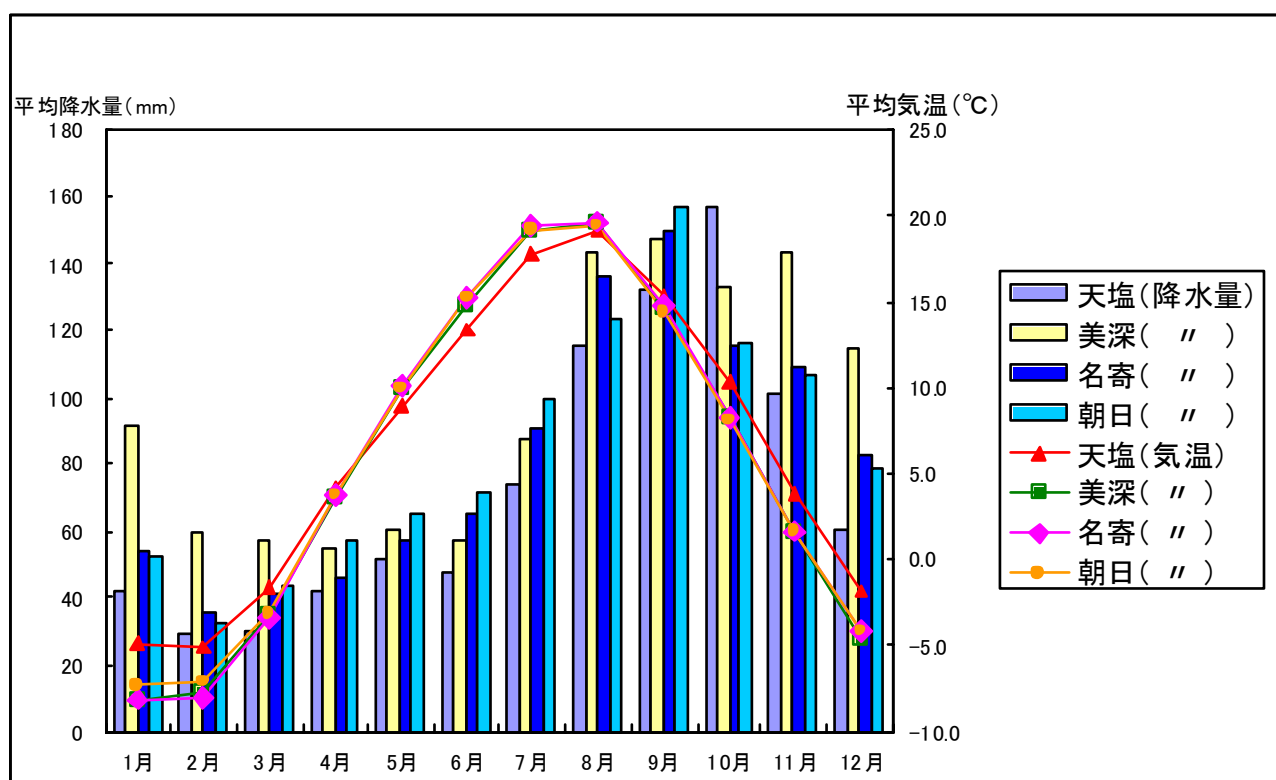
1-4 気候・気象

北海道はその周囲の海によって4つの気象区分に分類されており、天塩川流域は其中で日本海面区とオホーツク海面区に属している。

流域南部は内陸の気候であるのに対して、流域北部は海洋性気候を呈している。

北海道の気候は、地理的位置からみると、一般に温帯気候の北限あるいは亜寒帯気候の南限にあたる。冬季には大陸に蓄積された寒冷な気団が、北西季節風として運ばれ厳しい冬をもたらし、夏季には北太平洋の温暖な気団が、南東季節風として流入し暑さをもたらすが、猛暑となるのは極めて短期間である。

天塩川が流れる上川北部地方は、亜寒帯気候に属し、特に地理的に内陸部に位置するため、寒暖の変化が激しいことが特徴である。平地における年平均気温は5.7～6.6℃程度であり、冬の最低気温は、-30℃程度にも達し、また夏の暑さも30℃を越え、寒暖の差は60℃程度にもなる。また、7月～8月の最暖気の月平均気温は20℃程度、最寒気の1月～2月は-10℃程度である。この地方は水稻の北限地帯と言われているが、夏のごく短期間の猛暑と天塩川からの豊富な水とがこの地方の水稻を可能にしている。



出典：北海道の気象 統計期間 S 63～H 12 の 13 年間

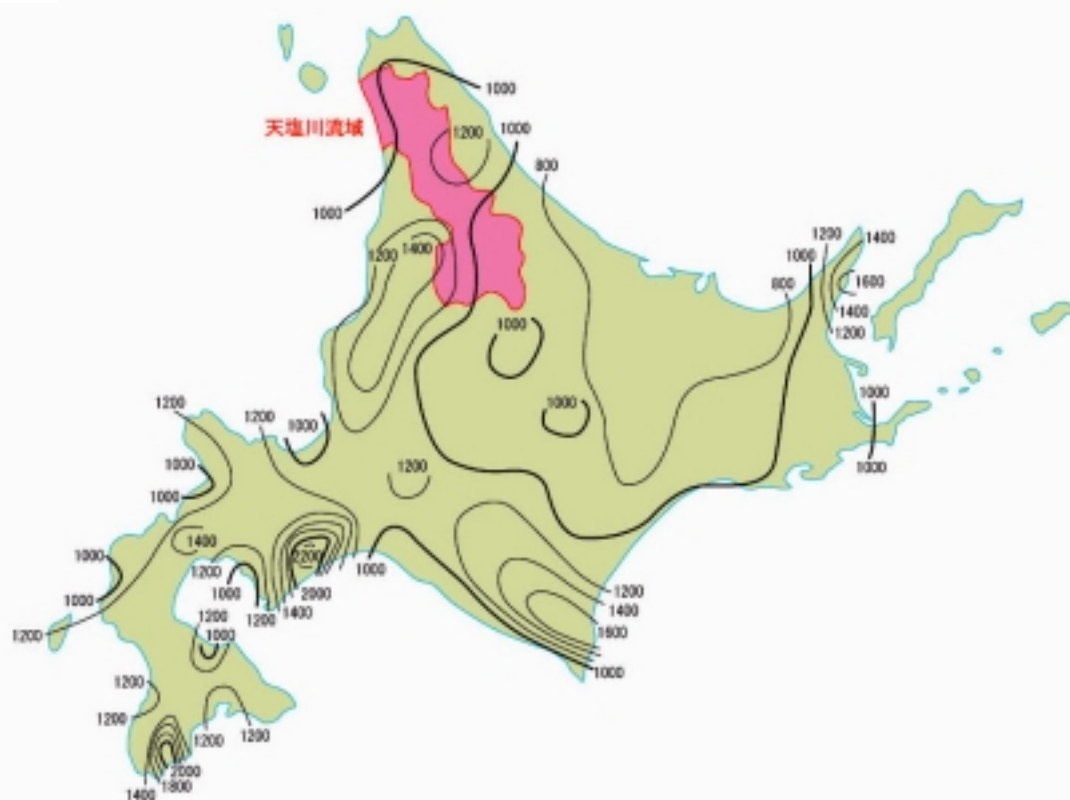
図-4 天塩川流域における主な気象観測所の平均気温・平均降水量の推移

図－5 年平均気温分布図(統計期間1979～1990 :単位℃)



資料:北海道のアメダス統計 | 1992年冊

図－6 年降水量分布図(統計期間1979～1990 :単位mm)



資料:北海道のアメダス統計 | 1992年冊

2. 流域及び河川の自然環境

2-1 自然環境

(1) 流域の自然環境

天塩川は、自然豊かな河川である。上流部は源流部周辺が天塩岳道立自然公園に指定され、豊かな森林資源に恵まれた山間を流れ、中流部は大規模稲作地帯の北限である名寄盆地から約 23km に及ぶ音威子府狭窄部などの山間狭窄部を流下し、中下流部には河川のショートカット工事による多くの旧川が点在している。また、下流部は大きく蛇行しながら畑作と酪農が盛んな天塩平野を流れ、河口付近において利尻礼文サロベツ国立公園に指定されている日本最北端の湿原であり貴重な動植物が生育・生息するサロベツ原野が広がっている。

なお、以下に天塩川流域における主な動植物の生息状況を、P.11～P.23 に天塩川における着目または留意すべき生物・生息地一覧を示す。着目または留意すべき種の選定は、天塩川水系河川水辺の国勢調査結果を基に、稀少性(天然記念物等の法指定種、環境省レッドデータブック、北海道レッドデータブックに記載されている種)、典型性(上中下流に広く分布し個体数が多い優占種)、特殊性(生態に特徴があり環境の指標となる種)の観点から天塩川の特徴的な種を抽出した。

(植生)

北海道最北端を流れる流域の植生状況は、北部に位置しているため、低山地においても高山植物帯が形成されている。また、河口部にはサロベツ原野が広がり、利尻礼文サロベツ国立公園内のサロベツ川一帯はミズゴケ類が広く分布する貴重な高層湿原を形成し、高層から中間湿原には稀少種に属するナガバノモウセンゴケが分布するなど、湿原特有の植生や海浜植生が見られる特色のある植生状況を示している。

上流部の天塩川河岸はヤナギ類を中心とした自然林が広がり、特定種としてミクリ、タマミクリ、タヌキモ等が確認されている。中流部の河岸は主にヤナギ類、一部ヤチダモ、ハルニレ等が群落を形成し、特定種としてミクリ、カラフトモメンヅル、モメンヅル等が確認されている。下流部の河口付近はミズナラ群落やハマニンニク等の海浜性の植物が見られ、河岸にはヨシ群落、ヤナギ類が繁茂しており、特定種としてミクリ、エゾノカワジシャ、ノダイオウ、イトモ等が確認されている。

(陸上昆虫類等)

天塩川流域では様々な陸上昆虫類等が確認されている。特に、天然記念物に指定され天塩岳の山岳地帯に生息しているカラフトルリシジミや、北海道特産あるいは準北海道特産種であるオサムシ類やクワヤマトラカミキリ等が生息している。天塩川で確認されている陸上昆虫類等は、クモ類、腹足類、昆虫類を合わせ 1,013 種が確認されており、上流部ではアオゴミムシ、ヒメコガネ、コムラサキ等が生息し、特定種としてオオルリオサムシ、ケマダラカミキリ、ヒメギフチョウ等が生息している。中流部ではオオクロナガゴミムシ、エンマコオロギ、ヘビトンボ等が生息し、特定種としてオオルリオサムシ、カラフトヨツスジハナカミキリ、カラフトマルトゲムシ等が生息している。下流部ではヒシバツタ、ヘビトンボ等が生息し、特定種としてオオルリオサムシ、キタイトトンボ、イソコモリグモ、ミズムシ等が生息している。

(底生動物)

天塩川で確認されている底生動物は、貝類、甲殻類等を含めて 60 種が確認されており、上流部ではカゲロウ・トビケラ等が生息し、中流部ではトビケラ、シマイシビル等が生息し、下流部は感潮区間でもあることから、ヤマトシジミ、スジエビ、モクズガニ等が生息している。また、汽水域である天塩川本川下流やサロベツ原野内の沼では、内水面共同漁業権の対象となっているヤマトシジミが生息している。

(魚類)

天塩川で確認されている魚類は、36 種が確認されており、主にウグイ類、サクラマス、フナ類、フクドジョウ、ワカサギ等が分布している。特定種としては、トミヨ類、イトヨ、イトウ等が挙げられる。上流部ではヤマベやウグイ類、トミヨ等が分布し、中流部では、ウグイ類、ハナカジカ、フクドジョウ等が分布し、旧川の智恵文沼にはヒブナが生息しており、地元小学生を中心に保護活動が行われている。また、美深町の親水公園では、昭和初期まで天塩川に数多く遡上していたチョウザメの増殖研究が行われている。下流部では、日本最大の淡水魚類であるイトウのほか、ワカサギ、ヌマガレイ等が分布している。

一方、天塩川はサケ・マスの遡上河川であり、現在、幌延町（天塩川）、中川町（パンケナイ川）、美深町（美深川）の 3 箇所に捕獲場があり、稚魚の放流事業も行われている。

なお、下流部に内水面共同漁業権（留内共第 1 号：シジミガイ・ワカサギ）が設定されている。

(両生類・は虫類)

天塩川流域では北海道内に生息する有尾両生類のうち、特定種であるエゾサンショウウオが流域全体で確認されている。

天塩川で確認されている両生類・は虫類については、両生類が 3 科 5 種、は虫類が 1 科 1 種の生息が確認されており、主にワンドや水たまりにはエゾサンショウウオや、アカガエル等が生息している。また、北海道では唯一、サロベツ原野において特定種であるコモチカナヘビの生息を確認している。

(鳥類)

天塩川流域では 200 種程度の鳥類が生息しているものと思われ、このうち天塩川では、45 科 192 種の生息が確認されている。確認種のうち種類及び個体数ともスズメが優先している。特にサロベツ原野では、天然記念物に指定されているオジロワシ、ヒシクイ、マガンの他、本邦では稀な特定種であるミコアイサの繁殖が確認されている。

上流部で確認された鳥類は特定種であるオシドリや、マガモ等の水鳥類、ヒバリやイワツバメ等の草原性の鳥類が見られ、中流部では特定種であるカワセミや、アオサギ、カワアイサ等の水鳥類の他、草原性のヒバリ、コヨシキリ等が見られる。また、環境の指標となる種であるカワガラス、エゾセンニュウが上中流部で見られる。下流部ではショウドウツバメ、ノビタキ等の草原性種、オジロワシ、特定種であるチュウビ等の猛禽類、マガン、カワアイサ等の水鳥が見られる他、環境の指標となる種であるシマセンニュウ、マキノセンニュウ、エゾセンニュウ、カワガラスが見られる。

また、天塩川河川区域には鳥獣保護区域の指定はないが、中川、智恵文、サロベツ地域が保護区域に隣接している。

(哺乳類)

天塩川流域で確認されている哺乳類は、エゾシカ、ヒグマ、キツネ、エゾタヌキ、エゾリス、エゾモモンガ等、北海道内各地で確認されている一般的な獣類の生息が確認されている。

天塩川で確認されている哺乳類は、8 科 23 種の生息が確認されており、主にキツネやエゾタヌキ、エゾユキウサギ、エゾアカネズミ等一般的な獣類が生息している。特に特定種としては、サロベツ原野に生息する世界最小の哺乳類であるトウキョウトガリネズミや、流域全体で確認されているエゾクロテンがあげられる。

出典：第 1 回・第 2 回自然環境保全基礎調査

平成 11 年度天塩川水系(天塩川下流)植物調査報告書

平成 11 年度天塩川水系(天塩川上流)植物調査報告書

平成 5 年度天塩川水系(天塩川上流)植物調査報告書

平成 9 年度天塩川水系(天塩川下流)陸上昆虫類等調査報告書

平成 9 年度天塩川水系(天塩川上流)陸上昆虫類等調査報告書

平成 4 年度天塩川水系(天塩川上流)陸上昆虫類等調査報告書

平成 8 年度天塩川水系(天塩川下流・問寒別川・サロベツ川)

底生動物調査報告書

平成 8 年度石狩川上流・天塩川上流河川水辺の国勢調査

(天塩川上流 底生動物調査)

平成 4 年度天塩川水系(天塩川上流)底生動物調査報告書

平成 8 年度天塩川水系(天塩川下流・問寒別川・サロベツ川)

魚介類調査報告書

平成 8 年度石狩川上流・天塩川上流河川水辺の国勢調査

(天塩川上流 魚介類調査)

平成 4 年度天塩川水系(天塩川上流)魚介類調査報告書

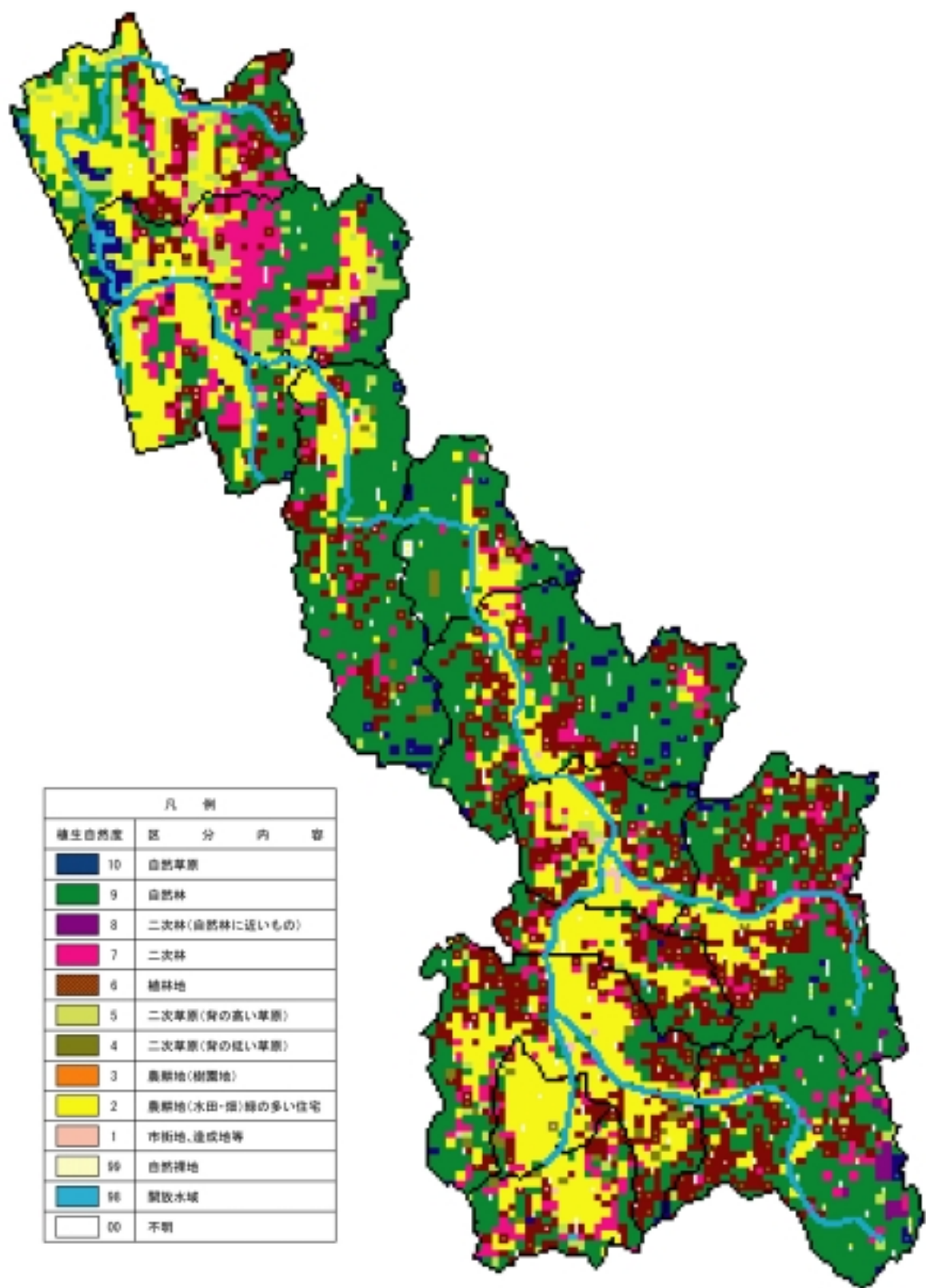
平成 10 年度天塩川水系(天塩川下流)両生類・は虫類・哺乳類調査報告書

平成 10 年度天塩川水系(天塩川上流)両生類・は虫類・哺乳類調査報告書

平成 4 年度天塩川水系(天塩川上流)両生類・は虫類・哺乳類調査報告書

平成 6 年度天塩川水系(天塩川下流)鳥類調査報告書

平成 6 年度天塩川水系(天塩川上流)鳥類調査報告書



図ー７ 天塩川流域の植生分布図

出典:この資料は、環境省の第3回植生調査のインターネットによる出力図を引用したものである。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

植物	ホソバイヌタデ <i>Persicaria erecto-minor var. trigonocarpa</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧ⅠＢ類：ⅠＡほどではないが近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。 洪水による自生地の消失・植生の遷移・河川や湿地の開発が減少要因となる種。 水辺に生育する１年草。開花時期は８～１０月。本州、九州に分布する。 サロベツ川（Ｈ５）で確認された。
	ノダイオウ <i>Rumex longifolius</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種。 池沼の開発、植生の遷移、道路工事が減少の主要因となる種。 湿った草地・荒地に生育する多年草。開花時期は６～８月。北海道、本州（北・中部）に分布する。 天塩川の左岸河口部０.２km（Ｈ５）、右岸４.４km（Ｈ５）、間寒別川の右岸１６.２km（Ｈ５）で確認された。
	チシママンテマ <i>Silene repens var. latifolia</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧ⅠＡ類：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの、北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 山地の草地、礫地に生育する多年草。開花時期は６～７月。北海道にのみ分布する。 天塩川の名寄大橋下流付近（Ｈ５）で確認された。
	マツモ <i>Ceratophyllum demersum</i>	北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 湖沼や河川で水深１m以内の浅水中に生育する沈水性の多年草。開花時期は６～８月。北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。 天塩川左岸側２７km付近の東ウブシ地区の旧川（Ｈ１１）で確認された。
	ホロムイイチゴ <i>Rubus chamaemorus</i>	「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」の貴重な種および貴重な群落。高層湿原を指標する種。 寒地の泥炭地に生育する多年草。開花時期は６～７月。北海道、本州（北部）に分布する。 天塩川の右岸２７.０kmのヨシ・ササ群落内（Ｈ５、Ｈ１１）で確認された。
	モメンヅル <i>Astragalus reflexistipulus</i>	北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 河原の砂礫地、覆道上の砂地に生育する。開花時期は６月下旬～７月。日本固有種であり、北海道と本州に分布する。 天塩川の名寄橋下流左岸付近（Ｈ１１）で確認された。
	カラフトモメンヅル <i>Astragalus schelichorii</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種、北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 河原の砂礫地から岩礫地、崩壊状の林道に生育する多年草。開花時期は５～７月。北海道、本州に分布する。 天塩川の名寄橋下流左岸付近（Ｈ１１）で確認された。
	イワオウギ <i>Hedysarum vicioides</i>	北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 亜高山帯の針葉樹林帯からハイマツ帯の開けた場所に生育し、とくに崩壊斜面や砂礫質土壤に多い。開花時期は７月。北海道、本州（中部地方以北）に分布する。 天塩川の名寄大橋下流右岸付近（Ｈ５）、班溪橋下流右岸付近（Ｈ５）で確認された。
	オオバタチツボスミレ <i>Viola kamtschadalenorum</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種。 池沼・湿地の開発、ダム建設が減少の主要因となる種。 湿った草原、泥炭地に生息する多年草。開花時期は５月～７月。北海道、本州（北部）に分布する。 サロベツ川の音類橋付近（Ｈ１１）で確認された。
	イソツツジ <i>Ledum palustre var. nipponicum</i>	「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」の貴重な種および貴重な群落。高層湿原を指標する種。 高山の湿地や傾斜地に生息し、ハイマツ低木林の林縁、湿原、硫気孔周辺に優占した群落をつくる高さ１m内外の小低木。開花時期は６～７月。北海道、本州（福島県北部以北）に分布し、火山地域に多い。 天塩川の右岸２７.０kmのシラカンバ群落内及びヨシ・ササ群落内（Ｈ５）、右岸２８.２～２８.４kmのヨシ・ササ群落内（Ｈ５）で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

植物	エゾナミキソウ <i>Scutellaria yezoensis</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧ⅠＢ類：ⅠＡほどではないが近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。 湿地に生育する多年草。開花時期は８～９月。北海道、本州（北部）に分布する。 問寒別川の右岸-0.6km(H5,H11) で確認された。
	エゾノカワジシャ <i>Veronica americana</i>	「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」の貴重な種および貴重な群落。 溪流のほとりの湿地に生育する多年草。開花時期は７月～８月。北海道に分布する。 天塩川の河口の本川とロクシナイ川との合流点(H5)、小車大橋上流右岸付近(H11)で確認された。
	タヌキモ <i>Utricularia australis</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種、北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 池沼の開発、水質汚濁、湿地植生の遷移が減少の主要因となる種。 湖沼のため池などの浅水中に浮遊する多年生の食虫植物。普通殖芽で越冬する。開花時期は７月～９月。北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。 天塩川の左岸10.0kmの小面積の湿地(H5,H11)、班溪橋下流右岸付近(H5)で確認された。
	ホロマンノコギリソウ <i>Achillea alpina ssp.japonica</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種。 草地・海岸の開発が減少の主要因となる種。 山地、海岸の草原に生育する多年草。開花時期は７～１０月。北海道、本州（北・中部）に分布する。 天塩川の河口右岸3.4km～4.5kmの海岸草原で広範囲に確認された(H5,H11)。このほか右岸6.4km(H11)、8.1km(H11)、左岸0～5km内(H5)でも確認された。
	ホソバエゾノコギリ <i>Achillea ptarmica var.yezoensis</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧ⅠＡ類：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの、北海道ＲＤＢ（２００１年）絶滅危惧種：絶滅の危機に瀕している種。 蛇紋岩地帯に生育する多年草。開花時期は７月～１０月。北海道の固有植物であり、生育地の１つが幌延問寒別である。 問寒別川1.8kmのヌブカナナイ川との合流点付近(H5)、問寒別川の左岸8.2km地点(H11)で確認された。
	イトモ <i>Potamogeton pusilla</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種。 水質汚濁、池沼・河川の開発が減少の主要因となる種。 池沼やため池、小川などの浅水中に生育する沈水性の多年草。種子または殖芽で越冬する。開花時期は５月～９月。北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。 天塩川の右岸側13.5km付近の旧川内(H5)、右岸24.4km付近の旧川内(H5) 確認された。
	ミクリ <i>Sparganium erectum ssp.stoloniferum</i>	環境庁ＲＤＢ(2000年)準絶滅危惧類：存続基盤が脆弱な種、北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 池沼や水路、水湿地などの浅い水中に群生する抽水植物。本種の生育環境は水溜りや止水部であり、このような止水部はヤンマ類などの幼虫の生息場所となっており、比較的小規模なものであっても水生生物にとって重要な空間となっている。開花時期は６～８月。北海道、本州、四国、九州に分布している。 天塩川の左岸10.0kmのドクゼリ・フトイ群落内(H5,H11)、右岸13.2kmの小水路内(H5)、左岸15.9km振老3号樋門付近(H5,H11)、左岸20.4km作返一号樋門の小水路(H5,H11)、30.8km安牛三号樋門と河川敷にある小沼とを結ぶ小水路(H5)、右岸側22km付近の旧川において散生または小群状に生育するほか、右岸側24.8kmの幌延の旧川(H5,H11)、左岸側27km付近の東ウブシ地区の旧川(H11)、右岸側90.6km付近(H5)、右岸側166.6km付近(H5)、右岸側180.2km付近(H5)、右岸側192.8km付近(H5)で群生しているのが確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

植物	タマミクリ <i>Sparganium glomeratum</i>	環境庁ＲＤＢ（２０００年）絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種。 山地の池沼の残水中や水湿地に自生する抽水性の多年草。開花時期は７～８月。北海道、本州（栃木県以北）に分布する。 天塩川の班溪橋下流右岸付近（Ｈ１１）で確認された。
	ヒメガマ <i>Typha angustifolia</i>	北海道ＲＤＢ（２００１年）希少種：存続基盤が脆弱な種。 平地にある池沼、河川の水際、特に海岸近くにある水辺の残水中に大群生する。水深は１．５ｍまで耐えることができる。大型抽水植物で魚類などの産卵・生息・避難場所に利用される。開花時期は６～８月。北海道、本州、四国、九州に分布するが北海道では少ない。 サロベツ川（Ｈ５）で確認された。
群落等	海岸の砂丘植生	天塩川河口右岸の海岸砂丘上に分布する海岸草原は、自然性が高く、ホロマンコギリソウ、ニッコウキスゲ、スズラン、エゾスカシユリ等を含めて群落自体が重要である。 河川水辺の国勢調査（Ｈ５、Ｈ１１）の砂丘植生はハマニンニク・コウボウムギ群落、ハマナス群落に分類され、天塩川河口から６ｋｍまでの右岸に分布する。
	旧川の水生植物群落	ミクリ、コウホネ、マツモ、タヌキモ、イトモ等の水生植物がみられる天塩川下流域の三日月湖や旧川は、天塩川の本来の姿を指標する意味で重要である。 天塩川の下流には多数の旧川がみられ、代表的なものとして、ミクリ、ヒシ、ミズドクサ等の群落が分布する右岸側２４～２５ｋｍ付近の幌延の旧川、ミクリ、コウホネ等がみられる左岸側２７ｋｍ付近の東ウブシ地区の旧川が挙げられる。
	ハンノキ林・ヤチダモ林－ミズバショウ、ハルニレ林	ハンノキ・ヤチダモ林とそこに生育するミズバショウは、河畔の湿地林の典型である。またハルニレ林も河畔の発達した林分として重要であるので、面積の多少に関わらず留意すべきである。 ハンノキ林は、主にサロベツ川の両岸に分布しており、このほか天塩川の左岸８～１０ｋｍ、右岸１１～１３ｋｍ、問寒別川の右岸１３～１５ｋｍの区間に分布している。 ヤチダモ林は、天塩川の右岸８～９ｋｍと１２～１３ｋｍ、左岸の１９～２０ｋｍ、４０～４１ｋｍ、４４～４５ｋｍ、及び問寒別川の左岸１４～１６ｋｍの区間に分布が見られる。 ハルニレ林は、天塩川の左岸３０～３１ｋｍ、右岸の３２～３４ｋｍ、４３～４４ｋｍ、及び問寒別川の左岸１８～１９ｋｍの区間に分布している。
	ハルニレ群落、ヤチダモ群落	天塩川上流域は純然たるハルニレ群落、ヤチダモ群落はなく、ケヤマハンノキ、ミズナラ等と混生した林分となっており、これらは断片的、かつ未熟な林分であるが河畔本来の森林の姿を残す意味、また将来的に河畔林を再現する場合に重要と思われる群落である。 ケヤマハンノキ・ハルニレ群落は天塩川では４８～２０３ｋｍの区間、名寄川では３～３４．６ｋｍの区間で左右岸に断片的に分布が見られた。 ミズナラ・ハルニレ群落は天塩川では右岸８７～８８ｋｍの区間、名寄川では左岸２５～２６ｋｍの区間、右岸３０～３１ｋｍの区間で分布している。 ミズナラ・ヤチダモ群落は名寄川で左岸２５～２６ｋｍ、３１～３２ｋｍの区間で分布している。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など
(河川改修等改変に影響をうける可能性のある種を対象に抽出)

陸上昆虫類等	イソコモリグモ <i>Lycosa ishikariana</i>	海浜植物に依存する種。 北海道から本州にかけて日本海側（青森県では一部太平洋側）に生息する海浜性の大型クモである。海岸線からやや離れた海浜植物の根際など砂浜に穴を掘って住居をつくり、夜間に昆虫や海浜性小動物を捕食する。 天塩川の天塩河口地区(H9)で確認された。
	ミズムシ <i>Asellus hilgendorfi hilgendorfi</i>	環境庁RDB(1991年)希少種(存続基盤が脆弱な種)。 池沼や水田など普通に見られる。小魚やオタマジャクシなどを捕らえ、体液を吸う。 天塩川の天塩河口地区(H9)、幌延旧川地区(H9)で確認された。
	キタイトトンボ <i>Coenagrion ecorutum</i>	「日本の重要な昆虫類」における指標昆虫及び特定昆虫。 成虫の出現は5月中旬から出現し、主にミズドクサやスゲ類、ミツガシワなどの挺水植物やヒルムシロ・ヒシなどの浮葉植物が沈水植物が繁茂する寒冷な池沼や湿原に生息する。日本では北海道のみに分布する。 天塩川の幌延旧川地区(H9)で確認された。
	ルリイトトンボ <i>Enallagma boreale circulatum</i>	「日本の重要な昆虫類」における指標昆虫及び特定昆虫。 成虫は6月中旬から出現し、北海道では平地の挺水植物や浮葉植物、沈水植物などが茂る池沼や湿地の滞水に生息する。 天塩川の幌延旧川地区(H9)で確認された。
	ムカシトンボ <i>Epiophlebia superstes</i>	北海道RDB(2001年)留意種：保護に留意すべき種、「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種、「日本の重要な昆虫類」における指標昆虫および特定昆虫。 山間の森林に囲まれた急流に生息する。幼虫は流れの早い瀬の石下などで石につかまって生活している。成虫は6月に出現し、飛翔力が強く、飛んでいることが多い。日本特産種。 名寄川の由仁内橋上流地区(H8)で確認された。
	ナツアカネ <i>Sympetrum darwinianum</i>	北海道RDB(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 おもに平地や丘陵地、低山地の挺水植物が繁茂する池沼や湿地、湿原、水田などに生息する。成虫は6月下旬～晩秋にかけて出現する。北海道では産地がかなり局地的であり珍しい種。 天塩川の車大橋上流地区(H3)、名寄大橋下流地区(H3)、班溪橋下流地区(H3)、サロベツ川の音類橋地区(H3)で確認された。
	ヒメリスアカネ <i>Sympetrum risi yosico</i>	「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種、北海道RDB(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 主に森林におおわれたやや鬱閉的な挺水植物が生い茂る植物性沈積物の多い池沼や湿地に生息する。成虫は知床林道では7月中旬～10月中旬頃に出現する。北海道全域に分布しているが産地は局地的である。 天塩川の幌延旧川地区(H9)で確認された。
	ミズカマキリ <i>Ranatra chinensis</i>	個体数が減少している種。 池・沼に多く、水生植物の間に棲む。夜間に水から離れて遠くまで飛翔する。 天塩川の幌延旧川地区(H9)で確認された。
	ヘビトンボ <i>Protohermes grandis</i>	溪流（清流）に生息する種。 幼虫は溪流の石礫底に生息する。成虫は6～8月に出現し、しばしば灯火に飛来する。 天塩川の幌延旧川地区(H9)、問寒別川合流点地区(H3)、車大橋上流地区(H3、H9)、班溪橋下流地区(H9)、問寒別川の上問寒別地区(H3)で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

陸上昆虫類等	オオウスバカゲロウ <i>Heoclis japonica</i>	北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 この仲間では最大の種。成虫は7～8月頃出現し、灯火などにも訪れる。 幼虫は砂地（海岸などに多い）に生息し、他の昆虫を捕食する。 天塩川の小事大橋上流地区(H3)で確認された。
	リンゴシジミ <i>Fixsenia pruni</i>	北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。北海道特産。 成虫は年一回6月中旬から7月上旬に出現し、食樹により生息環境が変わり、エゾノウミズザクラをたべる集団は河川敷から山地の溪流沿いに生息し、スモモ、ウメを食べる集団は民家周辺に生息する。 天塩川の間寒別川合流点地区(H3)で確認された。
	カバイロシジミ <i>Glaucopsyche lycormas</i>	「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種、「日本の重要な昆虫類」における指標昆虫及び特定昆虫。 成虫は6月初旬～7月中旬に出現し、平地から低山地のやや人手の加わったクサフジの見られる草地に生息し、クサフジの分布が変わると共に産地が移動することがある。幼虫の食草はクサフジ、ツルフジバカマ、ヒロハノクサフジ。 天塩川の天塩河口地区(H9)で確認された。
	キタアカシジミ <i>Japonica onoi</i>	環境庁ＲＬ(2000年)絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種、北海道ＲＤＢ(2001年)留意種：保護に留意すべき種。 成虫は7月に出現し、幼虫はカシワを食樹としている。 天塩川の小事大橋上流地区(H9)で確認された。
	コムラサキ <i>Apatura metis</i>	ヤナギ類などに依存している種。 成虫は7月から8月中旬にかけて出現し、平地から山地の川原などのヤナギ林周辺に生息する。幼虫の食樹はバッコヤナギ、エゾノカワヤナギ、ドロノキなどヤナギ類やヤマナラシ類を広く食べる。 天塩川の幌延旧川地区(H9)、小事大橋上流地区(H3,H9)、班溪橋下流地区(H3,H9)、間寒別川の上間寒別地区(H9)、名寄川の由仁内橋上流地区(H9)で確認された。
	ヒメギフチョウ北海道亜種 <i>Luehdorfia puziloi yessoensis</i>	環境庁ＲＬ(2000年)準絶滅危惧・北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 丘陵地から山地の落葉広葉樹の疎林に生息する。成虫は5月上旬頃出現し、幼虫はオクエゾサイシンを食草としている。 天塩川の小事大橋上流地区(H4)、班溪橋下流地区(H4)で確認された。
	エゾクロバエ <i>Onesia hokkaidensis</i>	北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 成虫は6～8月頃出現し、山地の溪流沿いや路傍の葉上で見られる。 名寄川の由仁内橋上流地区(H9)で確認された。
	オオルリオサムシ <i>Damaster gehinii</i>	「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種、「日本の重要な昆虫類」における指標昆虫及び特定昆虫。 成虫は4月下旬から10月ころまで見られ、平地から山地の林や草地に生息する。肉食性でカタツムリ類、ミミズ類などを捕食する。地方亜種が多く記録されている。北海道特産でありどこにでも見られるが、河川敷としては珍しい。 天塩川の天塩河口(H3,H9)、小事大橋上流地区(H3)、名寄川の由仁内橋上流地区(H9)で確認された。
	シロスジコガネ <i>Polyphylla albolineata</i>	「日本の重要な昆虫類」における指標昆虫及び特定昆虫。 海岸松林などに多く生息し、夜間燈火に飛来する。 天塩川の天塩河口(H9)で確認された。
	エカシマルトゲムシ <i>Byrrhus ekashii</i>	北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 夏季に石の下やコケの上などでみられ、また、地表などで採集される。 天塩川の小事大橋上流地区(H3・H4)で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

陸上昆虫類等	カラフトマルトゲムシ <i>Byrrhus geminatus</i>	北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 夏季に石の下やコケの上などでみられ、また、地表などで採集される。 天塩川の小事大橋上流地区(H3・H9)で確認された。
	ケマダラカミキリ <i>Agapanthia daurica</i>	環境庁ＲＬ(2000年)準絶滅危惧：存続基盤が脆弱な種、北海道ＲＤＢ(2001年)留意種：保護に留意すべき種。 成虫は6月～8月に出現し、ヨモギ、オオハンゴンソウ、ハンゴンソウなどの葉や茎の上でみられ、幼虫はそれらの生茎を食草としている。 天塩川の班溪橋下流地区(H9)、サロベツ川の音類橋地区(H9)で確認された。
	カラフトヨツスジハナカミキリ <i>Leptura quadrifasciata</i>	北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 成虫は夏季に出現し、エゾニュウなどのセリ科の花によく訪れる。ヤナギ類、シラカンバなどを食樹とする。 天塩川の幌延旧川地区(H9)、名寄大橋下流地区(H3)で確認された。
	チャイロスズメバチ <i>Vespa dybowskii</i>	北海道ＲＤＢ(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。 一時寄生種で、モンスズメバチなどの巣に侵入する。 天塩川の小事大橋上流地区(H3)で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

魚類	カワヤツメ <i>Lethenteron japonicum</i>	漁業対象種。 幼生は河川中流域の淵や下流のやわらかい泥の中で生活し、泥中の有機物や珪藻類を食べる。変態後の若魚は水流が強くあたり、湿生植物の根が露出している場所に潜んでいる。産卵場は河川中流域の淵尻や平瀬である。 天塩川の幌延旧川地区 (H8)、問寒別川合流点地区 (H8)、小車大橋上流地区 (H8)、名寄大橋下流地区 (H8)、班溪橋下流地区 (H8)、サロベツ川の音類橋地区 (H8)、問寒別川の右岸1号樋門 (H8)、東延橋上流 (H8) で確認された。
	ワカサギ <i>Hypomesus transpacificus nipponensis</i>	漁業対象種。 海の内湾、湖沼、人工湖と、これらに注ぐ川の下流域に生息し、プランクトン動物を主に食べる。産卵期は1～5月頃で、湖沼や川の岸、川底で枯れ木や水草、水没した枯れ草、茎、枝、根などに産卵する。 天塩川为天塩河口地区 (H8)、天塩河口橋地区 (H4)、幌延旧川地区 (H8)、円山観測所地区 (H4)、問寒別川合流点地区 (H8)、新問寒別橋観測所地区 (H4)、小車大橋上流地区 (H4)、名寄大橋下流地区 (H4,H8)、サロベツ川の音類橋地区 (H4,H8) で確認された。
	イトウ <i>Hucho perryi</i>	「第2回緑の国勢調査」における「日本の重要な淡水魚」指定種、環境庁 R D B (1991年) 危急種 (絶滅の危険が増大している種)・環境庁 RL (1999年) 絶滅危惧 I B 類 (I A ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの)。 日本最大の淡水魚で北海道にのみ分布する。北海道では多くは汽水域まで下るのみで、降海する個体は一部にすぎず沿岸域に限られている。産卵期は4～5月。あまり落差のない本流上流域や中小の支流に遡上し、浅くて流れの速い平瀬にメスが産卵床を掘って、その中に産卵する。孵化した仔魚は産卵床にしばらくとどまり、7月末～8月上旬に稚魚として浮上する。稚魚は夜間に流れ下りながら散らばり、浅い瀬に定着した個体は、流れに定位して水生昆虫や落下昆虫などの流下昆虫を摂餌する。全長15cm前後から魚を食べようになり、全長30cmを超すころから餌の殆どが魚になる。 天塩川の幌延旧川地区 (H8)、問寒別川合流点地区 (H8)、問寒別川の十六線川地区 (H4) で確認された。
	サケ <i>Oncorhynchus keta</i>	漁業対象種。 砂利底から地下水の湧き出るところを産卵場とする習性を持つ。生まれた稚魚の淡水生活期間が数日から長くとも1～2ヶ月と短いことから、主に中・下流域が生息場所となる。秋に遡上・産卵する。 天塩川为天塩河口地区 (H8)、幌延旧川地区 (H8)、小車大橋上流地区 (H8)、問寒別川の右岸1号樋門地区 (H8) で確認された。
	サクラマス ヤマベ (ヤマメ) <i>Oncorhynchus masou masou</i>	北海道 R D B (2001年) 留意種：保護に留意すべき種。 サクラマスは4月ころより遡上し、9月から10月にかけて産卵する。河川水の浸透する砂礫底の淵から瀬に移るところが産卵場所となる。孵化後、稚魚は少なくとも一年間の淡水生活を送り、降海する。ヤマベ (ヤマメ) は傾斜が急で、大きな転石や岩盤からなり、淵と早瀬や落ち込みが交互に連なるところに生息する。水生昆虫、主にカゲロウ目と双翅目の幼虫や落下昆虫などを食べる。産卵場は淵尻の砂礫底に産卵床をつくり、くぼみの中で産卵する。 天塩川の問寒別川合流点地区 (H8)、新問寒別橋観測所地区 (H4)、小車大橋上流地区 (H4,H8)、班溪橋下流地区 (H8)、問寒別川の右岸1号樋門地区 (H4,H8)、東延橋上流地区 (H4)、上豊神観測所地区 (H4)、十六線川地区 (H4)、名寄川の由仁内橋上流地区 (H4,H8) で確認された。
	トミヨ <i>Pungitius sinensis</i>	「第2回緑の国勢調査」における「日本の重要な淡水魚」指定種。 キタノトミヨによく似ていて、湿原をゆるやかに流れる川の中・下流域や湖沼に生息する冷水性の淡水魚。岸寄りの水草の中に多く、小型の甲殻類やユスリカ科幼虫を摂食している。産卵期は5月上旬～7月下旬で川岸の水草の枝などに植物の繊維等で球状の巣をつくり産卵する。 天塩川为天塩河口地区 (H8)、班溪橋下流地区 (H4,H8)、サロベツ川の音類橋地区 (H8)、問寒別川の東延橋上流地区 (H8) で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

魚類	エゾトミヨ <i>Pungitius tymensis</i>	「第2回緑の国勢調査」における「日本の重要な淡水魚」指定種、環境庁RDB(1991年)希少種・環境庁RL(1998年)準絶滅危惧(存続基盤が脆弱な種)。 北海道北部・東部と石狩川流域の3地域に不連続に分布する。冬に湧水のあるところで群れることがある。産卵期は4月上旬～7月中旬。 天塩川の幌延旧川地区(H8)、問寒別川の右岸1号樋門地区(H8)で確認された。
	キタノトミヨ <i>Pungitius pungitius</i>	北海道RDB(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種、「第2回緑の国勢調査」における「日本の重要な淡水魚」指定種。 湿原をゆるやかに流れる川の中・下流域や湖沼に生息する冷水性の淡水魚。岸寄りの水草の中に多く、小型の甲殻類やユスリカ科幼虫を摂食している。産卵期は5月上旬～7月下旬で川岸の水草の枝などに植物の繊維等で球状の巣をつくり産卵する。 天塩川の問寒別川合流点地区(H8)、名寄大橋下流地区(H8)、班溪橋下流地区(H4,H8)、サロベツ川の音類橋地区(H4,H8)で確認された。
	ハナカジカ <i>Cottus nozawae</i>	北海道RDB(2001年)留意種：保護に留意すべき種。 中・上流域の平瀬の砂礫底や蛇行型の淵に多く生息する。肉食性かつ貪食であり、主に石に付着する水生昆虫を食し、ほかに流下昆虫、小型底生動物、小魚、サケ卵なども食べる。産卵場は通常の生息場所よりも流れの緩やかな平瀬で、雄は大形の礫石が散在する場所の浮石の下有空所になわばりとし、そこに雌が誘い込まれて産卵する。 問寒別川の右岸1号樋門地区(H4,H10)、東延橋上流(H8)、十六線川(H4)、名寄川の由仁内橋上流地区(H8)で確認された。
	ヒブナ <i>Carassius auratus</i>	北海道RDB(2001年)：保護に留意すべき地域個体群。 ヒブナは、種としてはフナに含まれるが、亜種ではなく、フナの突然変異によって出現した体色が朱色のものである。また、分布が限定されており、保護上重要である。釧路市の春採湖のヒブナ個体群は国指定天然記念物に指定されている。 天塩川では智恵文沼や旧河川で個体群が確認された。
	チョウザメ <i>Acipenser medirostris</i>	水産庁1998：絶滅危惧種、北海道RDB(2001年)：絶滅種 チョウザメは、大正から昭和の初期にかけて石狩川や天塩川に相当数が遡上しており、河川及びその近海で多数が捕獲されていた。昭和10年頃から急激に減少し、現在ではほとんどその姿を見ることができなくなった。日本産の本種についての生態は不明な点が多いが、産卵のために河川に遡上する遡河回遊魚である。1999年、天塩川河口から4km上流のサケマス捕獲用の網にかかり、この個体は外国の産卵群の一尾がたまたま迷いこんできたものと予想されている。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

両生・爬虫・哺乳類	エゾサンショウウオ <i>Hynobius retardatus</i>	北海道RDB(2001年)留意種：保護に留意すべき種、「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種、「日本の重要な両生類・は虫類」指定種。河川の直線化、氾濫源の消滅による湿地や池沼の減少が生息条件に大きな影響をもたらす種。 平地から高地まで広く分布し、森林と止水がある場所や緩やかな流れの沢などに生息する。繁殖期は4月から7月にかけて雪解け水が集まる池沼などの岸辺に産卵する。また、平野部の河川域においては特に貴重な種である。 天塩川の幌延旧川地区(H8)、小車大橋上流地区(H10)、班溪橋下流地区(H4,H10)、名寄川の由仁内橋上流地区(H4,H10)で確認された。
	エゾアカガエル <i>Rana chensinensis</i>	河川の直線化、氾濫源の消滅による湿地や池沼の減少が生息条件に大きな影響をもたらす種。 海岸に近い平地から、2000mの山地までの森林や草原に住む。繁殖時期は、雪解け直後の4月～5月、高地では7月。産卵場所は、湿原、湿地、池、水たまり等の浅い止水で、緩やかな流れの溪流のたまりにも産卵する。 天塩川の天塩河口地区(H10)、問寒別川合流点地区(H10)、小車大橋上流地区(H4,H10)、名寄大橋下流(H4,H10)、班溪橋下流地区(H4,H10)、サロベツ川の音類橋地区(H4,H10)、名寄川の仁内橋上流地区(H4,H10)で確認された。
	エゾユキウサギ <i>Lepus timidus ainu</i>	河畔林の減少・分断化と河畔林のヤナギ林への単純化により生息環境に影響をもたらす種。 低山帯、伐採跡地に生息する。基本的に夜行性で、巣は植物の陰や窪地などを利用する。繁殖は春から夏にかけ最大3回、産子数はふつう3子である。食性は植物食で草本類、木本類などの葉、枝、樹皮など多様である。日本に生息するウサギ目のうち最大の種。 天塩川の天塩河口地区(H4)、小車大橋上流地区(H4,H10)、名寄大橋下流(H10)、班溪橋下流地区(H4,H10)、サロベツ川の音類橋地区(H4)、名寄川の由仁内橋上流地区(H4,H10)で確認された。
	エゾリス <i>Sciurus vulgaris orientis</i>	河畔林の減少・分断化と河畔林のヤナギ林への単純化により生息環境に影響をもたらす種。 北海道の森林にのみ生息する。巣は球状巣と樹洞巣の2種類があり、繁殖は4～7月、新しく用意した巣で年1回か2回出産する。産子数は1～7子である。食性は樹木の種子、芽、果実、花、樹液、昆虫、きのこが主なものである。 天塩川の小車大橋上流地区(H4,H10)、班溪橋下流地区(H4,H10)、名寄川の由仁内橋上流地区(H10)で確認された。
	エゾシマリス <i>Tamias sibiricus lineatus</i>	河畔林の減少・分断化と河畔林のヤナギ林への単純化により生息環境に影響をもたらす種。 海岸沿いや近郊の森林、森林限界の2000mまで生息する。10～4月の5～7ヶ月間、水はけのよい砂層につくった地下巣で単独で冬眠する。繁殖は年1回で産子数は3～7子である。食性は木本と草本の若芽と種子で、昆虫も好む。 天塩川の間寒別川合流点地区(10)、小車大橋上流地区(H10)、名寄大橋下流(H4)で確認された。
	ミカドネズミ <i>Clethrionomys rutilus mikado</i>	河畔林の減少・分断化と河畔林のヤナギ林への単純化により生息環境に影響をもたらす種。 北海道にのみ生息する。繁殖期は4～9月頃で胎児数は2～7子である。食性はイネ科やカヤツリグサ科以外の植物、動物では昆虫類及び軟体動物を食べる。 天塩川の間寒別川合流点地区(H10)、名寄大橋下流(H10)、サロベツ川の音類橋地区(H10)、名寄川の由仁内橋上流地区(H10)で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

両生・爬虫・哺乳類	エゾアカネズミ <i>Apodemus speciosus ainu</i>	河畔林の減少・分断化と河畔林のヤナギ林への単純化により生息環境に影響をもたらす種。 河畔の広葉樹原生林に多く生息し、日本固有種である。基本的に夜行性で、活動は日没から3時間。年1～2回地下巣で出産し、産子数は平均で6.2子である。食性は種子・昆虫が中心で、植物根茎、緑体部も食べる。 天塩川の車大橋上流地区(H4,H10)、名寄大橋下流(H10)、班溪橋下流地区(H4,H10)、名寄川の由仁内橋上流地区(H4,H10)で確認された。
	ヒメネズミ <i>Apodemus argenteus argenteus</i>	河畔林の減少・分断化と河畔林のヤナギ林への単純化により生息環境に影響をもたらす種。 広葉樹林、針広混交林、針葉樹林、ハイマツ林など低地から高地まで広く分布する、日本固有種。夜行性で地上と樹上で活動する。採餌時間の7割以上を樹上で活動することもある。年1～2回地下巣で出産し、産子数は平均で6.2子である。食性は種子・昆虫が中心。 天塩川の車大橋上流地区(H10)、班溪橋下流地区(H10)、名寄川の由仁内橋上流地区(H4,H10)で確認された。
	エゾクロテン <i>Martes zibellina brachyura</i>	環境庁R L (1998年)情報不足：評価するだけの情報が不足している種、「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種。河畔林の減少・分断化と河畔林のヤナギ林への単純化により生息環境に影響をもたらす種。 低地から山地までの森林に生息する。北海道にのみ分布する種。巣は岩穴、樹洞で4月下旬～5月上旬に出産し、産子数は1～5子である。食性は主に小哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類など動物質が全体の約85%を占めている。 天塩川の幌延旧川地区(H10)、車大橋上流地区(H10)、班溪橋下流地区(H4,H10)、で確認された。
	イタチ <i>Mustela itatsi itatsi</i>	採餌空間、生息空間に水辺が必要な種。 平地や山林に生息するが比較的水辺を好む。繁殖期は4～5月で年1回出産し、産子数は平均4～5子である。食性はネズミ、昆虫、魚などの小動物をたべる。北海道では移入種。 天塩川の天塩河口橋地区(H10)、幌延旧川地区(H10)、名寄大橋下流(H4)で確認された。
	ミンク <i>Mustela vison</i>	採餌空間、生息空間に水辺が必要な種。 日本では北海道にのみ生息する移入種である。 サロベツ川の音類橋地区(H10)、問寒別川の上問寒別地区(H10)で確認された。
	エゾシカ <i>Cervus hortulorum yesoensis</i>	草食性の大型獣であり、広い生息空間を必要とする種。 落葉樹林に生息する。食昼間森林に棲むが、夜草原にでて草を食べることが多い。食性はイネ科を中心に春夏は双子葉草本類、秋冬はササ類、大木の種子、落ち葉、樹皮などを食べ、低質の食物を手当たり次第に大量に食べる。 天塩川の幌延旧川地区(H10)、問寒別川合流点地区(H10)、車大橋上流地区(H10)、班溪橋下流地区(H4,H10)、名寄川の由仁内橋上流地区(H4,H10)で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

鳥類	アカエリカイツブリ <i>Podiceps grisegena</i>	近年、生息に適する湖沼地の減少が憂慮される種。 日本では北海道の主に道北、道東で局地的に繁殖しているほか、冬鳥として各地に渡来する。繁殖期は湖沼に生息し、マコモなどの密生した水辺の浅瀬に水草を積み上げて皿形の浮き巣をつくる。産卵期は6～8月で卵数は3～6個である。魚類等を食べる。 天塩川の幌延旧川地区(H6,H12)、問寒別川の上問寒別(H12)で確認された。
	アオサギ <i>Ardea cinerea</i>	道北地方で繁殖が確認されている大型サギ類として採餌及び繁殖環境の保全に留意すべき種。 川、池沼、水田、干潟等に生息している。丘陵地の良く茂った林等に集団繁殖する。巣は樹上に小枝や枯れ草を積み重ねた粗雑な皿形で梢につくられることが多い。産卵期は4～5月で卵数は3～5個である。魚やカエル、昆虫類を餌とする。 天塩川の車大橋上流地区(H6,H12)、名寄大橋下流地区(H12)、班溪橋下流地区(H6,H12)、名寄川の由仁内橋上流地区(H6,H12)で確認された。
	コハクチョウ <i>Cygnus columbianus</i>	北海道RDB(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。渡来地周辺の環境保全に留意すべき種。 冬鳥として、湖沼、河口、広い川等に渡来する。家族群を単位した群れで生活する。水草を主な餌とし、水田などではイネの落ち穂を食べている。 天塩川の車大橋上流地区(H12)で確認された。
	オシドリ <i>Aix galericulata</i>	北海道RDB(2001年)希少種：存続基盤が脆弱な種。繁殖数は少なく生息環境の保全に留意すべき種。 夏鳥として渡来する。山間の溪流や山地の湖沼などに生息するが、周囲に木の多い場所を好む。大木の樹洞などで繁殖する。穴の中に枯れ草で皿形の巣をつくり、自身の羽毛を敷く。産卵期は4月～7月で7～12個の卵を産む。主に植物質のものを餌とし、特にカシ類、ナラ類のどんぐりを好む。 天塩川の車大橋上流地区(H12)、名寄川の由仁内橋上流地区(H6,H12)で確認された。
	ミコアイサ <i>Mergus albellus</i>	北海道RDB(2001年)絶滅危急種：絶滅の危機が増大している種。サロベツ川周辺の沼地は本種の本邦唯一の繁殖地として注目される種。 日本には主に冬鳥として渡来し、北海道北部で少数繁殖する。アイサ類の中で最も小形の種である。生息環境は湖沼や広い川で数羽から数十羽の群れで生活し、海に出ることもある。繁殖地では樹洞に営巣し、6～9個の卵を産む。魚を餌とする。 天塩川の河口大橋地区(H12)、振老旧川地区(H12)、東産土樋門付近の河跡湖(H6,H12)、雄信内大橋地区(H6)、車大橋上流地区(H12)、名寄大橋下流地区(H12)で確認された。
	カワアイサ <i>Mergus merganser</i>	天塩川上流域は繁殖に適する環境と考えられ、巣立幼鳥を伴う群れが比較的多く記録される河川として留意すべき必要がある。 日本には主に冬鳥として渡来し、北海道北部、東部で少数繁殖する。アイサ類の中で最も大きな種である。生息環境は広い湖沼や大きな川で数羽から数十羽の群れで生活している。繁殖地では川や湖の岸辺の岩のすき間、樹洞に営巣する。産卵期は4～6月で自分の羽を敷いた上に7～14個の卵を産む。魚を餌とする。 天塩川の車大橋上流地区(H6,H12)、名寄大橋下流(H6,H12)、班溪橋下流地区(H6,H12)、名寄川の由仁内橋上流地区(H6,H12)で確認された。また、天塩川上流域(46.3～183.0km)の平成12年度調査では幼鳥を伴う群れが多数確認された。
	ミサゴ <i>Pandion haliaetus</i>	環境庁R L(1997年)準絶滅危惧：存続基盤が脆弱な種、北海道RDB(2001年)絶滅危急種：絶滅の危機が増大している種。河口部及び内陸河川の中大型魚の生息状況等河川の自然度を示す指標となる鳥類。 留鳥。海岸や大きな川、湖に生息する。人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上に枯れ枝を積んで皿形の巣をつくり、4月頃2～3個の卵を産む。魚を餌とする。 天塩川の天塩河口地区(H12)、河口大橋地区(H6,H12)、幌延旧川地区(H6,H12)、問寒別川合流点地区(H6,H12)、車大橋上流地区(H6)、サロベツ川の音類橋地区(H6)、問寒別川の上問寒別地区(H6,H12)で確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

鳥類	オジロワシ <i>Haliaeetus albicilla</i>	国指定天然記念物、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種の指定種、「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種、環境庁ＲＬ（１９９８年）絶滅危惧ⅠＢ類：ⅠＡほどではないが近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの、北海道ＲＤＢ（２００１年）絶滅危惧種：絶滅の危機が瀕している種。河口に近い砂丘林で繁殖が確認されている。 少数は道北、道東地方で留鳥として生息、繁殖するが、大半は冬鳥として渡来する。海岸、河口、海沿いの水田や湖沼を生活圏とする。海岸や湖沼に近い原生林の大木の枝上に木の枝を積み重ねて皿形の巣をつくる。３月下旬頃１～２個の卵を産む。主にサケ、マス、タラなどの大型魚を捕らえるがカモなどの水鳥や幼獣を捕獲することもある。 天塩川の河口大橋地区（Ｈ６，Ｈ１２）、振老地区（Ｈ６，Ｈ１２）、振老旧川地区（Ｈ１２）、幌延旧川地区（Ｈ１２）、問寒別川合流点地区（Ｈ６，Ｈ１２）、小車大橋上流地区（Ｈ１２）、名寄大橋下流（Ｈ６，Ｈ１２）、班溪橋下流地区（Ｈ６）、問寒別川の上問寒別地区（Ｈ１２）で確認された。
	チュウヒ <i>Circus spilonotus</i>	環境庁ＲＬ（１９９７年）絶滅危惧Ⅱ類、北海道ＲＤＢ（２００１年）絶滅危急種：絶滅の危機が増大している種。サロベツ原野周辺は数少ない生息・繁殖地として留意すべき種。 少数は北日本で繁殖するが、多くは冬鳥として渡来する。草地、農耕地、牧草地などに生息し、背丈の高い草の中、林の中に姿を隠して休息していることが多い。広いアシ原などの地上に小枝やアシの茎を積んで皿形の巣をつくり、４月下旬から５月に４～６個の卵を産む。 天塩川の河口大橋地区（Ｈ６，Ｈ１２）、振老地区（Ｈ６，Ｈ１２）、幌延旧川地区（Ｈ６，Ｈ１２）、問寒別川合流点地区（Ｈ１２）、サロベツ川の音類橋地区（Ｈ６，Ｈ１２）で確認された。
	オオジシギ <i>Gallinago hardwickii</i>	環境庁ＲＬ（１９９７年）準絶滅危惧、北海道ＲＤＢ（２００１）希少種：存続基盤が脆弱な種。「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種。日豪渡り鳥協定に登録されている種で、近年生息適地の減少が心配される種。 夏鳥として渡来する。繁殖期には湿生の草原とその周辺で生息する。巣は地上につくられ、普通は４個の卵を産み、メスだけが抱卵するらしいが詳しい繁殖生態は分かっていない。餌は長い嘴を泥の中に突きさして小動物を捕らえる。 天塩川の河口大橋地区（Ｈ６，Ｈ１２）、振老地区（Ｈ６）、幌延旧川地区（Ｈ６）、問寒別川合流点地区（Ｈ６，Ｈ１２）、小車大橋上流地区（Ｈ６，Ｈ１２）、名寄大橋下流（Ｈ６，Ｈ１２）、班溪橋下流地区（Ｈ６，Ｈ１２）、サロベツ川の音類橋地区（Ｈ６，Ｈ１２）、問寒別川の上問寒別地区（Ｈ６，Ｈ１２）、名寄川の由仁内橋上流地区（Ｈ６，Ｈ１２）で確認された。
	カワセミ <i>Alcedo atthis</i>	「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調査」対象種。餌となる魚類、河岸の営巣地、安全な河畔林の環境等、生息状況が河川の自然度を示す指標となる種。 山地から平地の川、池、湖沼などの水辺に生息する。水辺の土の崖にくちばしを使って５０～１００ｃｍ位の深さの巣穴を掘り、巣穴の一番奥には柔らかい土と魚の骨を敷き、その上卵を産む。産卵期は３～８月で４～７個の卵を産む。止水域や緩流域などに生息する水生昆虫や魚介類を餌とする。 天塩川の幌延旧川地区（Ｈ１２）、小車大橋上流地区（Ｈ６，Ｈ１２）、名寄大橋下流（Ｈ６，Ｈ１２）、班溪橋下流地区（Ｈ６）、サロベツ川の音類橋地区（Ｈ１２）、問寒別川の上問寒別地区（Ｈ６，Ｈ１２）、名寄川の由仁内橋上流地区（Ｈ６，Ｈ１２）で確認された。また、平成１２年度の調査では巣穴が天塩川の９．５～４０．８ｋｍにかけて１０箇所、６７．５ｋｍで１箇所、サロベツ川の０～０．１ｋｍ、５．５ｋｍ、５．６ｋｍでそれぞれ１箇所ずつ確認された。
	ショウドウツバメ <i>Riparia riparia</i>	河川の垂直裸地及び高水敷の草地を主たる生活域とする種（河川改修の影響を受ける環境に生息する種）。空中を飛ぶ昆虫類の発生源、河岸の営巣地等、河川の自然度を示す指標となる種。夏鳥として渡来（北海道では５月頃）し、日本では北海道だけで繁殖するが、近年は少なくなってきた。川、湖沼、海岸近くの土手や崖などに横穴を掘って巣をつくり、集団で営巣する。巣穴は直径５～９ｃｍで深さは深いもので１ｍに及ぶものあり、６～７月に３～５個の卵を産む。空中を飛ぶ昆虫類を飛びながら捕食する。 天塩川の天塩河口地区（Ｈ１２）、河口大橋地区（Ｈ１２）、振老地区（Ｈ６，Ｈ１２）、幌延旧川地区（Ｈ６，Ｈ１２）、問寒別川合流点地区（Ｈ６，Ｈ１２）、班溪橋下流地区（Ｈ１２）、問寒別川の上問寒別地区（Ｈ６）で確認された。また、天塩川の３．４～１３１．７ｋｍにかけて多くの巣穴が確認された。このうち左岸の１３．３ｋｍ、１４．３ｋｍ、２６．９ｋｍ、１３１．７ｋｍ、右岸の２７．３ｋｍの巣穴は２００以上の大規模なものが確認された。

天塩川水系流域における着目または留意すべき生物・生育地など

鳥類	カワガラス <i>Cinclus pallasii</i>	生息環境が河川の水質を示す指標となる種（餌となる水生昆虫類は良好な水質の河川に棲む）。 留鳥。河川の上流部に生息し、1月から繁殖期に入る。滝の裏の岩のすき間や堰堤の水抜き穴に、蘚類を材料とした直径30cmの大きな球形の巣をつくる。産卵期は2～6月、4～5個の卵を産む。流れの速い浅瀬に潜ってカワゲラ、カゲロウの幼虫等の水生昆虫を主な餌としている。 天塩川の車大橋上流地区(H12)、名寄大橋下流(H12)、班溪橋下流地区(H12)、名寄川の由仁内橋上流地区(H6,H12)で確認された。
	エゾセンニュウ <i>Locustella fasciolata</i>	北海道でのみに繁殖する河畔草地の鳥で、近年生息環境の激減が心配される種。 夏鳥として渡来する。ヤナギ類が点々と生えるような湿原の草原や湿った林縁等に生息する。低木の枝や草の茎に、枯れ茎やイネ科植物の葉で深い椀形の巣をつくる。産卵期は6～7月で卵数は3～5である。 天塩川の河口大橋地区(H12)、振老旧川地区(H6,H12)、幌延旧川地区(H6,H12)、問寒別川合流点地区(H6,H12)、車大橋上流地区(H6,H12)、名寄大橋下流(H6,H12)、班溪橋下流地区(H6,H12)、サロベツ川の音類橋地区(H6,H12)、問寒別川の上問寒別地区(H12)、名寄川の由仁内橋上流地区(H6,H12)で確認された。
	シマセンニュウ <i>Locustella ochotensis</i>	河口付近の砂丘草地・灌木林の環境保全の指標となる種。 夏鳥として主に北海道の海岸地帯に渡来し、繁殖する。草原の草の間に潜って生息する。草原の地上や低い枝の上に、イネ科植物の葉や茎で深い椀形の巣をつくる。産卵期は6～7月で卵数は5～6個である。主に昆虫類を餌にしている。 天塩川の河口大橋地区(H6,H12)、振老地区(H6)、サロベツ川の音類橋地区(H12)で確認された。
	マキノセンニュウ <i>Locustella lanceolata</i>	河口付近の砂丘草地・灌木林の環境保全の指標となる種。 夏鳥として渡来し、北海道で繁殖する。平地の背の低い開けた草原に生息する。草の根元や株の中に、イネ科植物の葉や茎を材料に浅い椀形の巣をつくる。産卵期は北海道で6～7月で卵数は3～5個である。昆虫やクモを餌とする。 天塩川の河口大橋地区(H6,H12)、振老地区(H6)、サロベツ川の音類橋地区(H12)で確認された。

(2) 河川の自然環境

①上流部

上流部は、源流部から上士別付近までが山間を流れる溪流河川で、士別から名寄市街地周辺までが扇状地を流れる急流河川である。河岸や高水敷にはヤナギ・ケヤマハンノキ群落が生育している。河床は砂礫質で、トビケラ類、カゲロウ類などの底生動物が生息している。魚類はヤマベ（ヤマメ）やウグイ類などが生息し、水際にはトミヨ類などが生息する。ワンドや水たまりにはエゾサンショウウオの生息場もある。鳥類の個体数はアオジが優占種となっている他、マガモなどの大規模分布地も見られる。



上流部の河道状況（士別市平和橋上流）

出典：旭川開発建設部

	生 息 種 名
植生	ヤナギ・ケヤマハンノキ群落、クサヨシ群落、カモガヤ・コヌカグサ群落、ミクリ（準絶滅）等
陸上昆虫類等	アオゴミムシ、ヒメコガネ、コムラサキ、ケマダラカミキリ（準絶滅）、アイヌキンオサムシ（重要）、ヒメギフチョウ（準絶滅、希少）、エゾクロバエ（希少）等
底生動物	カゲロウ、トビケラ等
魚類	サクラマス・ヤマベ（ヤマメ）（留意）、カワヤツメ、エゾウグイ、フクドジョウ、トミヨ（重要）、キタノトミヨ（希少、重要）等
両生類・は虫類	エゾアカガエル、エゾサンショウウオ（留意、自然、重要）等
鳥類	アオサギ、カワアイサ、マガモ、カワガラス、エゾセンニュウ、ショウドウツバメ、イワツバメ、オジロワシ（国天、絶滅）、オオタカ（絶滅、絶滅Ⅱ類）、オオジシギ（準絶滅、希少、自然）、オシドリ（希少）、ハイタカ（希少）、コノハズク（自然）等
哺乳類	エゾアカネズミ、エゾリス、エゾタヌキ、エゾユキウサギ、ヒメネズミ、エゾシカ、エゾクロテン（自然）等

国天：国指定天然記念物 絶滅：絶滅法指定種 準絶滅：環境省レッドデータブック準絶滅危惧種
 絶滅Ⅱ類：環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類 留意：北海道レッドデータブック留意種
 希少：北海道レッドデータブック希少種 重要：日本の重要な魚類、両生類・は虫類指定種
 自然：緑の国勢調査報告書における優れた自然調査対象種



ミクリ

ミクリ科

レッドデータブックの準絶滅危惧種に指定されている。中上流部の高水敷内の水たまりの水面付近で生育を確認している。



ヒメギフチョウ

アゲハチョウ科

姫岐阜蝶の意であり、北海道のものは別亜種なのでエゾヒメギフチョウともいう。道央・道東・道北に産地が散在し、春早くに発生し、カタクリやエゾリュウキンカの蜜を吸う。天塩川流域では、上・下流部で確認されている。



トミヨ類

トゲウオ科

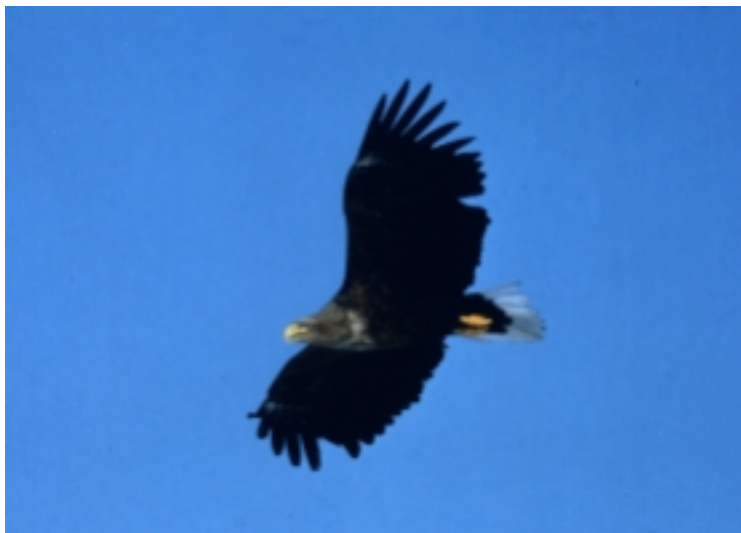
トミヨは第2回自然環境保全基礎調査の対象種（貴重種）であり、天塩川上流、イバラトミヨは、天塩川上流とサロベツ川で確認されている。



エゾサンショウウオ

サンショウウオ科

イモリ・サンショウウオの仲間（有尾目）は全世界で約300種。その中でサンショウウオ科が最も原始的で、日本にはこのサンショウウオ科が10数種生息し、世界的にも宝庫といえる。エゾサンショウウオは北海道の固有種で、平地にも山地にも生息、春～夏に、水中に寒天のコイルのような卵を産む。天塩川水系の全域に分布する。



オジロワシ

ワシタカ科

天然記念物に指定されており、主に冬鳥として渡来するが夏も少数生息している。海岸や河口、湖沼などに生息する。名寄川との合流部周辺大橋下流、士別の班溪橋下流で確認されている。

②中流部

中流部は、上流部に比べ流れも緩やかになり山間平野を流れる河川で、所々に山間狭窄部が見られる。河岸や高水敷には主にヤナギ類、一部ヤチダモやハルニレ等の群落や、クサヨシ群落が分布し、一部の湿地性の河岸付近でミクリの生育を確認している。底生動物はトビケラ類が多いが、シマイシビルなども生息する。魚類はウグイ類が多いが、サケ、サクラマスなどの遡河性回遊魚も見られる。また、旧川の智恵文沼にはヒブナが生息している。鳥類の個体数はアオジが優占種となっている他、アオサギ、オオジシギや、カワアイサ等のガンカモ類などの集団分布地も見られる。



中流部の河道状況（音威子府村^{おさしま}箴島橋上流）

出典：旭川開発建設部

	生 息 種 名
植生	ヤナギ・ケヤマハンノキ群落、クサヨシ群落、カモガヤ・コヌカグサ群落、オオイタドリ群落、ミクリ（準絶滅）等
陸上昆虫類等	オオクロナガゴミムシ、エンマコオロギ、ヘビトンボ、コムラサキ、チャイロスズメバチ(希少)、カラフトヨツスジハナカミキリ(希少)、カラフトマルトゲムシ(希少)、エカシマルトゲムシ(希少)、エゾクロバエ(希少)、キタアカシジミ(絶滅Ⅱ類、留意)、オオウスバカゲロウ(希少)、ナツアカネ(希少)、ムカシトンボ(留意)、オオルリオサムシ（自然、重要）、アイヌキンオサムシ（重要）、ヒメギフチョウ（準絶滅、希少）等
底生動物	トビケラ、シマイシビル等
魚類	サクラマス・ヤマベ（ヤマメ）(留意)、ワカサギ、サケ、カワヤツメ、ヤチウグイ、エゾウグイ、マルタウグイ、フクドジョウ、ヒブナ(地域)、キタノトミヨ（希少、重要）、ハナカジカ(留意)等
両生類・は虫類	エゾアカガエル、エゾサンショウウオ(留意、自然、重要)、等
鳥類	アオサギ、マガモ、カワガラス、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ヒバリ、イワツバメ、カワアイサ、コハクチョウ(希少)、オシドリ(希少)、ミコアイサ(絶滅危惧)、カワセミ（自然）、オオタカ（絶滅、絶滅Ⅱ類）、オオジシギ（準絶滅、希少、自然）、ミサゴ（準絶滅、絶滅危惧）等
哺乳類	エゾユキウサギ、エゾアカネズミ、エゾリス、エゾシマリス、ミカドネズミ、ヒメネズミ、エゾタヌキ、エゾシカ、エゾクロテン(自然)等

国天：国指定天然記念物 絶滅：絶滅法指定種 準絶滅：環境省レッドデータブック準絶滅危惧種
 絶滅Ⅱ類：環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類 絶滅危惧：北海道レッドデータブック絶滅危惧種
 留意：北海道レッドデータブック留意種 希少：北海道レッドデータブック希少種
 地域：北海道レッドデータブック地域個体群 重要：日本の重要な魚類、両生類・は虫類指定種
 自然：緑の国勢調査報告書における優れた自然調査対象種



サクラマス

サケ科

体長13cm～16cm、成長すると、メスは銀白色になり海へ下る。オスの多くは川に残る。メスは60cm以上に成長すると産卵のため川を遡上する。生涯河川で生息するものをヤマベ（ヤマメ）という。天塩川の中流域及び支川に広く分布している。



クサヨシ群落

イネ科

出典：H11水辺の国勢調査〔植物〕

九州以北の日本各地に生育する多年草の草本。細い地下茎で広がっており群落を形成する。初夏に花を咲かせると、高さは2m程度になる。花穂は最初が円柱状、やがて広がって散開するが、稔ると再度、円柱状になる。天塩川中流部の代表的な河岸植生である。



カワセミ

カワセミ科

夏鳥として渡来し、湖沼や池、川のほとりに生息する。好んで決まった杭や石、横枝に止まり、水中に飛び込んで魚を捕る。池の上や川に沿って矢のように飛び、土手に穴を掘り営巣する。天塩川の中流域及び下流域に生息している。

③下流部

下流部は、大きく蛇行しながら泥炭地が分布する氾濫平野を流れ、ここには、捷水路工事による多くの旧川が残されている。河口付近には砂州が発達し、ミズナラ群落や、ハマニンニクなど海浜性の植生が特徴的となっている。河岸や高水敷には、ヤナギ類やヨシ群落が分布し、ミズナラ林にはオオルリオサムシ、リングシジミなどの昆虫類も生息する。感潮区間であることからヤマトシジミ、ゴカイなどの底生動物や、サケ、ワカサギなどの回遊性の魚類も多い。サロベツ川や問寒別川ではイトウが捕獲されている。鳥類では、国指定天然記念物であるオジロワシやマガン・ヒシクイなどの集団分布地が見られる。



下流部の河道状況（天塩大橋左岸上流）

出典：旭川開発建設部

	生 息 種 名
植生	ミズナラ群落、トドマツ・ミズナラ群落、ヨシ群落、ハマニンニク、コウボウムギ、ノダイオウ等
陸上昆虫類等	イソコモリグモ、ミズムシ(希少)、ミズカマキリ、ヘビトンボ、アオゴミムシ、ヒシバツタ、コムラサキ、リングシジミ(自然)、オオルリオサムシ(自然、重要)、キタイトトンボ(重要)、ルリイトトンボ(重要)、ナツアカネ(希少)、ヒメリスアカネ(希少、自然)、リングシジミ(希少)、カバイロシジミ(自然、重要)、シロスジコガネ(重要)、ケマダラカミキリ(準絶滅、留意)、カラフトヨツスジハナカミキリ(希少)等
底生動物	ヤマトシジミ、ゴカイ、イトメ、スジエビ、モクズガニ等
魚類	カワヤツメ、サケ、ワカサギ、アシシロハゼ、ヌマガレイ、イトウ(絶滅Ⅱ類、絶滅ⅠＢ類、重要)、サクラマス・ヤマベ(ヤマメ)(留意)、トミヨ(重要)、エゾトミヨ(準絶滅、重要)、キタノトミヨ(希少、重要)、イバラトミヨ(重要)、ハナカジカ(留意)等
両生類・は虫類	エゾアカガエル、エゾサンショウウオ(留意、自然、重要)等
鳥類	アカエリカイツブリ、ショウドウツバメ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、ミコアイサ(絶滅危惧)、ミサゴ(準絶滅、絶滅危惧)、マガン(国天、希少)、オジロワシ(国天、絶滅)、オオタカ(絶滅、絶滅Ⅱ類)、オオジシギ(準絶滅、希少、自然)、チュウビ(絶滅Ⅱ類、絶滅危惧)、オシドリ(希少)、ハイタカ(希少)、ハヤブサ(絶滅、絶滅Ⅱ類)、カワセミ(自然)等
哺乳類	イタチ、ミンク、エゾシカ、ミカドネズミ、エゾアカネズミ、エゾユキウサギ、エゾシマリス、トウキョウトガリネズミ(絶滅Ⅱ類)、エゾクロテン(自然)等

国天：国指定天然記念物 絶滅：絶滅法指定種 準絶滅：環境省レッドデータブック準絶滅危惧種

絶滅Ⅱ類：環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類

絶滅ⅠＢ類：環境省レッドデータブック絶滅危惧ⅠＢ類 絶滅危惧：北海道レッドデータブック絶滅危惧種

絶滅危惧：北海道レッドデータブック絶滅危惧種 留意：北海道レッドデータブック留意種

希少：環境省北海道レッドデータブック希少種 重要：日本の重要な魚類、両生類・は虫類指定種

自然：緑の国勢調査報告書における優れた自然調査対象種



ミズナラ群落

ブナ科

葉は倒卵形、先はとがり基部はくさび形、やや薄く上面は緑色、下面は淡色で密に星状毛がある。高さ20～25m、直径70～100cm程度に成長。天塩川下流部の河辺の代表的な植生である。



イトウ

サケ科

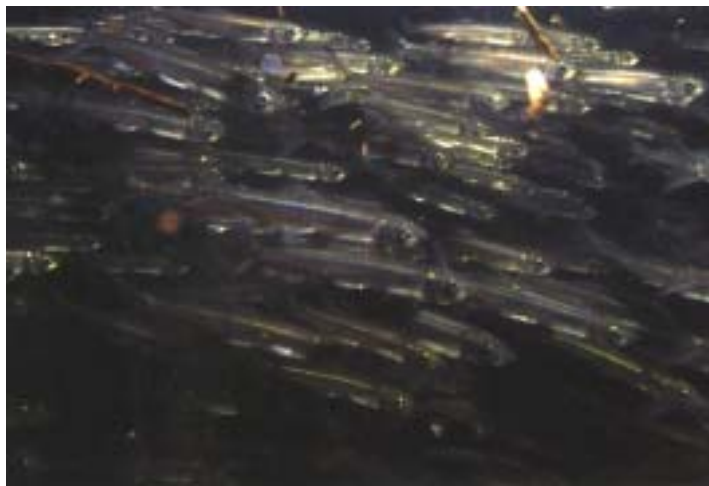
イトウは日本の絶滅のおそれのある野生生物危急種であり、夏季は川の中上流部で過ごし、晩秋降下して下流部で越冬し、翌年の春には産卵のため、中上流部へ遡河するといわれている。



サケ

サケ科

体長65cmくらいの大型の回遊魚である。海では銀白色であるが、産卵のため川にのぼる頃には、体が黒ずみ、紅色の模様が混ざる。生まれた川にもどって砂利底からきれいな地下水の湧き出る所に産卵する。天塩川の中下流域及び支川に広く分布している。現在、幌延町（天塩川）、中川町（パンケナイ川）、美深町（美深川）の3箇所に捕獲場があり、稚魚の放流事業が行われている。



ワカサギ

キュウリウオ科

3月～5月に遡上して産卵する。体長6～15cm程度。天塩川下流部に分布している。



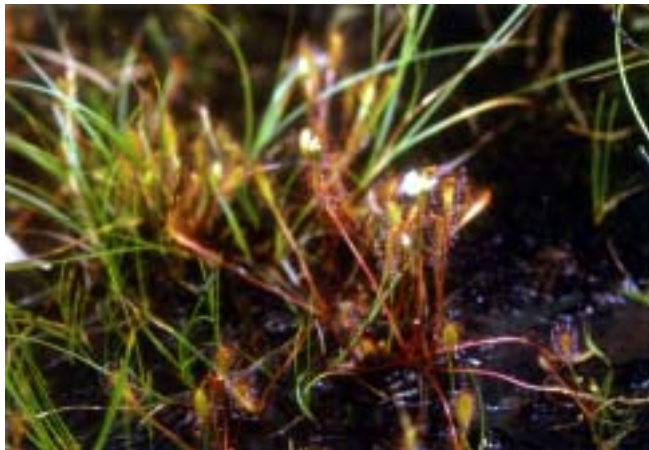
マガン

ガンカモ科

旅鳥で、北海道には秋と春の渡り途中に寄る。秋はあまり見られないが、春の北上時には毎年、石狩川流域の沼に大群で立ち寄るが最近では数が減り1971年天然記念物に指定。水田や農耕地で穀類等を食べる。天塩川では下流部のサロベツ原野で確認されている。

(3) サロベツ湿原の自然環境

サロベツ湿原には、多くの貴重な生物種が生息し、特に、高層湿原から中間湿原は、ナガバノモウセンゴケやトウキョウトガリネズミ、コモチカナヘビ等が生息・分布し、貴重性の高い生息環境を呈している。また、砂丘林についても、オジロワシ、オオタカ等の希少な猛禽類やクロテンなど生態系の上位種が生息し、良好な環境を保持している。なお、湿原内にはペンケ沼、パンケ沼の湖沼が分布し、水鳥の中継地としても重要である。湿原内では 100 種類以上の花が咲き乱れる観光地として多くの観光客が訪れている。



ナガバノモウセンゴケ



トウキョウトガリネズミ

出典：H10 水辺の国勢調査〔哺乳類〕



コモチカナヘビ

2－2 特徴的な河川景観や文化財等

(1) 景観及び景勝地

① 利尻礼文サロベツ国立公園

利尻礼文サロベツ国立公園は、1974 年(昭和 49 年)に指定された、日本最北端の国立公園である。

その範囲は利尻・礼文の 2 島と、稚内の抜海から稚咲内海岸、さらに稚内市、豊富町、幌延町の 1 市 2 町にまたがるサロベツ原野に及んでいる。

サロベツ原野は、北海道の最北端に広がる 23,000ha に及ぶ広大な湿原であり、その中央に位置する原生花園では、約 100 種にも及ぶ湿原植物や花々が見られる。

特に、6 月から 7 月にかけて開花するエゾカンゾウの鮮やかな黄色は見事な景色を演出し、多くの観光客が訪れる。

また、サロベツ原野のパンケ沼はヤマトシジミの特産地であり、シジミ漁が行われている。



サロベツ原野を上空から望む

出典：旭川開発建設部



サロベツ原野に咲き乱れるエゾカンゾウ



パンケ沼でのシジミ漁

② 天塩岳道立自然公園

天塩岳は、豊富な高山植物や鳥獣類の保護と北海道民のレクリエーションや健康増進を図ることを目的に、1978年(昭和53年)道立公園に指定されている。

天塩川の源流である北見山地の主峰天塩岳(1,558m)は北見山地の最高峰であり、山頂からは大雪山連峰、十勝岳、芦別岳や遠くは利尻山まで眺望できる。

天塩岳には4つの登山コースがあり、毎年6月第1日曜日には天塩岳山開きが行われ、多くの登山客で賑わいを見せている。



天塩岳



天塩岳山頂

③ テッシ

天塩川はアイヌ語のテシ・オ・ペツ (Tesh・o・pet)－築(魚を捕る仕掛け)・多い・川－が語源である。

テッシの多くは岩が築のような形に川を横断しているところから呼ばれ、多くに神話伝説を残している。

幕末の探検家松浦武四郎は、「大岩両方より出来り、テッシの形に成たり、むかし鬼神が作りしと云い、此川の惣名テッシホは此処より起りし名と言えり」と記している。

このようにテッシは天塩川の特徴的な景観であり、その周辺には良好な自然環境が形成されている。

また、カヌー下りにおいては美しい景観と共に絶好のスリルを味わえるポイントとして人々を楽しませている。



恩根内テッシ

出典：旭川開発建設部



紋穂内テッシ

出典：旭川開発建設部

④ 天塩川の旧川

天塩川では昭和 9 年以降、本格的な治水事業が開始され、洪水被害軽減のために蛇行箇所を切り替え、洪水の流れを良くする捷水路工事が多数行われている。

これにより発生した旧川は原始の天塩川の姿を物語る貴重な水辺空間となっている。一部の旧川では、水辺空間を利用した公園整備が進み、人々の憩いの場として活用されている。

また、名寄市の智恵文沼にはヒブナが生息し、地元の小学校では繁殖活動が行われている。さらに、美深町の旧川「美深アイランド」では過去に天塩川に生息していたチョウザメの増殖・研究活動が行われている。



美深アイランド



智恵文沼で釣りを楽しむ愛好家

■下流部

番号	名 称	新水路延長(km)	旧河道延長(km)	掘削・浚渫土量(千m ³)	着工年	通水年	河川区域
1	サロベツ第1号水路	0.7	2.4	282.50	S33	S33	○
2	サロベツ第2号水路	0.7	1.3	332.50	S33	S33	○
3	曙 新 水 路	1.2	2.5	677.00	S34	S34	○
4	上幌延1号新水路	0.4	1.2	242.00	S32	S32	○
5	上幌延2号新水路	0.8	3.8	508.45	S32	S32	○
6	東ウブシ新水路	0.8	3.3	781.00	S27	S31	○
7	円 山 新 水 路	0.7	4.1	615.00	S36	S36	○
8	雄 信 内 新 水 路	0.8	2.2	1,046.00	S45	S47	○
9	問 寒 別 新 水 路	0.9	2.8	1,523.20	S48	S50	○
10	コクネツ新水路	1.5	4.9	2,308.00	S46	S51	○
11	歌 内 新 水 路	0.6	2.0	1,635.00	S39	S45	○
12	大 富 新 水 路	0.9	1.5	623.00	S52	S54	○
13	中 川 第 1 新 水 路	0.7	3.0	110.00	S22	S25	×
14	中 川 第 2 新 水 路	1.5	7.0	221.00	S22	S25	×
小計		12.2	42.0	10,904.65			

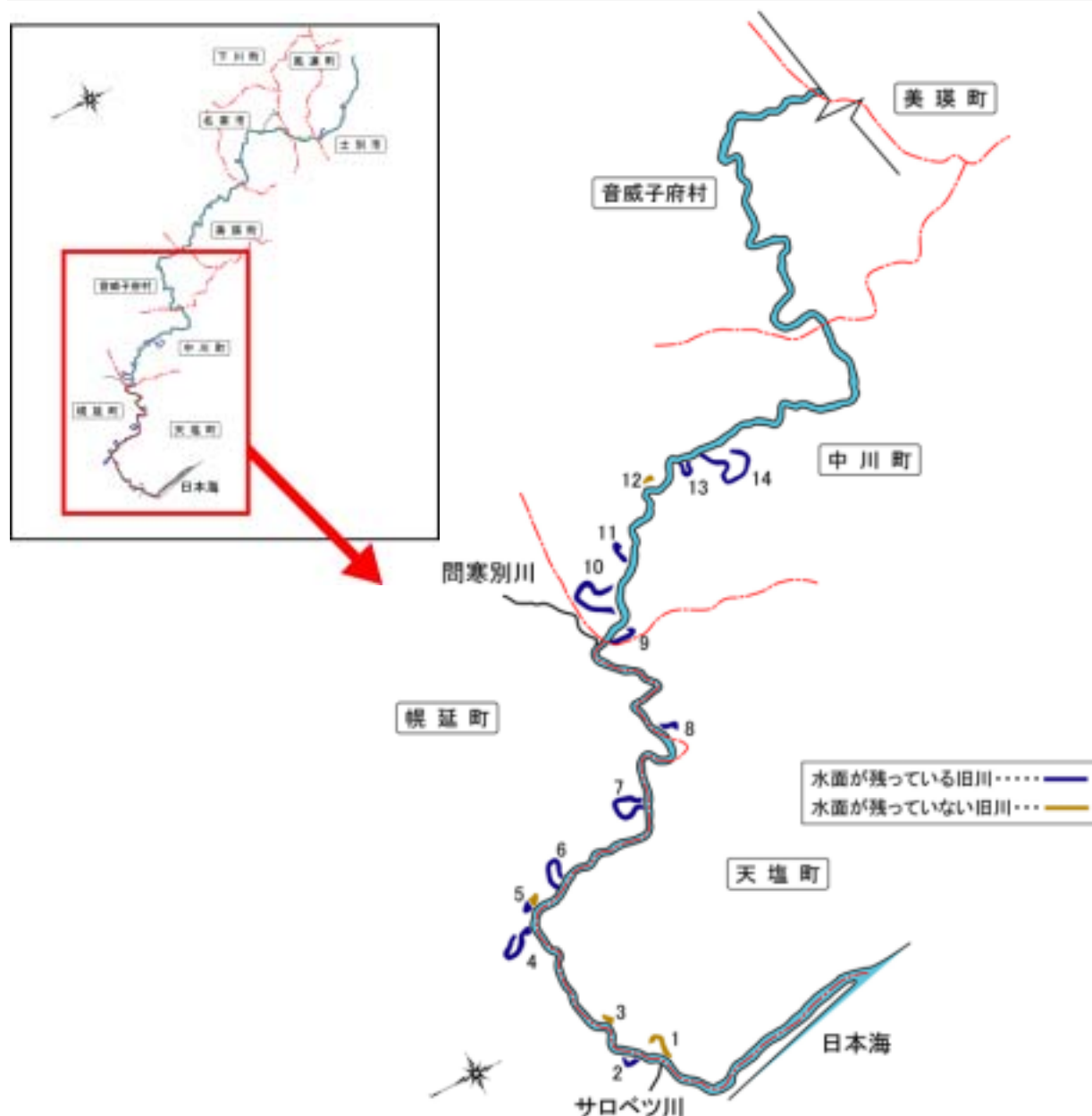


図-8-1 捷水路工事箇所図

(2) 文化財及び史跡

①文化財

天塩川流域では、国指定の文化財が2箇所、道指定が1箇所ある。このうち国指定の天然記念物として、「名寄鈴石」「名寄高師小僧」があり、道指定の天然記念物として、「稚咲内海岸砂丘林」がある。

「名寄鈴石」は、名寄市郊外の緑丘と呼ばれる河成段丘の畑の中から発見されたものであり、直径3cm～6cm程度の球または楕円体状で、赤茶褐色または暗褐色の粗雑な表面を有する岩塊である。これを振るとカラカラと鈴のような音を発することから鈴石あるいは鳴石と呼ばれている。

「名寄高師小僧」は、鈴石と同様、河成段丘の畑の中から発見され、地下水に溶けた鉄分が土壌中の植物体の周りにこれと交代しながら水酸化鉄(褐鉄鉱、沼鉄鉱)として沈殿した後、中の植物が腐って消失し、中空の管状、樹板状になったものであり、我が国の代表的な産地として指定された。

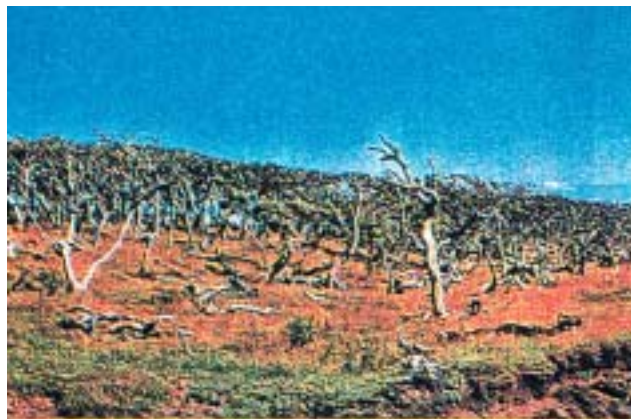
「稚咲内海岸砂丘林」は、豊富町の日本海側沿いに幅1.6km～2.0km、長さ20kmにわたって続いており、砂丘上に成育したカシワ林、針広混交林及びトドマツ・エゾマツ林から構成されている。その立地の景観とともに特異な海岸林の形態を示している。



名寄鈴石



名寄高師小僧



稚咲内海岸砂丘林

出典：天塩川治水史

②史跡

天塩川の川筋を中心に先史時代における多数の遺跡が発見されている。無土器時代の石器は九十九山遺跡・日進篠原遺跡・モサナル遺跡等で発見されている。特にモサナル遺跡は名寄川沿いの台地上に立地する遺跡で、大小様々な形の石器が発見されている。

縄文時代(早期・前期・中期・後期・晩期)のものとしては、早期のものでは名寄の智東C遺跡で土器を備えた集石墓が見つかり、当時の埋葬法を知る貴重な発見がされている。

約 7,500 年前の縄文時代前期になると、解氷による海水面の上昇があり、遺跡も上土別遺跡、多寄遺跡など現在の上流域に多く分布している。多寄遺跡では丸棒に刻み目をつけてころがしながら文様をつけた平底の土器が発見されている。

約 5,000 年前の縄文時代中期では、水が引き始め現在の地形のほぼ原型ができあがった。中期の遺跡は流域の各地で発見されているが、特に、名寄の智東B遺跡では住居跡まで残っている。

縄文時代後期・晩期の遺跡は流域であまり発見されていない。それでも名寄の智東C遺跡では墓状の穴と備えられた大型の土器が見つかった。

その後の縄文時代では、薄く全体を擦って整形した土器が作られた。この時代の遺跡としては豊富遺跡、ポンピラ遺跡、天塩川口遺跡などがある。

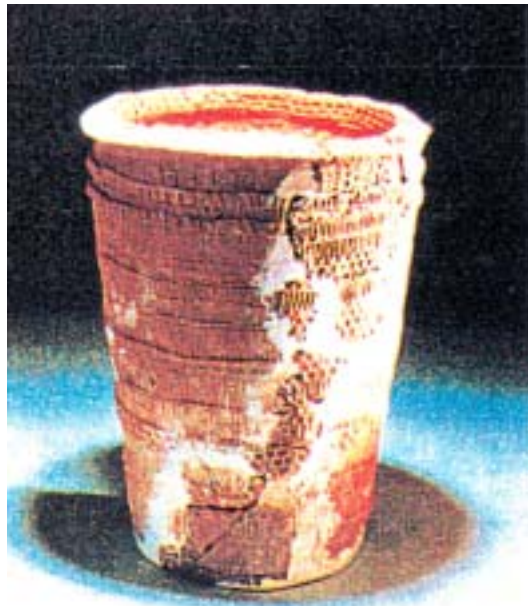
先住の人々であるアイヌの遺跡としては、天塩川口チャシ、歌内^{うたない}チャシ、オフイチャシ、茨内^{ぼらうち}チャシ、智恵文^{ちえぶん}チャシ、ニセオチャシなど川近くの小高い丘陵の先端を空壕により区画して造られたチャシ(アイヌ語で柵囲い、砦の意)などがある。発見された中ではオフイチャシが最大のものである。



図ー9 天塩川流域の主な遺跡位置図



縄文早期の集石墓(名寄市智東 C 遺跡) 「名寄市文化財調査報告書より」
出典：名寄市文化財調査報告書



縄文前期の回転押型文の土器(士別市多寄遺跡) 「士別市立博物館蔵」
出典：天塩川治水史



川口遺跡(幌延町)

③ その他

松浦武四郎の北海道命名の地の碑が音威子府村の^{おとしぼ}成島にある。松浦武四郎は安政 4 年(1857)に天塩から石狩川上流への道路開さく調査のため天塩川を遡った。その調査記録を要約・刊行したのが「天塩日誌」であり、武四郎は其中で、音威子府村の川筋に住んでいたアイヌの家に宿泊し、アエトモという長老と話をした時に「ホッカイドウ」という名称の発想をしたと記述している。武四郎はアイヌの言葉を十分理解していたが、「カイナー」(男の意、カイチーが女の意)という言葉不思議に思っていた。アエトモは「カイとはこの国に生まれた者、ナは敬語である」と武四郎に教えた。武四郎はこれを根拠に、「北加伊道」と命名し、その後「加伊」を「海」にあて「北海道」という名が誕生した。



北海道命名の地の碑(松浦武四郎命名)

出典：音威子府村役場ホームページ

<http://www.hokkai.or.jp/otoineppu/takeshiro/meimei.html>

2-3 河川環境を取り巻く背景

現代社会において、国土の約 70%を山岳が占め、残りの河川流域の扇状地に文化、資産、人口が集中する我国にとって河川は様々な面で大きな影響を与えてきた。

現在の河川は、治水・利水・河川環境といった3つの面からの管理の必要性が生じ、国の重点施策として各地で積極的に治水事業が推進されている。また、河川行政を施策する上で河川環境整備は、重要な柱として位置付けられている。

天塩川上流域の環境整備事業は士別市、名寄市の2市において行われており、名寄市では昭和55年度より曙橋上下流左岸箇所始まり、都市計画許可のおりた昭和56年4月より野球場、サッカー場など運動施設を中心に整備が行われ、人と川の結びつきにより生活環境を向上させ、市の活性化を図ろうという発想から、河川公園整備事業に積極的な姿勢で取り組んでいる。

士別市では、旧川となり用途廃止された河川敷を利用した水郷公園と、昭和54年3月付けで都市計画事業認可の公園づくりとの一貫した環境づくりが推進され、住みよいまちづくりをめざしてきている。

現在、中川町においても環境整備事業が進められており、パークゴルフ場等が整備され、地域住民の憩いの場として活用されている。

また、ダウン・ザ・テッシ-オーベツ等の全国的なカヌー大会が開催されるなどカヌー人口が急速に増加しており、急増するカヌー利用に配慮し、天塩川の各地にカヌーの発着場（カヌーポート）の整備が進められている。



ダウン・ザ・テッシ・オーベツの開催の様子
(天塩川温泉付近のカヌーポート)

●天塩川水系河川環境管理基本計画（空間管理計画）

河川環境管理基本計画は河川改修事業と自然環境保全の調和を図るべく定められる計画である。天塩川水系の河川環境管理は天塩川の特長、社会的要請を踏まえ、「拓けゆく大地のいぶきを伝える朔北の大河一潤いのある暮らしをゆうゆうたる流れにもとめて」を基本テーマに3つの基本理念と6つの基本方針のもと、平成2年に策定された。

－基本理念－

①朔北の自然を育む清流、天塩川

日本最北の大河である天塩川は、果てしなく広がるサロベツ原野や悠々の流れが刻んだ溪谷など、豊かな自然と動植物を育んでいる。これらの貴重な自然環境を保全していくと共に人と自然との共生を求めて継承していく。

②憧憬の水際をデザインする清流、天塩川

豊かな営みと、安らぎとうるおいある水辺環境を与えてきたが、さらにぬくもりが感じられるマチづくりの一翼を担うよう、豊かな河川環境を活用するとともに、魅力ある河川空間を創造する。

③明日へ向けて飛翔する天塩川

天塩川は不屈の開拓精神とともに朔北の地の発展の礎となってきた。また、豊かな自然に抱かれた天塩川は新たな時代への多くの可能性を秘めている。

このような人と自然が織りなす息吹の中で、より多くの人々が集い、交流する新たな北の拠点として、明日に向けて飛翔する天塩川を目指す。

－基本方針－

天塩川水系の河川空間環境管理は、基本理念を踏まえて河川空間の適正な保全と利用を図るため、次に示す事項を基本方針とする。

①治水及び利水計画との整合

河川環境の管理は、治水・利水の管理と一体不可分なものであり、「天塩川水系工事实施基本計画」等と不十分整合を図り、治水・利水機能に支障のない範囲において、河川環境の保全と利用が適正に行われるよう管理するものとする。

②流域との調和

流域の環境と河川の環境は、相互に密接に関連していることから、関係自治体等の河川環境に関連する施策と調整を図り管理する。なお、河川空間環境を保全・創造するためには、河川特有の機能を活用し、河川空間の有限性と社会的要素との調整を図りつつ、天塩川全体として調和のとれたものとする。

③湿原の優れた自然の保全

天塩川の下流部には国立公園に指定されているサロベツ原野を有しており、この湿原にはかけがえのない自然が残され、数多くの貴重な動植物が見られるなど、人々に大自然との出会いを楽しませている。

このため、湿原特有の優れた自然環境を保全し、後世に継承する空間とする。

④豊かな河川環境の保全と利用

緑に囲まれた清流やダム湖、三日月湖や溪谷など自然豊かな河川環境は、人々の心にやすらぎを与え、また広い高水敷は、緑あふれる河川空間として採草地等に利用されており、人々の生活に潤いを与えている。

このため、人と自然の共生を図り、自然豊かな環境を保全するとともに、緑豊かな潤いの空間として活用する。

⑤憩いと健康の水辺空間の創造

天塩川の広大な河川空間は、スポーツ・レクリエーション等の場として多くの人々に親しまれている。

このため、市街地周辺における数少ない水と緑とのオープンスペースとして人々が憩い、心身の健康増進が図れる水辺空間を創造する。

⑥北の拠点づくりに寄与する水辺空間の活用

天塩川の河川空間は川まつりやいかだ下り、スキーマラソンなどのイベントに積極的に利用されており、自然あふれる湖沼や湿原などは貴重な観光資源となっている。このような流域社会の発展に寄与してきた河川空間をさらに活用し、流域が一体となった新たな北の拠点づくりを目指す一環として、イベントや観光などを通し地域の連携を図り、各地から人々が集い、交流できる場を形成する。

2-4 市民活動

天塩川流域では、天塩川を軸にした地域活性化を提唱している「天塩川ルネッサンス会議」や、カヌーによる地域活性化を推進している「北海道カナディアンカヌークラブ」、「ウォータースポーツ協議会」等の川を中心とする市民活動が活発に展開されている。毎年、これら市民活動の協力を得ながら、流域の上中下流を結ぶ「ダウン・ザ・テッシ・オ・ペッ」等のカヌーのイベントが開催されている。

また、今後の天塩川の川づくりを進めるにあたって、河川管理者だけの取り組みではなく、市民、自治体、関係行政機関との連携を図りながら推進することが必要であると考え、平成7年に「天塩川 21 世紀の川づくり懇談会」が設置され、今後の河川事業の推進については治水、利水、環境、交流の4つの柱を軸に重要であることを基本姿勢とした提言が平成7年12月にまとめられている。

また、近年、天塩川の水質向上を目的とした活動が盛んになっており、「天塩川を清流にする会」は植樹や河川清掃等の活動を行っている。

さらに、天塩川を再びチョウザメが遡上する大河にすることを目標に、流域住民が「天塩川復元研究会」を発足し活動している。

平成 13 年 8 月 2 日(木) 北海道新聞

[illegible]

2-5 自然公園等の指定状況

天塩川流域内では、「利尻・礼文・サロベツ国立公園」、「天塩岳道立自然公園」の2つが自然公園法の指定を受けている。流域内における鳥獣保護区は22箇所が指定され、休猟区が3箇所、銃猟禁止区域が2箇所指定されている。

また、松山ピアシリ湿原が自然環境保全地域に指定されている。

表-1 自然公園

図面 番号	名 称	指定年月日	保護計画による地区、地域面積 (ha)			
			特別保護区	特別地域	普通地域	計
①	利尻礼文サロベツ 国立公園	49. 9. 20	7,998	13,086	138	21,222
②	天塩岳 道立自然公園	53. 1. 6	—	9,369	—	9,369

表-2 自然環境保全地域等

図面番号	名 称	市 町 村 名	面積 (ha)
③	松山ピアシリ	名寄市、美深町、雄武町	1,882

表-3 休猟区

図面番号	名 称	面積 (ha)	存 続 期 間
④	剣淵休猟区	6,040	H11.10.1～H13.9.30
⑤	天塩南東部休猟区	13,510	H11.10.1～H14.9.30
⑥	豊富南部休猟区	30,287	H10.10.1～H13.9.30

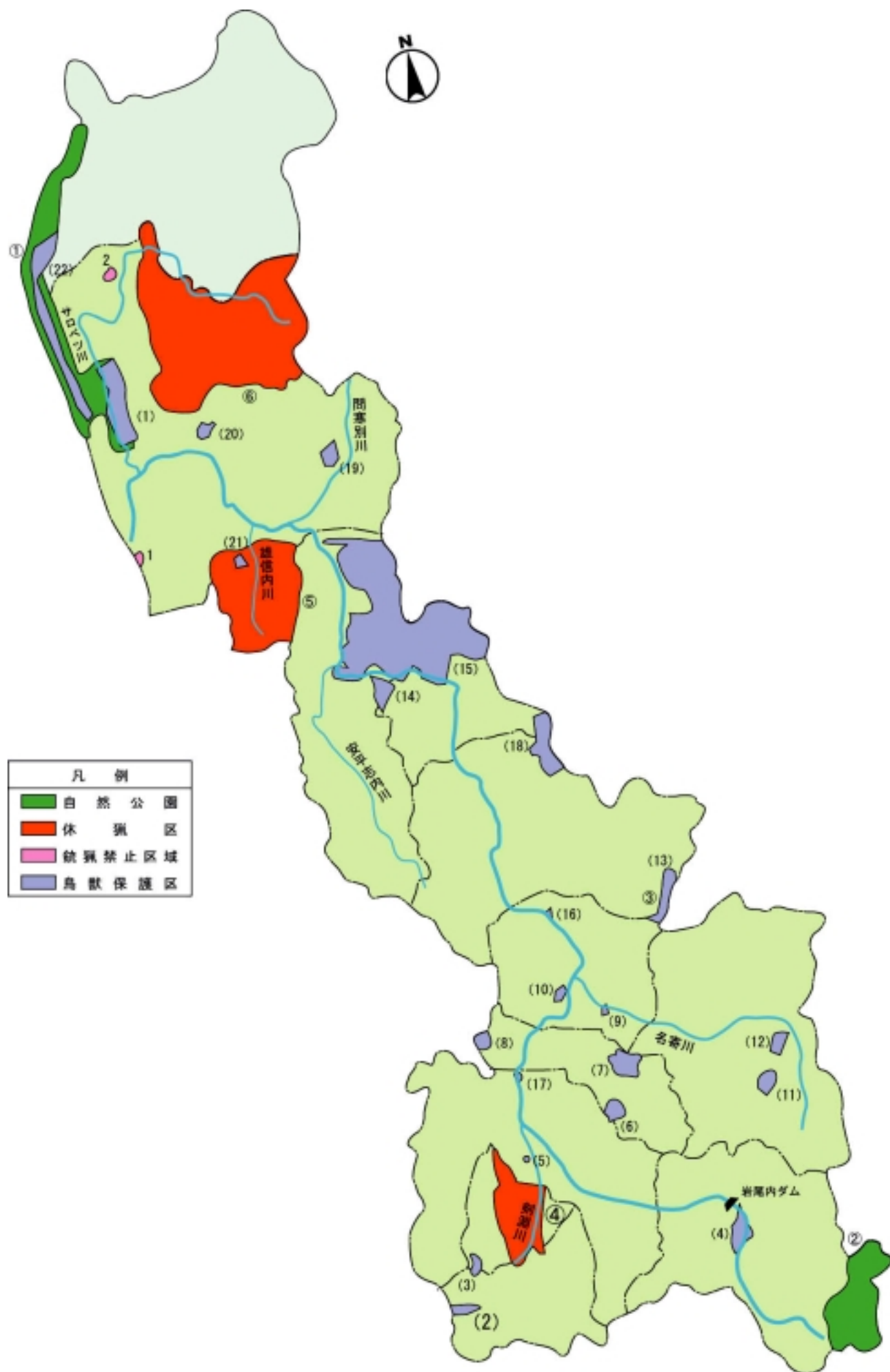
表-4 銃猟禁止区域

図面番号	名 称	面積 (ha)	存 続 期 間
1	鏡沼	40	H7.10.1～H17.9.30
2	兜沼	116	H9.10.1～H14.9.30

表-5 鳥獣保護区

図面番号	名 称	面積 (ha)	存 続 期 間
(1)	サロベツ (国設、渡)	2,560	H4.3.1～H23.9.30
(2)	和寒 (道設、森)	490	S59.10.1～H16.9.30
(3)	ペオッペ (道設、森)	300	S60.10.1～H17.9.30
(4)	朝日 (道設、森)	374	S58.10.1～H15.9.30
(5)	ふどう (道設、誘)	21	S61.10.1～H18.9.30
(6)	風連 (道設、森)	467	S58.10.1～H15.9.30
(7)	忠烈布 (道設、森)	932	S59.10.1～H16.9.30
(8)	西風連 (道設、森)	301	S61.10.1～H18.9.30
(9)	旭東 (道設、誘)	35	H6.10.1～H26.9.30
(10)	となみが丘 (道設、誘)	172	H6.10.1～H26.10.1
(11)	新下川 (道設、森)	513	S60.10.1～H17.9.30
(12)	一の橋 (道設、森)	383	S60.10.1～H17.9.30
(13)	松山 (道設、森)	838	S63.3.30～H20.3.29
(14)	中川 (道設、森)	516	S61.10.1～H18.9.30
(15)	北大中川地方演習林 (道設、大)	18,075	S61.10.1～H19.9.30
(16)	智恵文沼 (道設、渡)	23	H5.10.1～H25.9.30
(17)	中多寄 (道設、渡)	10	H7.10.1～H27.9.30
(18)	函岳 (道設、森)	3,514	H10.10.1～H28.9.30
(19)	北大演習林間寒別 (道設、森)	323	S61.10.1～H18.9.30
(20)	幌延 (道設、誘)	187	H7.3.5～H16.9.30
(21)	男能富 (道設、森)	168	H9.10.1～H19.9.30
(22)	夕来権咲内 (道設、森)	4,692	H2.10.1～H12.9.30

森：森林鳥獣生息地保護区 渡：集団渡来地保護区 誘：誘致地区保護区 大：大規模生息地保護区



図－１０ 天塩川流域における自然公園等位置図

３．流域の社会状況

３－１ 人 口

天塩川の流域は上川、留萌、稚内の３支庁にわたり、名寄市、士別市をはじめとする３市１０町１村を有し、その人口は 94,028 人（平成 12 年 10 月国勢調査結果速報）である。また、図－11 に示すとおり、天塩川流域の人口は、昭和 35 年をピークに減少傾向を示している。一方、世帯数は、近年、若干増加傾向を示していることから、流域全体として核家族化傾向がみられる。

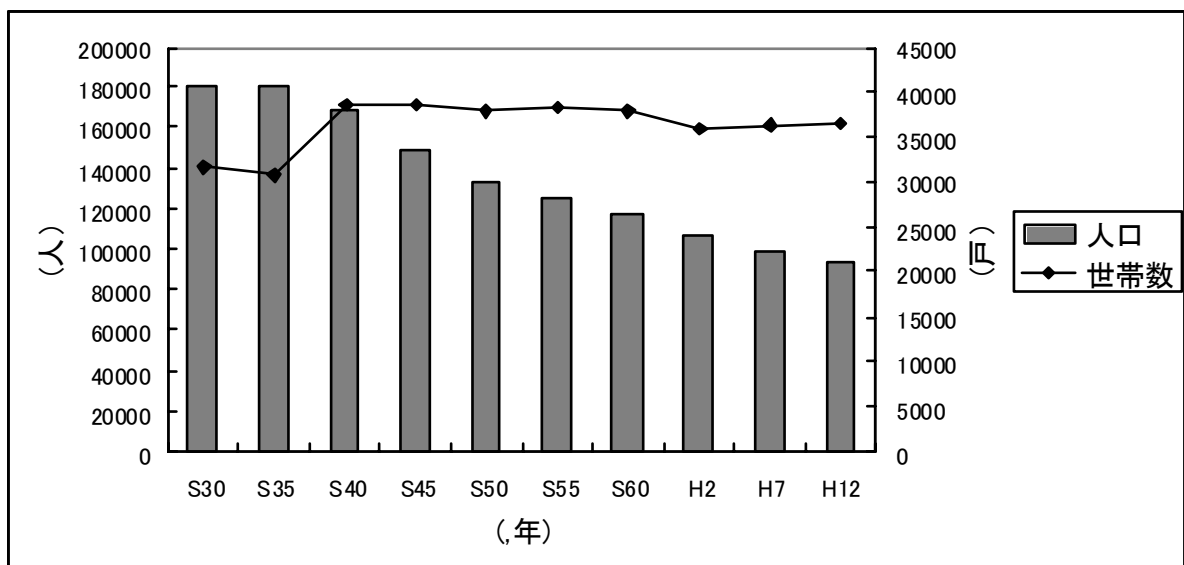
表－６ 天塩川流域の人口・世帯等

区 分	面積 (km ²)	平成12年度人口 (人)	平成12年度世帯数 (世帯)	人口密度 (人/km ²)
流 域 内	5590.00	94,028	36,536	16.8
上 流 域	1475.32	33,856	12,688	22.9
中 流 域	2127.21	45,112	17,790	21.2
下 流 域	2043.69	15,060	6,058	7.4

出典：H12 国勢調査報告書

北海道統計書（H13）

上流域～朝日町、剣淵町、和寒町、士別市
 中流域～下川町、風連町、名寄市、美深町、音威子府村
 下流域～中川町、豊富町、幌延町、天塩町
 ※稚内市は集計から除く



図－１１ 天塩川流域の人口・世帯の推移

3-2 土地利用

天塩川流域は上川、留萌、宗谷の3支庁にわたり3市10町1村で構成され、流域面積は約5,590km²である。

土地利用の現況（H11）を地目別にみると、山林が北見山地、天塩山地の樹林を中心に、約70%を占め最も大きい。次いで平野部を中心に広がる田・畑が大きく、水田で約4%、畑地で約10%となっている。宅地は、名寄市街をはじめとして流域13市町村（稚内市は除く）の市街地に点在し、全面積の約0.6%である。

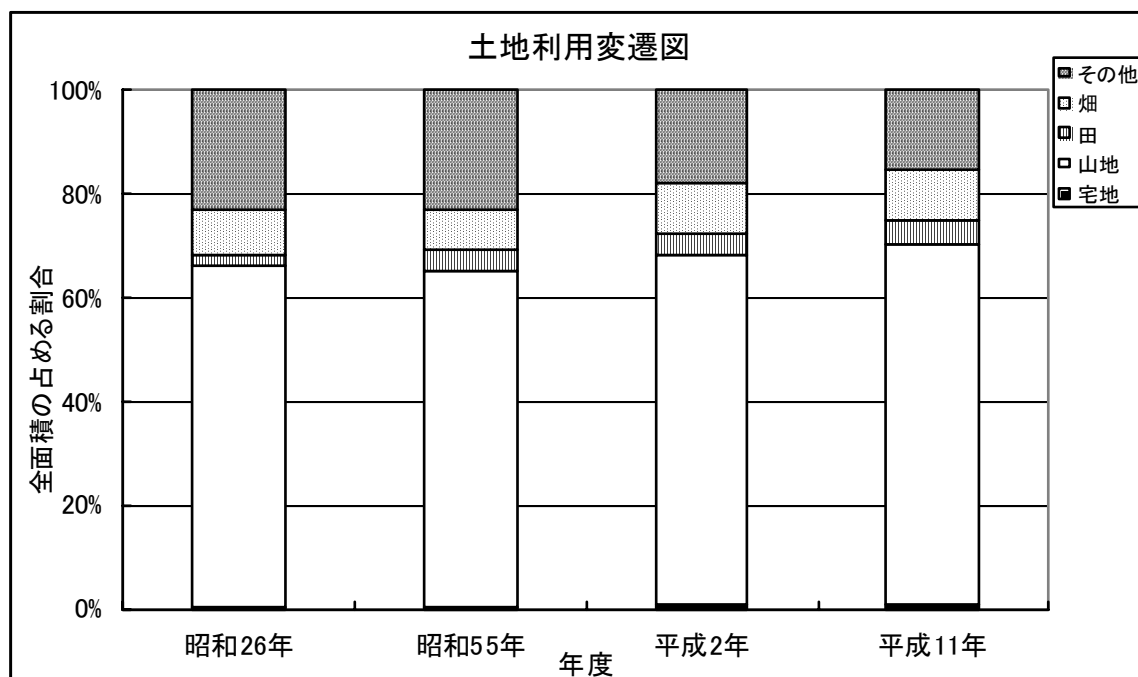
その他のうち原野、牧場、雑種地が約15.2%を占めている。

表-7 天塩川流域における土地利用の推移

(単位: km²)

年度	宅地	山林	田	畑	その他
昭和26年	15.00 (0.3%)	3723.34 (65.6%)	114.28 (2.0%)	512.76 (9.0%)	1,306.31 (23.0%)
昭和55年	23.89 (0.4%)	3654.69 (64.6%)	228.27 (4.0%)	459.02 (8.1%)	1,295.00 (22.9%)
平成2年	33.16 (0.6%)	3800.67 (67.3%)	239.45 (4.2%)	555.36 (9.8%)	1,017.73 (18.0%)
平成11年	36.68 (0.6%)	3935.50 (69.7%)	238.45 (4.2%)	579.02 (10.3%)	856.57 (15.2%)

資料: 北海道統計書
※稚内市は除く

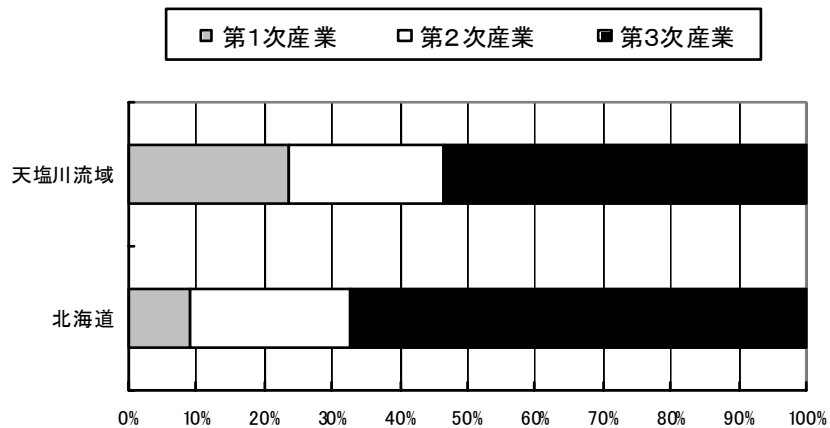


※稚内市は除く

3-3 産業経済

上流部は豊富な森林資源に恵まれており林業が盛んである。また、名寄盆地を中心に大規模な稲作及び畑作が行われている。製造業は、地元の木材や農産物を活用した製紙、農産物加工業が盛んである。中流部は畑作が中心であり麦類や雑穀・豆類及び甜菜を中心とした工芸農作物が多く生産されている。また、美深町は稲作の北限地帯である。他には、広大な土地を利用した酪農が盛んであり、河川敷にも多数の採草放牧地が存在する。下流部は中流部と同様に畑作と酪農が盛んである。河口では漁業が盛んであり、シジミ漁やサケ漁が行われており天塩町の鏡沼では毎年「鏡沼しじみまつり」が開催され、夏の名物となっている。

図-12 産業別就業者数の構成比

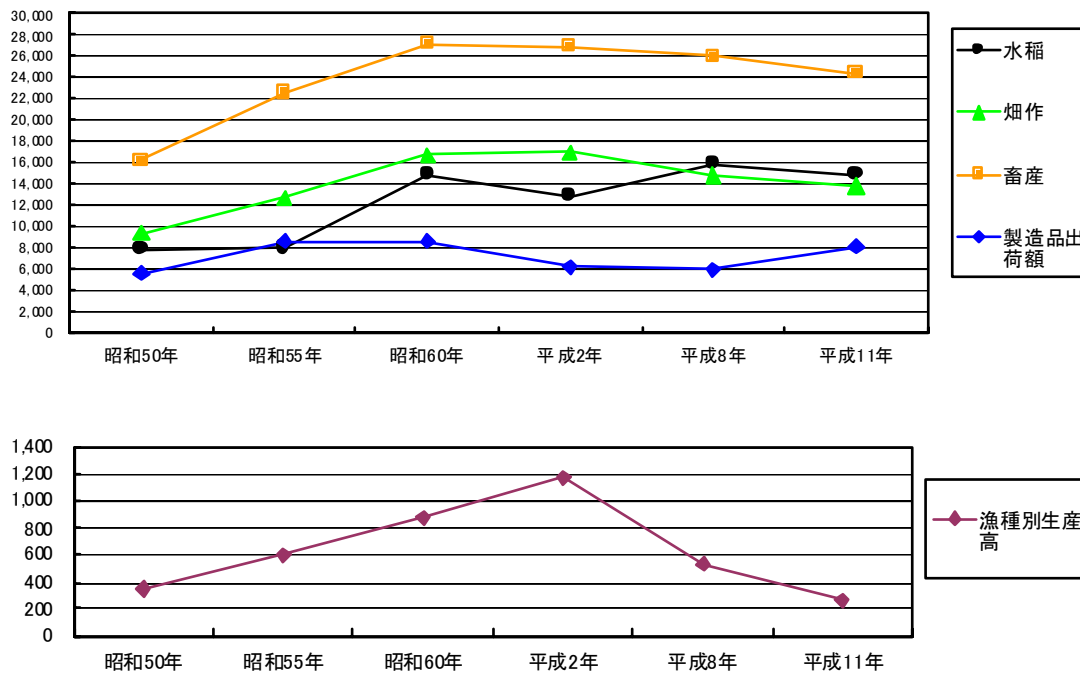


資料：国勢調査結果報告書（H7）

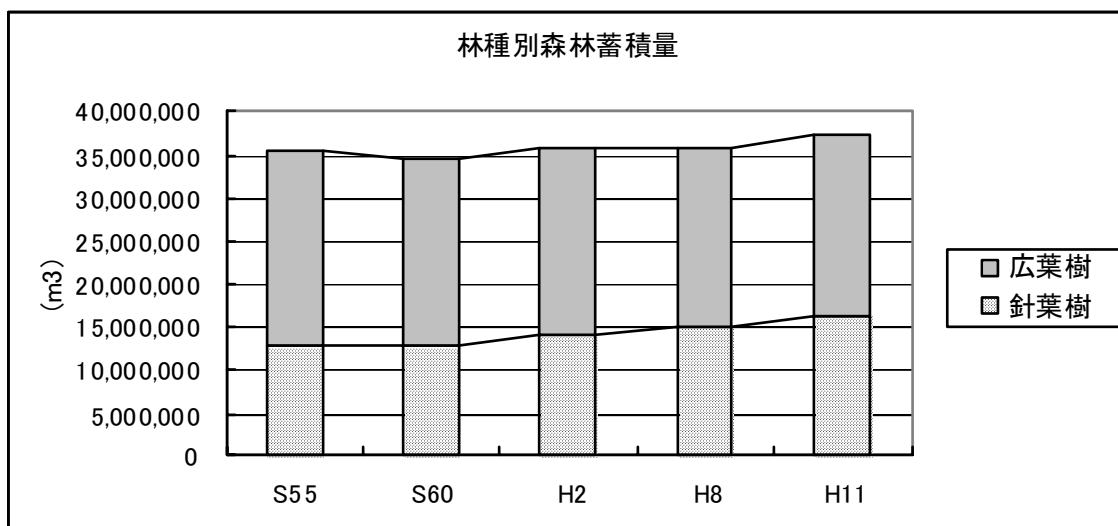
※稚内市は除く

(単位：百万円)

図-13-(1) 天塩流域の生産額の経年変化

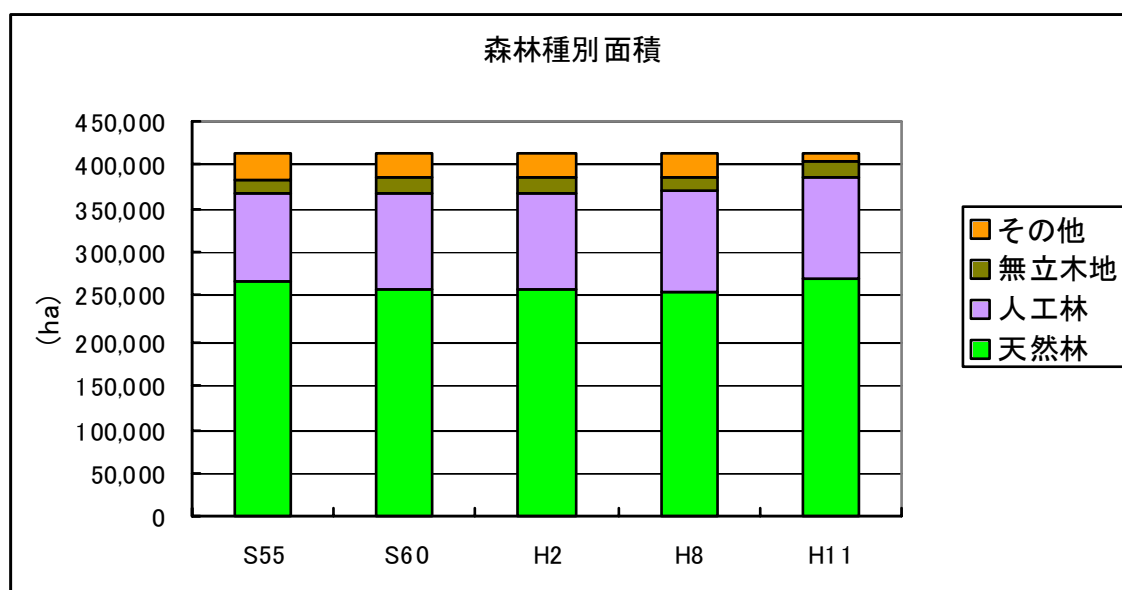


資料：北海道農林水産統計年報（農業統計市町村別編）
北海道工業統計、北海道市町村勢要覧
北海道水産現勢 ※稚内市は除く



※蓄積とは、立木の幹の部分の体積である。

図－１３－(２) 天塩川流域の森林蓄積量の推移



図－１３－(３) 天塩川流域の森林面積の推移

資料：北海道林業統計(北海道水産林務部)

天塩川流域は林野率が約 70%(総土地面積に占める森林面積の割合)である。また、天然林である広葉樹を主体にした森林蓄積量も増加傾向にあることから、この豊かな森林資源を背景とした林業が盛んである。

3-4 交通

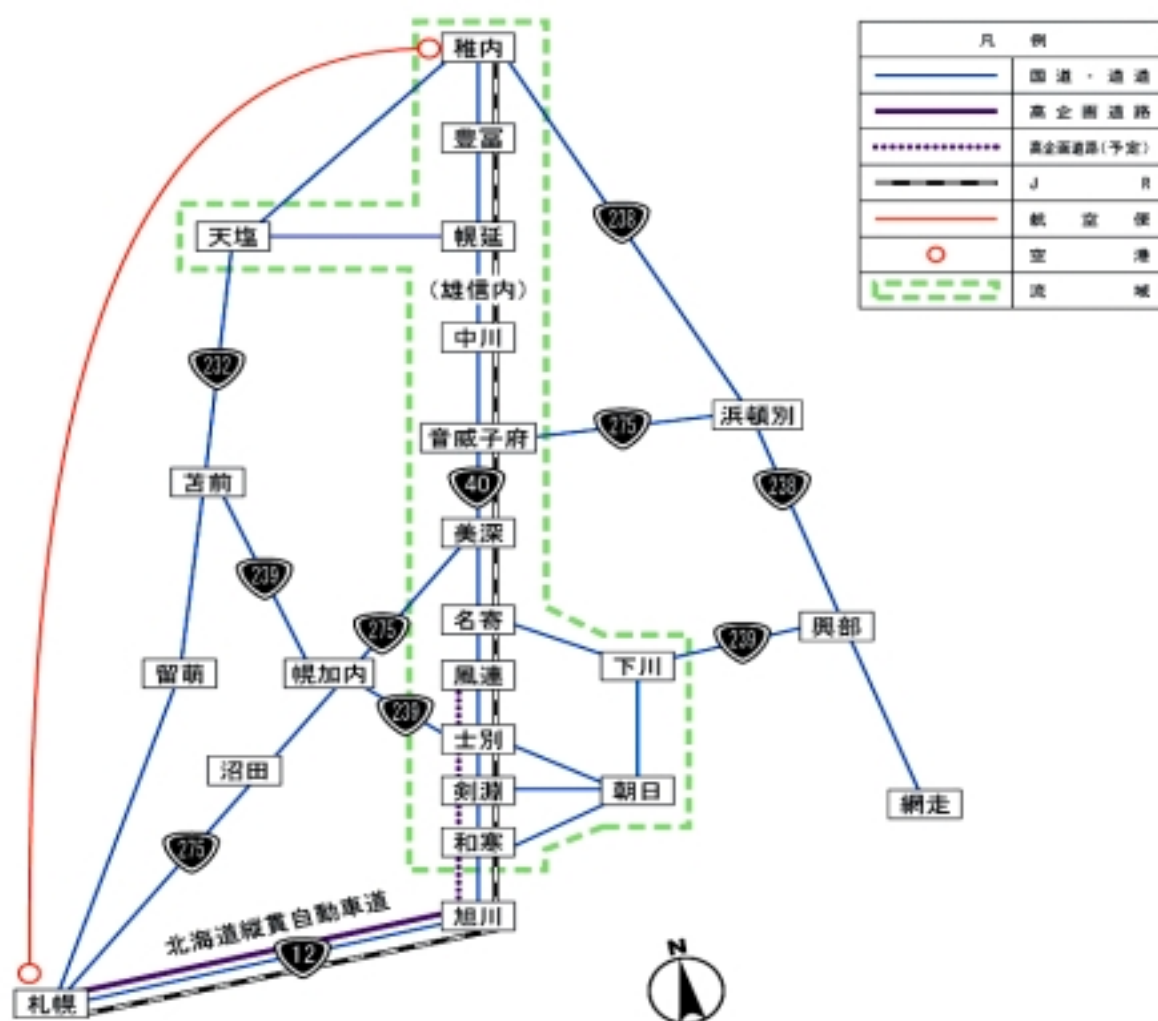
(1) 現況

天塩川流域は広大な地域に生産活動と結び付いた市街地が天塩川沿いに存在するという地理的な特性がある。交通の骨格を成す国道 40 号と JR 宗谷本線は、流域の大部分で天塩川と併走している。流域内の自動車保有率 639 台／千人（北海道自動車統計－H9）と全道平均 590 台／千人を若干上回り、自動車への依存度が極めて高く、道路は最も重要な役割を担っている。

また、道路ネットワークは国道 40 号が現在の天塩川流域の最も重要な道路となっている。道央札幌圏からは、主に道央自動車道から旭川を経由して、同地域へアクセスすることになるが、北海道縦貫自動車道が稚内まで予定路線として決定されており、その整備により広域的な自動車アクセス条件は飛躍的に高まると予想されている。

鉄道では、天塩川流域を JR 宗谷本線が縦貫しており、旭川－稚内間を結んでいる。

航空便は、稚内、旭川、札幌の空港より、観光客のほか、郵便物や農・海産物の輸送等に利用されている。



図－14 天塩川流域における交通ネットワーク図

（２）舟運の過去と現在

天塩川流域の開拓は、河口の天塩から上流へ向かって進められた。開拓初期には道路整備が入植に追いつかず、人や物資の移動には舟運が中心であった。

明治 31 年に上流の士別に屯田兵村が設置されてからは、村まで資材や食料を川舟で運送することを専門とする天塩川合同運漕会社も営業を始めた。

明治 43 年頃の記録によると、名寄から天塩河口の間に 20 ヶ所の船着場や多くの渡船場があった。各地の船着場一体には郵便局、巡査駐在所などの公共機関をはじめ、雑貨店、旅館、飲食店などが並び、賑わいを見せていたが、時代とともに渡船場は橋梁に変わっていき、舟運は昭和 32 年度までの運航であった。

現在は、産業としての舟運はないが、近年、川を利用したアウトドア・スポーツ、特にカヌーが盛んに行われるようになり、流域市町村各地にカヌークラブが誕生し、天塩川全域でカヌー利用やイベントが行われている。



天塩国上川郡上名寄村天塩川上流渡船場 明治 43 年

（北海道大学北方資料室蔵） 出典：天塩川治水史



北海道天塩港木材積取船入港之景(北海道立図書館蔵)

出典：天塩川治水史

4．水害と治水事業の沿革

4－1 既往洪水の概要

天塩川の洪水は、流域の位置、形状などの河川特性が大きく影響しており、洪水の形態は春季の融雪出水と夏季豪雨による洪水の2つがある。

最北の地にあるこの川は、上流が南で北へ流下する寒地河川で、冬期間は結氷し春先は上流から融け始め、まだ結氷中の下流へモロミとなって流下する。この現象は天塩川特有のもので、氷詰りの異常水位となって、大きな水害をもたらしてきた。加えて、年間総流出量の40%～60%は4月から6月にかけて流出し、この融雪出水は、日本海側北部の河川特有の現象であるが、気温の上昇と降雨が重なった場合、大きな水害になることがある。また、気温10℃、風速5.0m/sのとき1日に融ける雪の量は、雨量に換算すると45mm位といわれていて、融雪出水は極めてゆっくりと長期間にわたって流出してくる。

一方、夏季の洪水は集中豪雨に起因する出水が多いのが特徴となっている。強い雨が降るのは限られた期間で、それは、本州の梅雨が終わる頃の不連続線の北上する7月初めと、オホーツク海高気圧により寒冷前線の発生する7月後半、あるいはシベリア高気圧により寒冷前線が南下する8月下旬の3種類が挙げられ、これに低気圧や台風が伴うと更に雨量はおおくなり、水害が発生している。

次に、主要洪水の概要を示す。



冬期に結氷する天塩川(中川地区)

（１）昭和 7 年 8 月の洪水

この年は、8 月から 9 月にかけて 8 回の大雨に見舞われ、全道的に河川の洪水氾濫が相次ぎ、かつ低温、寡照で冷害凶作の年となった。

8 月 14 日午前 3 時頃より降り出した雨は、深夜に入って一層強烈をきわめて夜を徹して降り続いた。その結果、天塩川本流並びに各支流は一斉に増水氾濫し、流域のほとんどの町村が大災害を被った。天塩川水系の被害額は 23,725,219 円となっており、全道被害の 18%の被害が天塩川水系で発生した。

降雨量は中旬で上士別 174mm、下旬では上士別 143mm、名寄 124mm、音威子府 112mm が記録されている。

また、その被害は浸水家屋 383 戸、田畑の被害は浸水田 3,457ha、浸水畑 19,370ha となっている。



昭和 7 年 8 月洪水
(士別軌道天塩川九十九橋の流出)
出典：天塩川治水史

（２）昭和 14 年 7 月の洪水

7 月 28 日から 30 日にかけて道北地方を襲った大雨は、上川、留萌支庁管内にかなりの被害をもたらした。上音威子府で 197mm の降雨があり、天塩川水系の被害は、鉄道の浸水 5 ヶ所、橋梁流失 32 ヶ所、死者 1 人、道路浸水 1 ヶ所、浸水家屋 344 戸、田畑浸水 3,918ha となった。

（３）昭和 28 年 7 月の洪水

この年、6 月下旬九州をはじめ西日本一帯に大水害を発生させたが、北海道における 7 月から 8 月にかけて前後 3 度に及ぶ豪雨は、前後まれに見る洪水となった。特に上川地方では降水量が平年の 4 倍以上にも達した。これは 7 月 7 日より 9 日までの第 1 次豪雨、19 日より 22 日までの第 2 次豪雨、及び 31 日より 8 月 1 日にかけての第 3 次の豪雨が、前後 3 回にわたり約 10 日間の間隔をおいて集中的に道北、道南に発生した結果によるものである。

天塩川流域の降雨量は上士別で 149mm、和寒 136mm、名寄 134.8mm であり、驟雨性といわれ、その強さの変動の度合いは大きかった。被害の状況は、25 日から 27 日までに河口で 101.3mm

を記録し、死者 2 名、農地被害 1,605ha、道路、河川決壊 23 ヶ所となっている。また、上流部では死傷者 6 名を出し、家屋流失半壊 31 戸、同浸水 1,721 戸、堤防流失損壊 196 ヶ所、氾濫面積は 8,038ha に及んだ。



昭和 28 年 8 月洪水
(中川村大富地先の浸水状況)

出典：天塩川治水史

(4) 昭和 30 年 8 月の洪水

この年、7 月の上旬から 8 月の下旬に至る 2 ヶ月間に 4 回にわたって大きな洪水に見舞われた。とりわけ 7 月 2 日～4 日にわたる降雨は、前線が北上し大雨をもたらした。降雨量は上士別 173mm、和寒 167mm、中士別 195mm、一の橋 185.1mm、名寄 134mm、また、8 月 19 日には辰根牛 111.5mm、名寄 149mm と上流全般に豪雨があり、和寒以北の 9 市町村に災害救助法が適用されるという稀にみる大洪水を蒙ったのである。7 月の被害は、死者 3 人、負傷者 3 人、家屋流失 43 戸、家屋床上浸水 7,920 戸、床下浸水は 29,242 戸に及び、氾濫面積 5,907ha、農地被害 2,848ha、橋梁流失 67 ヶ所、損壊 37 ヶ所、堤防決壊は 75 ヶ所、損壊 66 ヶ所、道路決壊 113 ヶ所、8 月の被害は家屋浸水 1,160 戸、同半壊 17 戸、氾濫面積 4,927ha であったと記録されている。被害額は 268,800 千円に達し、この嘗平の水位は計画高水位 18.87m にあと 0.13m と迫る大出水であった。この洪水によって計画高水流量を見直す契機となったのである。



昭和 30 年 8 月洪水
(名寄川の洪水による鉄道流失状況)

出典：天塩川治水史

(5) 昭和 48 年 8 月の洪水

台風 10 号崩れの低気圧が北上し、8 月 18 日夜半から日本海を経て道央を通過した。上川管内北部を中心に 40mm を越す大雨が降った。その状況は、低気圧の接近に伴い 17 日 17 時過ぎから降り始め、18 日 9 時までに名寄 96.5mm、岩尾内 77.5mm、下川サンル 79.0mm の雨が降り続いた。低気圧の中心が近づき前線が活発化した 12 日頃から雨は次第に強くなり、名寄では 1 時間で 20mm 前後の大雨が 3 時間も続き、総雨量は名寄 240.6mm、岩尾内 165.5mm に達し、美深橋では計画高水位にあと 0.15m までに迫った。

出水状況は、名寄大橋で 18 日 21 時に指定水位 92.40m (流量 1,218 m^3/s)、真勲別で水位 103.6mm (流量 1,115 m^3/s) となり、誉平では、19 日の 15 時には警戒水位 16.50m を超え、17.16 m (流量 3,156 m^3/s) の水位を記録した。

被害状況は、上流域では国鉄名寄～美深間が冠水で不通となったほか、各地で多大の被害が発生し、名寄では自衛隊の災害出動を要請し、土のう積などを行った。名寄川でも国鉄名寄～下川間が一部不通となり、また、小河川氾濫を含め、市道などの決壊や、河川工事災害 2 ヶ所も発生した。このほか、床上浸水 337 戸、床下浸水 1,123 戸、全壊 3 戸、半壊 3 戸、田の浸水 3,128ha、畑浸水 9,647ha、河川被害 33 ヶ所、道路決壊 2 ヶ所、被害額 1,937 百余万円を記録した。



昭和 48 年 8 月洪水
(名寄市十線川の溢水氾濫状況)
出典：天塩川治水史

(6) 昭和 50 年 8 月の洪水

8 月 22 日アムール河下流域の発達した低気圧から、南に伸びる寒冷前線が、22 日夜から 23 日夜半にかけ北海道を北西から南西に縦断するような形で停滞し、これに北上してきた台風 6 号の影響が加わって、雷を伴った強い雨となり、24 日朝まで続いた。これによる降雨は和寒 203mm、美深 119mm と上流域の降雨が多かった。

天塩川の水位は、天塩川本川の名寄大橋では、23 日 8 時には 93.43m (流量 1,500 m^3/s) のピークを記録した。誉平では、24 日指定水位 16.40m を超え 22 時には 16.76m (流量 2,781 m^3/s) のピークに達した。

被害状況をみると、上流で床上浸水 287 戸、床下浸水 1,558 戸、農地被害 5,531ha に及んだ。他に堤防損壊 219 ヶ所、道路橋梁損壊 57 ヶ所であった。下流では国根府、安牛、天塩町北川口、振老、サロベツ、幌延地区の外水氾濫、雄信内、安牛地区の内水氾濫があった。被害総額は 523,760 千円と記録されている。



昭和 50 年 8 月洪水
(天塩川左岸 箴島左岸築堤の
溢水氾濫状況 音威子府村)



昭和 50 年 8 月洪水
(天塩川 音威子府村の浸水状況)

出典：「水 害」

(7) 昭和 56 年 8 月の洪水

① 天塩川上流

8 月 3 日から 6 日にかけて、北海道を縦断する形で寒冷前線が停滞しつづけたため、天塩川全流域を覆うような豪雨をもたらした。雨量は名寄大橋 248mm、朝日 280mm、剣淵 301mm、下川パンケ 268mm を記録した。

天塩川の基準地点である誉平ではピーク水位 17.24m を記録し、流量は $3,758\text{m}^3/\text{s}$ となり、計画高水流量 $3,800\text{m}^3/\text{s}$ に迫る大出水である。また、誉平での流域平均 3 日雨量は 232.9mm となった。

被害状況は、床下浸水 408 戸、床上浸水 73 戸、田・畑の浸水 14,108ha、土木被害は河川 187 ヲ所、道路損壊 147 ヲ所、橋梁損壊 18 ヲ所、被害額は 7,503,842 千円であった。また、増水による浸水防止及び、浸水の恐れのある箇所に土俵積止するため、ポンプ排水を 27 ヲ所で実施し、それぞれ水防活動を行った。



昭和 56 年 8 月洪水
(天塩川右支川名寄川 内水による
浸水のため住民避難 名寄市徳田白樺団地)



昭和 56 年 8 月洪水
(天塩川 音威子府市街の浸水状況)

出典：「水 害」

② 天塩川下流

8月3日昼頃から夕方にかけて、留萌管内北部の天塩、幌延に発達した低気圧と前線の影響で30～50mmの強い雨が降った。5日に入り台風12号の影響も加わって断続的に降りつづき、6日未明までに天塩大橋 155mm、円山 131mm、新間寒別橋 110.5mm を記録し、天塩大橋地点での流域平均3日雨量 214.7mm となった。

天塩大橋における流量は $3,940\text{m}^3/\text{s}$ であり、既往最高の記録となった。

被害状況を見ると、国根府、サロベツ、北川口の無堤地区の外水による氾濫 7,684ha、東ウブシ地区などの内水氾濫 1,184ha であり、総合氾濫面積は 8,868ha に及んだ。

天塩町、幌延町の一般被害は共に農作物で作付面積の17%に当たる被害を蒙り、被害総額は 276,000 千円となっている。このほか、辰根牛地区などで土俵の水防活動が実施されたが、床上浸水 8 戸、床下浸水 34 戸、農地の被害は畑で 4,492ha、河川堤防損壊 3 ヵ所、道路橋梁損壊 2 ヵ所などの被害があり、被害額は 565,841 千円に達した。



昭和 56 年 8 月洪水
(天塩川右支川サロベツ川左岸
幌延町南下沼地区の冠水した農家)

出典：天塩川治水史

(8) 平成 6 年 8 月の洪水

北海道中部に活発な前線が停滞し、8月14日未明から深夜にかけ中部以北を中心に時間雨量 30～50mm の強い雨が降り、14日1時から14日24時までの総雨量は朝日 109mm、士別 129mm、名寄 102mm となった。

出水状況は、名寄大橋で15日5時には、警戒水位 93.30m に迫る 93.08m (流量 $1,388\text{m}^3/\text{s}$) のピークに達し、誉平では、15日18時に 13.80m (流量 $1,765\text{m}^3/\text{s}$) のピークに達した。被害状況は、家屋浸水 114 戸、氾濫面積 1,067ha を記録した。

表－8 主 要 洪 水 と 洪 水 被 害

洪水発生年月日	気象原因	代表地点雨量 (mm/3日)	誉平地点 流量 (m ³ /s)	被 害 等
明治37年6月 ～7月	台風・前線	102(名寄)		氾濫面積 1,036ha
明治44年8月16日 ～17日	台風	130(士別) 91(上名寄) 105(誉平)		上川支庁管内 田畑被害面積 6,403ha
大正11年8月21日 ～25日	台風	104(士別) 103(美深) 75(音威子府)		上川支庁管内 浸水家屋3,010戸、同流失60戸、 浸水水田3,921ha、同流失139ha、 浸水畑5,430ha、同流失902ha
昭和7年8月29日 ～9月1日	低気圧・ 停滞性前線	143(上士別) 124(名寄) 112(音威子府)		上川支庁管内 浸水家屋383戸、浸水水田3,457ha、 浸水畑19,370ha
昭和14年7月28日 ～30日		197 (上音威子府)		上川支庁管内 死者1名、浸水家屋180戸、 田畑浸水1,984ha
昭和27年7月25日 ～26日	低気圧	92.3(円山)		浸水家屋1,104戸(同流失2戸、 同半壊8戸)、浸水田畑400ha、 橋梁流失15箇所
昭和28年7月27日 ～8月2日	前線	101(河口) 95(名寄)	1,620	死傷者8人、家屋流失半壊31戸、 同浸水1,721戸、氾濫面積9,643ha
昭和30年7月3日 ～5日	低気圧	195(上士別)	2,200	家屋浸水2,125戸、農地被害2,848h a、氾濫面積5,907ha(天塩町・幌延 町)
昭和30年8月17日 ～21日	前線	111(辰根牛) 149(名寄)	1,510	家屋浸水1,160戸、同半壊17戸、 氾濫面積4,927ha
昭和45年10月24 日 ～26日	低気圧	205(上問寒別)	1,250	問寒別川流域が氾濫家屋浸水193 戸、農地被害2,511ha
昭和48年8月16日 ～18日	台風・前線	230(名寄)	3,210 洪水氾濫有	家屋浸水1,255戸、同半壊6戸、 氾濫面積12,775ha
昭和50年8月21日 ～24日	台風・前線	211(士別) 157(名寄)	2,790 洪水氾濫有	家屋浸水2,642戸、氾濫面積11,640 ha、農地被害5,531ha
昭和50年9月6日 ～8日	低気圧	109(円山)	2,700	家屋浸水117戸、氾濫面積4,253ha、 農地被害505ha
昭和56年8月3日 ～7日	低気圧・ 前線・台風	283(士別) 226(名寄)	3,760 洪水氾濫有	家屋浸水546戸、氾濫面積15,625h a、農地被害14,070ha
平成6年8月12日 ～15日	前線	130(士別)	1,770	家屋浸水114戸、農地被害481ha

() 内は観測所名

4-2 治水事業の沿革

天塩川の治水計画は、大正 8 年に天塩川治水計画が立案されたのが始まりである。次いで昭和 9 年には昭和 7 年 8 月の洪水を機に第 2 期拓殖計画の一環として計画高水流量を $4,174\text{m}^3/\text{s}$ とし、智恵文、名寄付近の屈曲部に着手したことに始まる。次いで、昭和 12 年から士別、名寄付近等の築堤を実施した。

昭和 21 年に第 2 期拓殖計画が終わるまでに 6 捷水路を完成させ士別、名寄付近の築堤等を進めていった。

昭和 21 年 7 月および昭和 28 年 7 月洪水を契機として計画的改修工事を進める必要性が高まり昭和 28 年度以降改修総体計画が策定された。その後、昭和 30 年 7 月洪水に鑑み、河川調査の進展にともない一部計画に修正が加えられつつ治水事業が進められ、昭和 38 年度以降改修総体計画へと移行していった。

また、昭和 39 年 7 月、新たな河川法が制定され、天塩川は昭和 41 年 3 月に一級河川に指定されるに至り、同 41 年に岩尾内ダム建設を含めた天塩川工事実施基本計画が策定された。基準地点誉平における基本高水のピーク流量を $4,400\text{m}^3/\text{s}$ とし、このうち岩尾内ダム等により $600\text{m}^3/\text{s}$ を調節して、計画高水流量を $3,800\text{m}^3/\text{s}$ とする計画である。

この計画に基づき、岩尾内ダムの建設（昭和 46 年完成）、河川改修工事を実施していった。しかしながら、昭和 48 年 8 月、昭和 50 年 8 月、昭和 56 年 8 月と数度にわたり、計画規模に迫る、あるいはこれを上回る大出水が生じたことから昭和 62 年に天塩川工事実施基本計画を改訂し、基準地点誉平における基本高水のピーク流量を $6,400\text{m}^3/\text{s}$ とし、このうち岩尾内ダム等により $700\text{m}^3/\text{s}$ を調節して、計画高水流量を $5,700\text{m}^3/\text{s}$ とする計画とした。この計画に基づき、多目的ダムとして岩尾内ダムの建設、コクネツ捷水路の開削、河道の掘削、浚渫、堤防の新設及び拡築、護岸の設置等を実施してきた。

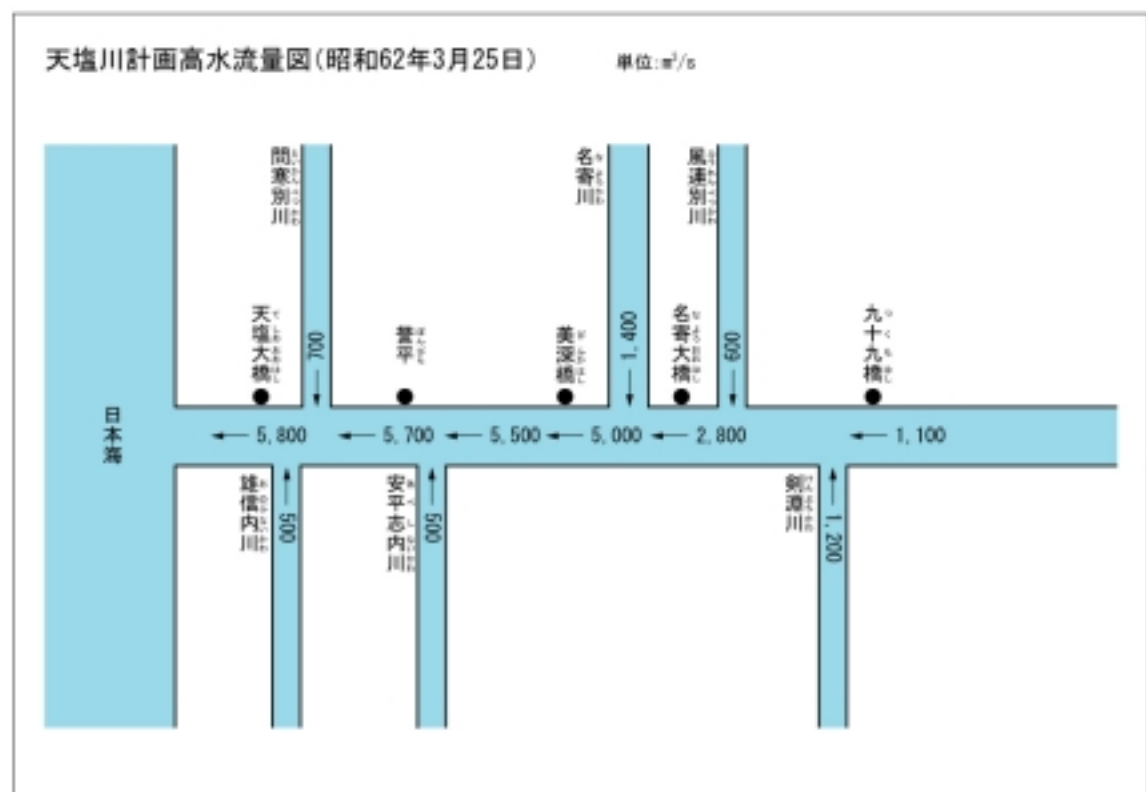
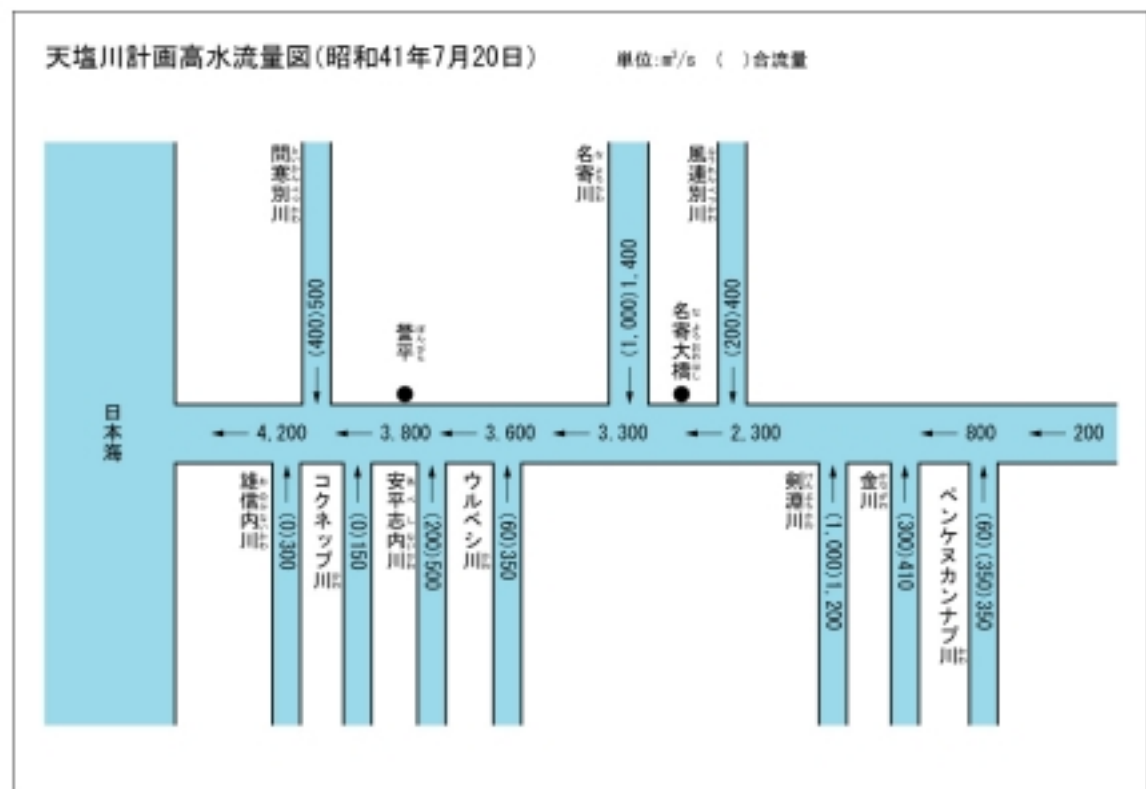


昭和 9 年に着工された智恵文第 1 新水路
(写真手前)



昭和 46 年に完成した岩尾内ダム

出典：旭川開発建設部



図－15 天塩川計画高水流量図

表－9 基本高水のピーク流量等一覧表

河川名	基準地点	基本高水のピーク流量(m^3/s)	洪水調節施設による調節流量(m^3/s)	河道への配分流量(m^3/s)
天塩川	名寄大橋	3,300	500	2,800
〃	誉平	6,400	700	5,700
名寄川	真勲別	1,800	400	1,400

4－3 過去の地震災害と地震対策

(1) 過去の地震災害

天塩川流域が位置する北海道北部は全国的にも地震が少ない地域である。天塩川流域では流域内においてマグニチュード 4 以上の地震は記録に残っている限り図示した地点を震源とするただ一つで昭和 43 年 7 月 17 日に豊神（問寒別川上流）において震度 5 を観測している。上中流部においては昭和 7 年 2 月 1 日音威子府で震度 4 が記録されているが、それ以外に震度 4 以上の地震は観測されていない。

・過去の津波の発生状況

昭和 15 年 8 月 2 日 留萌沖

津波の最大の高さ 2.0m（天塩）

海岸線の番屋十数戸流出 死者 8 名

昭和 46 年 9 月 6 日 サハリン西方沖

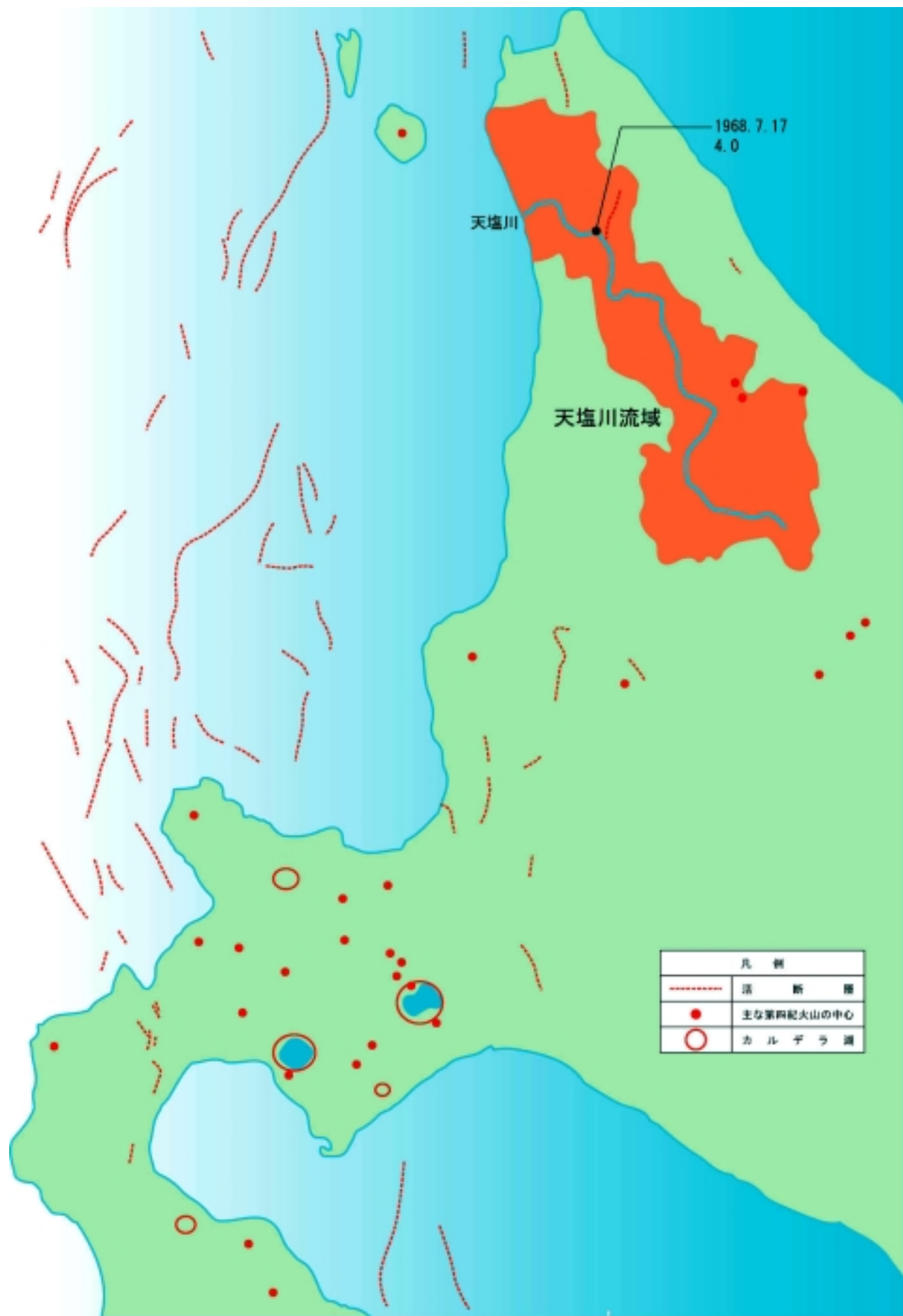
津波の最大の高さ 0.2m（天塩）

昭和 58 年 5 月 26 日 日本海中部地震

津波の最大の高さ 0.54m（羽幌）、0.24m（稚内）

平成 5 年 7 月 12 日 北海道南西沖地震

津波の最大の高さ 0.98m（羽幌）、0.44m（稚内）



出典：日本活断層図

図－16 天塩川周辺の活断層

(2) 想定地震と地震対策

北海道地域防災計画(北海道防災会議)によると、天塩川流域内に影響を及ぼす想定地震は、留萌沖と北海道東部沖地震である。

表－１０ 地震発生内容

地域名	発生位置	規模	流域内の影響
留萌沖	北緯 44 度東経 141 度	M7.0	全流域で震度 4 程度
北海道東部	北緯 42.5 度東経 146 度	M8.25	中上流域で震度 4 程度

地震により想定される被害は、川沿いに泥炭地や氾濫原堆積物が分布していることから下流部での液状化があげられ、基礎地盤のドレーン等の対策が行われている。



図－１７ 想定地震の震央位置

5．水利用の現状

5－1 水利用の現状

(1) 水利用の概要

天塩川は、古くから農業用水を主体として水利用がなされてきた。

農業用水としては約 29,400ha の耕地に 77.6m³/s が利用されている。

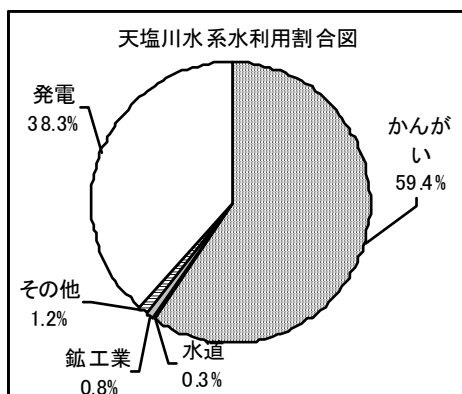
天塩川における利水の現況は、表－11 に示すとおりであり、農業用水をはじめ工業用水、上水道用水などに広く使われており、さらに水力発電にも積極的に利用されている。

使用水量については、発電を除けば大半が農業用水であり、地域的には、名寄市、士別市に水利用が集中している。

表－11 天塩川水系水利用の現況（法定河川内の許可水利）

名 称	最大取水量（m ³ /s）	件 数	摘 要
かんがい	77.57	281 件	
水道	0.33	6 件	
鉱工業	1.08	3 件	
その他	1.57	14 件	
発電	50.13	3 件	
合 計	130.68	307 件	

出典：「一級水系水利権調書」北海道開発局

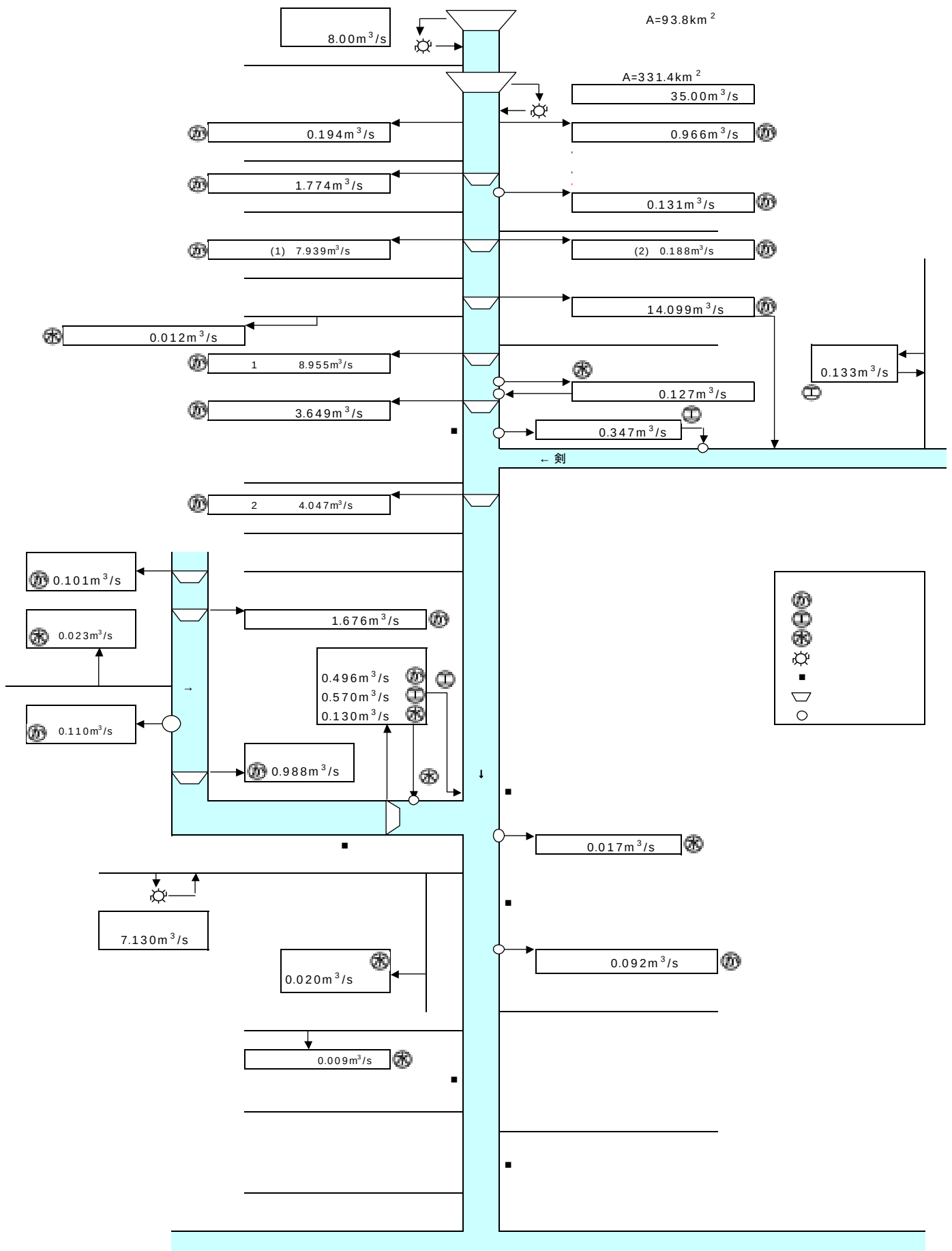


図－18 水利用割合図



士別市剣渕川合流点周辺に広がる水田地帯

出典：旭川開発建設部



※「一級水系水利権調査」北海道開発局(平成13年3月)より

図－１９ 天塩川水系取排水図

（２）農業用水

天塩川本川最下流の取水施設は、河口から 120km 上流の美深町にある西里揚水機場である。美深町から下流の地域では、ほとんど水稲作付けは行われていない。

水田のほとんどは、名寄盆地に集中しており大規模頭首工等も同盆地に集中している。かんがい普通期における取水量が、1 m³/s を越える取水施設は本川に 7 件ある。また、施設の統廃合が進んでいる。法定河川からの取水により賄われる耕地かんがい面積は、約 29,400ha に及ぶ。

（３）水道用水

名寄市水道は名寄川真勲別頭首工から最大約 11,200m³/日、士別市水道は天塩川から最大約 11,000m³/日の取水している。その他の地域・陸上自衛隊・事業所等は、簡易水道等をもって賄っている。

（４）工業用水

天塩川流域には澱粉工場、雪印等の乳製品加工工場、製粉・製菓・製パン等の食品加工工場等が点在している。名寄川真勲別頭首工から最大約 50,000m³/日の取水を行う北陽製紙工業用水が最大であり、表－11 中の鉱工業用水の約 5 割を同工場が占める。

（５）その他・発電用水

天塩川流域には、岩尾内発電所・ポンテシオ発電所・仁宇布川発電所の 3 発電所があり、総最大出力約 26,000kw の電力供給が行われている。

5-2 渇水被害の概要

天塩川では過去、昭和 51 年、昭和 55 年、平成 5 年等、積雪量の不足や夏場の雨不足による渇水被害をうけており、昭和 53 年には士別市長を会長とする「天塩川水系天塩川上流士別地区渇水調整協議会」が設立されている。

近年においては平成 5 年の渇水が深刻で、7 月の雨不足により水稻をはじめとする農作物に被害がでるとともに、岩尾内ダム貯水量が常時満水容量の 3%まで低下した。

このため、渇水協議会において 35%の農業用水取水制限を決定し、7 月末から渇水対策を実施していたが、ついに岩尾内ダムが枯渇し、農業用水の取水がストップする事態となった。

平成 5 年 8 月 5 日 北海道新聞社

平成 5 年 8 月 13 日 読売新聞社



出典:渇水報告書

6. 河川の流況及び水質の現状

6-1 河川流況の現状

天塩川の昭和 37 年～平成 12 年の 39 年間における誉平の流況は、表-12 に示すとおり、平均渇水流量は $46.04\text{m}^3/\text{s}$ 、平均低水流量が $76.13\text{m}^3/\text{s}$ 、美深橋の流況(昭和 43 年～平成 12 年の 33 年間)は、表-13 に示すとおり、平均渇水流量は $30.71\text{m}^3/\text{s}$ 、平均低水流量が $52.63\text{m}^3/\text{s}$ である。

表－１２ 菅平地点における観測流況表

NO	年	流 量 (m ³ /s)						
		最 大	豊 水	平 水	低 水	渇 水	最 小	年 平 均
1	昭和 37 年	993.10	164.10	140.20	124.70	83.60	76.10	174.40
2	38	2489.40	192.90	130.00	113.60	74.00	68.20	213.20
3	39	1679.20	353.00	220.80	102.90	65.20	63.50	258.40
4	40	1454.10	303.80	212.50	125.30	57.70	44.70	271.40
5	41	1690.31	273.93	129.94	124.34	89.69	60.69	269.58
6	42	1508.06	159.56	117.31	84.30	48.91	40.75	182.45
7	43	834.93	174.53	101.19	71.21	33.18	27.50	153.42
8	44	1597.75	215.40	146.98	104.76	58.44	44.41	214.76
9	45	1967.17	199.88	91.55	58.64	19.52	13.02	224.34
10	46	1238.05	238.76	115.09	84.49	44.51	26.73	198.42
11	47	1357.81	161.19	119.52	72.93	41.99	31.36	166.52
12	48	3034.38	260.35	135.46	94.50	66.16	40.30	258.69
13	49	1803.53	259.42	125.66	82.24	52.36	41.26	249.02
14	50	2692.29	253.39	115.51	75.08	22.14	19.98	260.58
15	51	1449.99	108.04	68.27	50.57	33.56	23.98	138.32
16	52	1730.00	176.28	78.25	67.63	48.73	41.19	205.66
17	53	1178.86	156.07	78.01	57.14	40.21	14.72	152.22
18	54	1552.45	218.90	98.36	53.90	35.36	22.77	191.72
19	55	1296.73	167.58	84.60	53.02	36.02	23.46	174.55
20	56	3360.95	249.13	132.56	66.86	35.53	31.98	226.82
21	57	1589.93	164.48	85.57	57.96	37.45	31.39	195.24
22	58	1575.62	171.74	111.11	76.03	39.48	14.59	178.98
23	59	917.98	156.22	86.97	49.62	21.79	16.92	141.30
24	60	1166.99	173.53	109.31	66.10	38.65	29.38	169.66
25	61	1493.20	175.48	87.39	63.89	36.65	24.98	183.20
26	62	2026.85	187.15	119.38	77.21	52.69	44.19	200.59
27	63	1774.19	198.19	96.26	53.87	32.91	22.40	189.88
28	平成元年	1048.55	217.16	114.17	66.70	40.03	22.97	169.57
29	2	1174.94	190.56	105.81	70.70	40.11	30.43	164.15
30	3	1265.19	184.21	108.52	78.70	39.81	21.70	167.50
31	4	2221.83	254.84	130.24	76.82	56.65	43.38	199.41
32	5	675.31	168.20	96.05	63.34	37.55	31.32	151.49
33	6	1764.67	234.36	109.25	68.25	46.16	39.72	210.94
34	7	1024.42	241.18	102.98	71.53	45.79	34.88	181.96
35	8	1181.56	194.25	114.41	69.88	52.78	41.13	179.69
36	9	1636.06	201.42	96.36	74.89	46.69	32.57	191.49
37	10	1255.68	165.69	86.04	67.94	44.78	35.69	162.43
38	11	1652.87	180.67	115.58	77.54	52.86	36.39	218.30
39	12	1985.78	204.17	120.61	70.17	45.78	36.50	185.82
観測期間内平均値		1598.48	203.84	113.79	76.13	46.04	34.54	195.54
観測期間内最大値		3360.95	353.00	220.80	125.30	89.69	76.10	271.40
観測期間内最小値		675.31	108.04	68.27	49.62	19.52	13.02	138.32

表－１３ 美深橋地点における観測流況表

NO	年	流 量 (m ³ /s)						
		最 大	豊 水	平 水	低 水	渇 水	最 小	年 平 均
1	昭和 43 年	770.30	111.17	66.34	34.62	21.25	19.48	99.20
2	44	1250.28	154.80	88.54	23.55	8.83	3.18	129.85
3	45	1128.61	168.26	80.80	49.38	12.35	10.00	161.74
4	46	839.88	159.58	90.87	76.25	46.45	40.33	148.08
5	47	926.33	134.96	85.98	57.02	35.96	26.09	128.18
6	48	2298.96	176.26	96.60	65.51	47.34	33.42	190.42
7	49	1174.79	171.84	95.03	72.77	42.48	31.78	188.51
8	50	2291.12	157.41	88.88	68.31	43.08	38.43	180.85
9	51	1002.94	89.11	58.76	47.33	25.73	9.58	108.60
10	52	1438.59	112.78	60.71	42.54	29.06	23.32	144.16
11	53	1092.02	118.43	63.29	43.62	26.72	20.45	108.11
12	54	993.48	150.63	69.58	40.11	25.16	17.65	130.00
13	55	947.16	133.84	61.47	41.30	23.49	15.87	118.97
14	56	2718.54	191.44	97.69	51.58	24.99	20.65	165.05
15	57	1056.29	117.90	65.44	43.61	24.00	19.36	130.75
16	58	958.02	127.56	94.90	62.45	34.22	20.25	125.01
17	59	720.86	111.72	68.99	38.45	18.26	13.33	103.26
18	60	757.46	121.98	82.72	49.99	29.90	7.48	122.21
19	61	986.38	129.96	71.50	49.05	23.18	11.46	130.51
20	62	1689.01	147.06	95.62	64.51	42.20	29.52	153.70
21	63	1101.68	155.36	73.32	41.19	18.41	13.03	133.46
22	平成元年	721.27	157.05	94.39	50.45	33.88	25.31	124.17
23	2	913.13	139.98	80.13	52.01	31.72	24.70	116.88
24	3	980.56	131.45	89.46	66.82	28.54	11.17	122.49
25	4	1570.85	179.84	102.61	63.24	46.97	27.37	147.52
26	5	505.18	115.30	68.42	47.68	26.99	16.45	105.12
27	6	2156.38	158.59	86.39	51.28	31.94	20.67	151.37
28	7	733.29	161.84	79.19	52.76	31.78	21.81	127.77
29	8	785.58	145.09	89.41	55.90	36.68	21.99	128.48
30	9	880.03	137.98	77.01	58.67	30.86	19.20	135.66
31	10	1001.57	142.23	71.69	58.11	38.08	23.81	124.29
32	11	1228.25	128.93	84.75	60.19	38.16	18.79	153.04
33	12	1866.30	139.86	90.29	56.61	34.90	23.39	138.98
観測期間内平均値		1196.52	141.82	80.93	52.63	30.71	20.59	135.65
観測期間内最大値		2718.54	191.44	102.61	76.25	47.34	40.33	190.42
観測期間内最小値		505.18	89.11	58.76	23.55	8.83	3.18	99.20

6-2 河川水質の現状

(1) 環境基準

天塩川水系における水質汚染に係わる環境基準の類型指定は、水質汚濁防止法に基づく北海道の条例により次の通りである。

表-14 環境基準類型指定状況（昭和47年4月1日 北海道告示）

水域の範囲	類型	達成期間	環境基準地点名
天塩川上流、ペンケヌカナンブ川合流点から上流 (ペンケヌカナンブ川を含む)	AA	イ	朝 日 橋
天塩川中流、ペンケヌカナンブ川合流点から土別取水口まで	A	イ	中 士 別 橋
天塩川下流、(1) 名寄川の名寄取水口から上流	A	イ	真 勲 別 頭 首 工
(2) パンケナイ川の全域	A	イ	下 中 川 捕 獲 場
(3) 剣淵川の犬牛別川合流点から上流	A	ロ	1 2 線 橋
(4) 土別取水口犬牛別川合流点及び名寄取水口下流	B	ロ	中 川

注) 1. 達成期間の「イ」は、類型指定後直ちに達成すること。

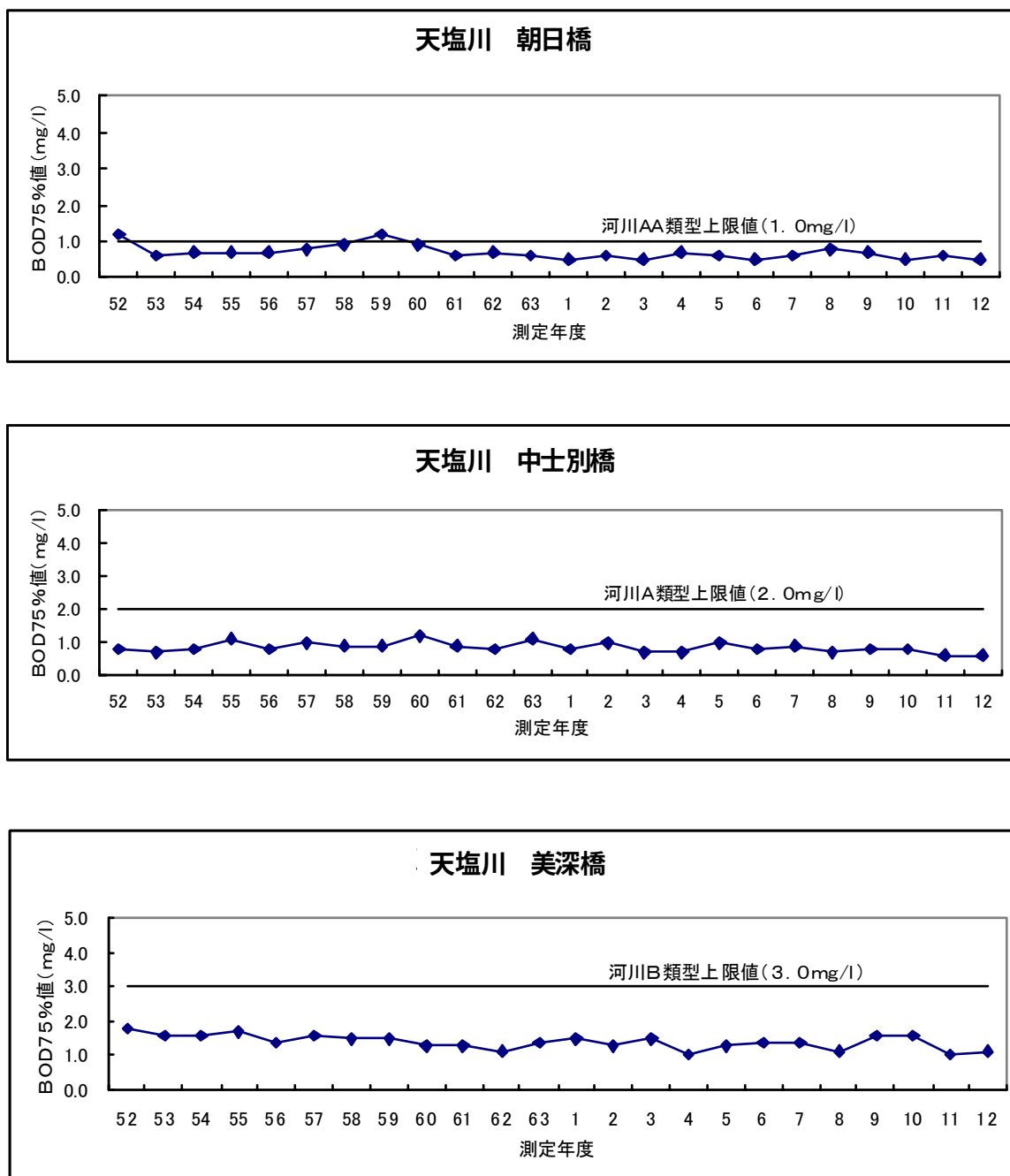
2. 達成期間の「ロ」は、類型指定後5年以内で可及的、速やかに達成すること。



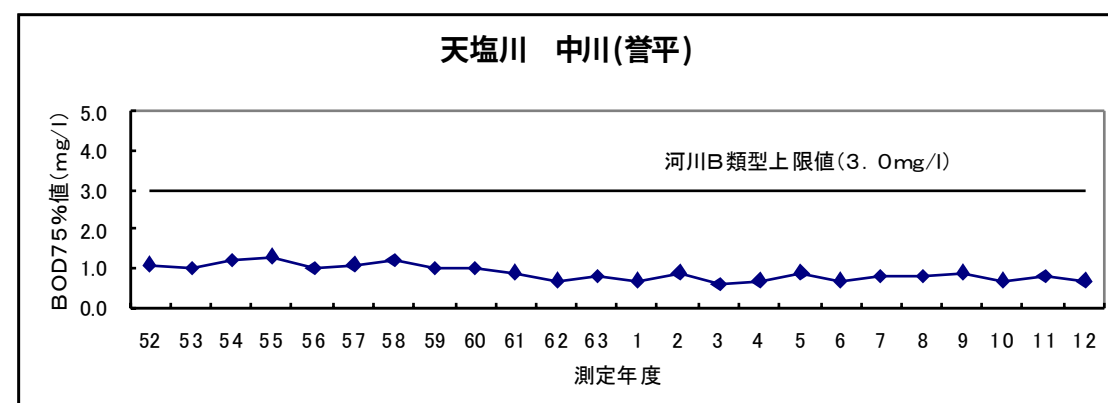
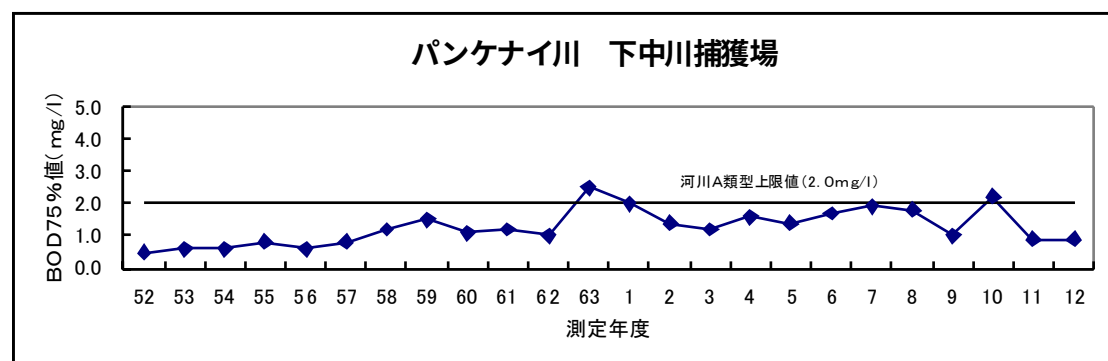
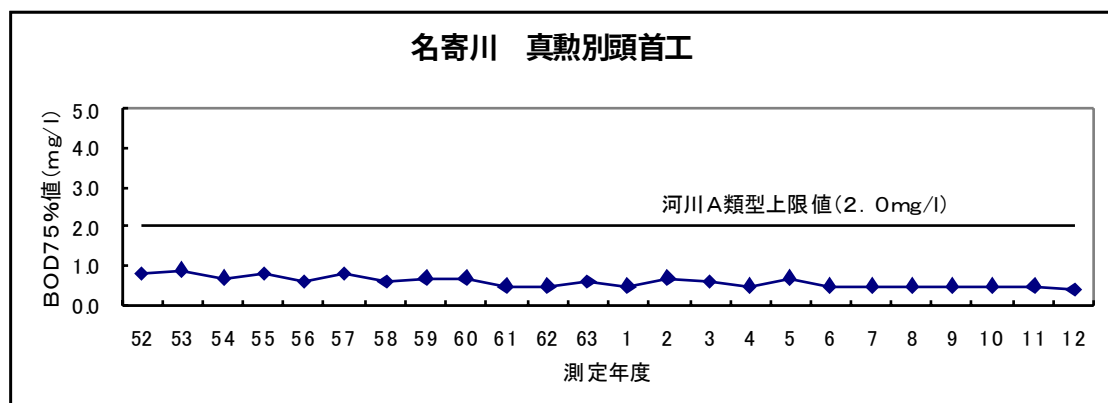
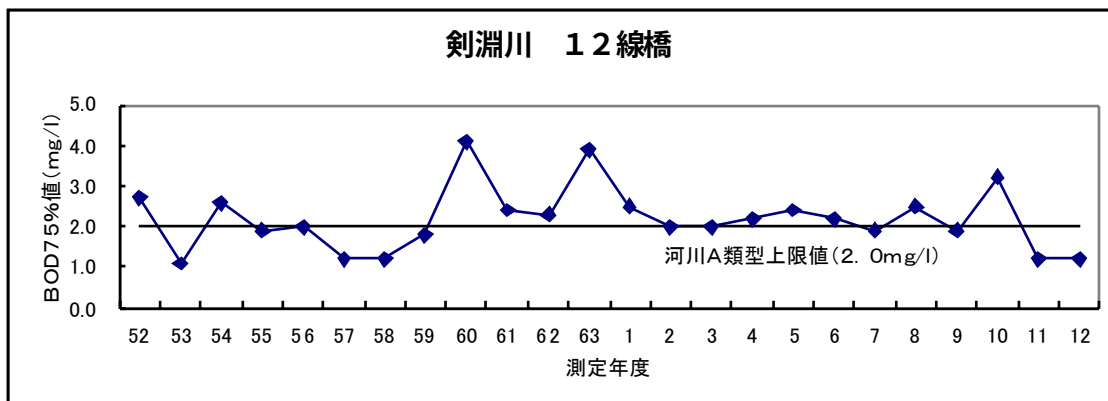
(2) 主要地点の現状

天塩川流域における主要地点の水質は以下のとおりである。

平成 12 年度の BOD75%値は、天塩川本川の環境基準地点である朝日橋地点で 0.5mg/l、中士別橋地点で 0.6mg/l、中川地点で 0.7 mg/l、一般地点である美深橋地点で 1.1 mg/l、名寄川の環境基準地点である真勲別頭首工地点で 0.4mg/l とそれぞれの環境基準値を満足している。



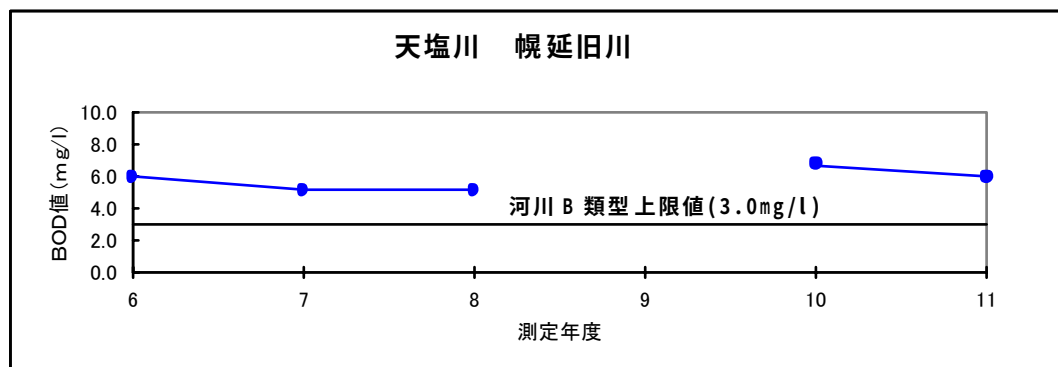
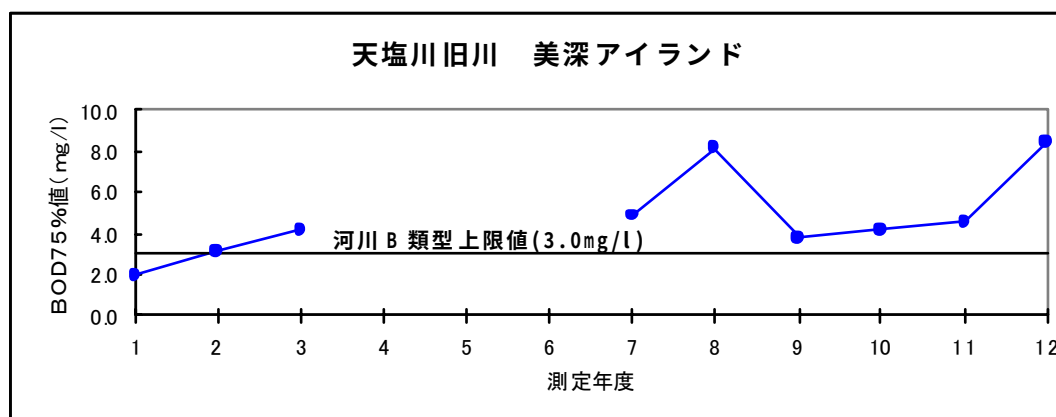
図－2 1 (1) 天塩川の各水質観測地点における BOD75%値の経年変化



図ー21(2) 天塩川の各水質観測地点における BOD75%値の経年変化

(3) 旧川水質の現状

旧川における水質について、BODの経年変化をみると、環境基準値を満足していない状況にある。今後、旧川の水質浄化対策を講ずる必要がある。



図－２２ 天塩川旧川における BOD の経年変化

7. 河川空間の現状

7-1 河川敷等の利用の現状

(1) 河川敷地の利用状況

① 年間利用状況

平成12年度に実施した「天塩川水系 河川空間利用実態調査」によれば、天塩川水系の年間河川空間利用者総数(推定)は、約24万人である。沿川市町村人口からみた年間平均利用回数は、約2.4回となっている。利用形態別では散策等が82.8%と最も多く、次いでスポーツが16.0%、両方で98.8%を占めている。水遊びは0.4%、釣りは0.8%となっている。

平成12年度の24.4万人は平成9年度の14.5万人と比べ、約9.9万人、約68%増となっている。理由として春季に雨天の日があり利用者が減少したが、夏季にイベントがあり、また、1年を通しスポーツが盛んに行われていたからと思われる。

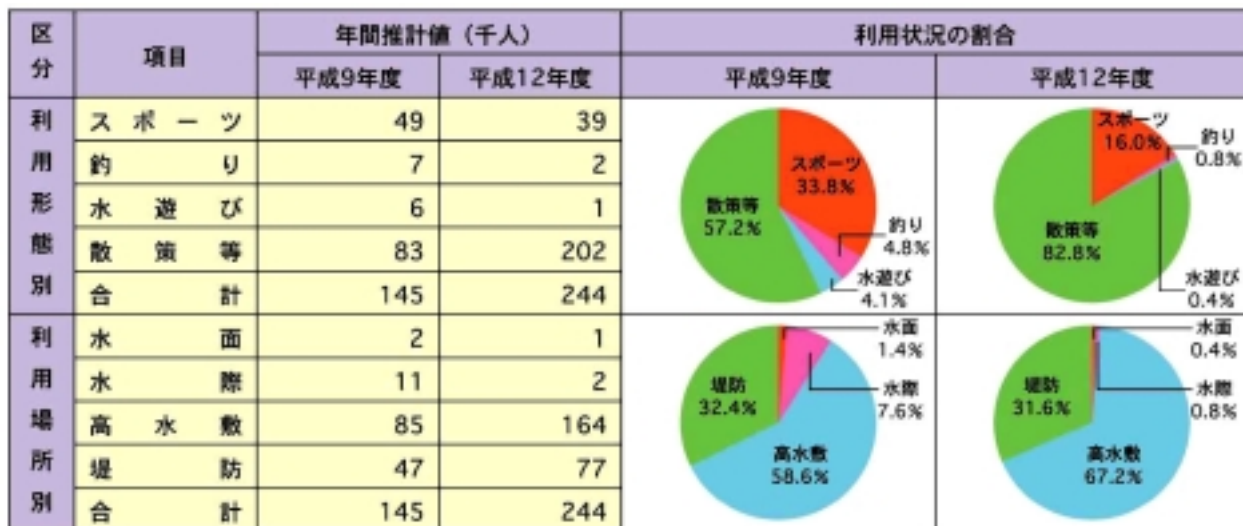


図-23 天塩川の年間河川空間利用状況

② 高水敷の利用状況

天塩川の河川利用は、上流から士別市、名寄市、中川町、音威子府村、天塩町の周辺は高水敷の整備が進み施設の利用が盛んであり、その他の地区では自然的利用が行われている。特に、旧河川敷地を利用した士別市のつくも水郷公園、天塩町の鏡沼水郷公園では休日にはスポーツ・散策など多くの人々に利用されている。また、河川利用施設が25箇所あり、いずれも無料である。

天塩川河川敷地の利用状況は、約1,037haの占有があり、このうち採草放牧地の占有が約531haで全体の約51.2%を占め、次いで公園緑地の占有が約89haとなっている。(表-15) 天塩町、中川町、音威子府村、美深町、風連町、名寄市、士別市で河川緑地の整備がすすめられて、朝日町では岩尾内ダムの周辺を地域の交流の場として整備している。河川管理者においても、これらの地域計画と連携として、河川環境整備事業及びダム周辺環境整備事業により基盤整備を実施し、多くの住民に健康増進の場、憩いの場、イベント等交流の場として盛んに利用されている。

表-15 河川敷地の占有状況(直轄管理区間)

(単位:ha)

水系名 \ 占有面積	公園・緑地		運動場		採草放牧地		水 田	
	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積
天 塩 川	32	89.45	2	1.42	253	531.49	70	41.15

畑		その他		合 計	
件数	面積	件数	面積	件数	面積
120	73.93	859	299.41	1, 336	1, 036.85

※上・下流部の合計値(H13.3月現在)

7-2 河川の利用状況

①上流部

朝日町では、岩尾内ダム湖周辺にキャンプ場、温泉、テニスコート等が整備され、釣り、カヌー等のスポーツ・レクリエーション活動の場として親しまれており、毎年開催される岩尾内湖水まつりには多くの人が参加している。また、天塩川の河川敷にローラースキーコースが整備され、隣接するジャンプ台やトレーニングセンターと併せ利用されている。

士別市では、天塩川の旧川を利用したつくも水郷公園及び周辺の天塩川河川敷地が河川公園として整備され、市民の健康増進及び憩いの場として利用されている。天塩川を中心としたイベントも多く開催され、天塩川まつりは母なる川天塩川に感謝する祭りとして、川舟みこしやいかだ下り等が行われている。



岩尾内湖水まつり



つくも水郷公園

②中流部

風連町では、毎年、都会の子供たちとの交流（天塩川での川下り等）が行われており、現在、河川敷で子供たちが自然体験活動（カヌー体験、昆虫採取等）を行う場として水辺の楽校の整備が進められている。

名寄市では、名寄市街部の天塩川河川敷にパークゴルフ場、サッカー場、サイクリング園路等が整備され、市民の健康増進、憩いの場として利用されている。また、天塩川の旧川である智恵文沼が釣りやバードウォッチングの場として利用されており、現在、子供たちが自然体験活動（ヒブナ観察、野鳥観察等）を行う場として水辺の楽校の整備が進められている。

美深町では、天塩川の旧川である三日月湖を利用し、カヌーポート、オートキャンプ場や温泉等を配備した親水公園として美深アイランドが整備されており、年間約90万人（H9実績）が訪れている。また、天の川下りいかだコンテスト等のイベントが開催され、天塩川を通して活発な交流の場が展開されている。

音威子府村では、天塩川河川敷に隣接して天塩川温泉が整備され、多くの人が保養の場として利用している。また、温泉に隣接してカヌーポートが整備され、カヌー利用者も多く温泉を利用している。

中川町では、町民の交流・憩いの場として、天塩川河川敷にパークゴルフ場、イベント広場等の河川公園の整備を進めている。現在、対岸の河川敷にはカヌーポートが整備され、オートキャンプ場等が隣接することから、多くの人に利用されている。



智恵文沼野鳥観察会



天の川下りイカダコンテスト

③下流部

天塩町では、河口部旧川跡を利用し、キャンプ場やオートキャンプ場、原生植物の散策道等の鏡沼海浜公園が整備されており、多くの人々の交流・憩いの場として利用されている。また、天塩川及び鏡沼海浜公園を舞台に天塩港シジミまつりや、天塩川花火大会や川下り等が開催され、多くの人々が参加している。

幌延町では、天塩川の旧川である約 30ha の三日月湖で「さと川づくり」を実施し、河川空間の再生を図っている。また、三日月湖周辺をスポーツ公園として利用している。

サロベツ原野では、ペンケ・パンケ沼やエゾカンゾウなど 100 種類以上の花が咲き誇るにサロベツ原生花園があり、毎年夏期には多くの観光客が自然散策を楽しむために訪れている。また、隣接する兜沼では多くの人々がキャンプや自然散策等を楽しんでいる。



鏡沼海浜公園



天塩港シジミまつり

④その他

天塩川では、カヌー利用が盛んであり、全川にわたって各所にカヌーポートが整備されている。また、全国的なカヌーのイベントとして「ダウン・ザ・テッシ・オ・ペッ」が開催されている。上流の名寄市から河口までの約 150km をカヌーで下るもので、平成 4 年度から毎年開催されている。また、上流の名寄～音威子府間では '98 日本カヌーツーリング天塩大会が開催され、全道はもとより全国から約 400 人のカヌーイストが参加し、好評を博した。



ダウン・ザ・テッシ・オ・ペッ



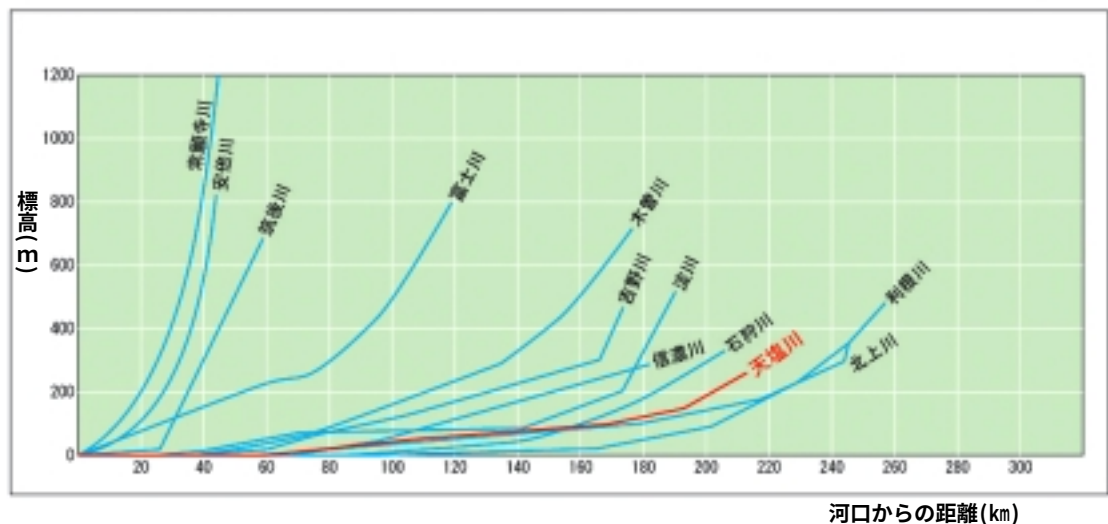
図－２４ 天塩川における河川利用位置図

8. 河道特性

天塩川は、上川支庁と網走支庁の境をなす高山植物の群生地として知られている天塩岳(1,558m)に源を発し、途中剣淵川、名寄川、間寒別川など数多くの支流を合わせながら北海道北端で日本海に注ぐ流域面積 5,590km²、幹川流路延長 256km の一級河川である。

その流域は、3市10町1村を有し、山地 73.3%、平地 26.7%で構成されており、細長い流域形状を呈している。

天塩川の河床勾配は北上川とほぼ同じ程度で、本邦では緩勾配河川に属している。



① 上流部(天塩岳～名寄川合流点)

上流部の天塩川は豊かな亜寒帯森林地帯を急勾配で安山岩質の峡谷を西に流下して岩尾内ダム地点に至る。その後、粘板岩が卓越した区間を流下し、士別付近の扇状地を通過して大規模稲作の北限である名寄盆地に入る河床高 100m 以上、河床勾配 1/700 以上の急流河川である。

盆地周囲には砂礫質の台地や河岸段丘が発達し、河畔林が連続した自然河岸区間が多い。河床が砂礫で構成され、復列砂州が見られるが、河道は比較的安定しており、近年では砂州上に樹木の発達が多く見られる。



上流部の状況

出典：旭川開発建設部

② 中流部(名寄川合流点～問寒別川合流点)

中流部は名寄盆地の下流で智東の狭窄部を通過して美深低地に入り、1/1500 程度の緩やかな河床勾配となる。その後、音威子府の狭窄部で北見山地を通過して中川低地に入る河床高標高約 5～100m の区間である。この区間は良好な落葉広葉樹林帯が広がり、流れが早瀬である自然豊かな狭窄部とそれに挟まれている大小の扇状地から成り、扇状地上では大きな蛇行を繰り返しており、側岸侵食の激しい箇所が多数存在する。

河岸土質は主にシルトであり、河床材料は砂礫であるが、所々に礫のような形で横断している岩(テッシ)が露出している。このため、天塩川は全体的に河床低下傾向にあるが、智東の狭窄部から音威子府の区間においては河床低下がほとんど無い状態である。



中流部の状況

出典：旭川開発建設部

③ 下流部(問寒別川合流点～河口)

下流部の天塩川は大きく蛇行しながら泥炭地が広く分布する氾濫平野を西流し、豊かな湿原植生が分布するサロベツ湿原を貫流するサロベツ川を合わせた後、河岸段丘で大きく偏流して砂丘沿いに約 10km 南下し日本海に注いでいる。

河床勾配は、河口より海岸沿いの 10km まではほぼ水平、それより上流が 1/5,000～1/3,000 と緩勾配であり、河口から 20km 区間は感潮区間である。

このため河床材料はシルトや細砂が多くを占め、全体的に河床は堆積傾向にある。

著しい蛇行区間は多数の捷水路工事により直線化され、大小の旧川跡地(沼)が点在している。また、砂州変動の激しかった河口部では導流堤により、現在安定している。



下流部の状況

出典：旭川開発建設部

9. 河川管理の現状

9-1 河川管理施設

河川改修は昭和28年水害を契機として改修総体計画が策定され、その後積極的に実施された。堤防整備延長が長大なことから堤防完成率は現在約35%の整備となっており、流域市町村の市街部築堤の完成化を進めているところである。樋門樋管の施設数も多く定期的な巡視・点検を実施し、必要に応じて維持修繕・応急対策等の維持管理を行っている。

表-16 直轄管理区間堤防整備状況

直轄管理 区間延長 (km)	施行令 2条7号 区間延長 (km)	堤 防 延 長 (km)				
		完 成 堤 防	暫 定 堤 防	未施工	堤防 不必要 区間	計
283.9	37.9	130.6	154.9	34.5	137.7	457.7

※延長は直轄管理区間（ダム管理区間を除く）の左右岸の計である。平成14年4月現在

表-17 直轄管理区間水閘門等河川管理施設整備状況

堰	床 止 め	排水機場	樋門樋管	陸 閘	計
0	0	6	238	0	244

（北海道直轄河川樋門樋管水門排水機場実態表） 平成14年4月現在

9-2 砂利採取

天塩川の砂利採取許可は昭和15年頃より始められたが、昭和30年後半頃からは高度経済成長に伴い砂利等の骨材需要が急増し、河川砂利が乱掘されることとなった。

昭和41年に河川砂利基本対策要綱が策定されてからは、砂利資源の枯渇、過度の河床低下を防止するため全面的な採取規制がなされている。

9－3 水防体制

(1) 河川情報の概要

天塩川では、流域内に雨量観測所（39箇所）、水位観測所（35箇所）を設置し、無線等により迅速に情報収集を行うとともに、これらのデータを用いて河川の水位予測等を行い水防活動に活用している。

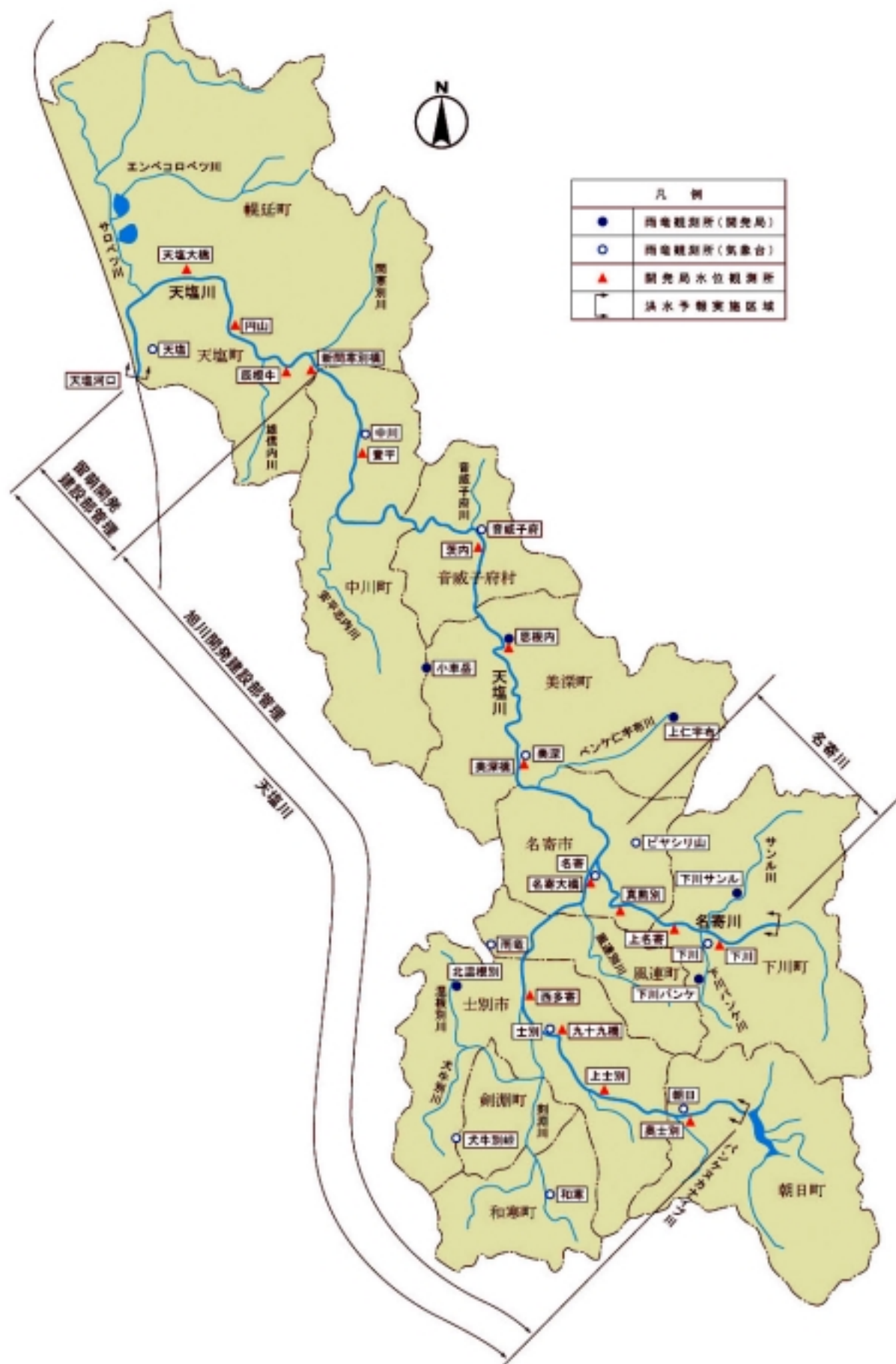
また、近年では名寄市を中心に光ケーブル網により接続された遠隔監視カメラを用いた管理も行い、迅速な水防活動の一助となっている。

(2) 水防警報の概要

天塩川では、洪水による災害が起こる恐れがある場合に、誉平・名寄大橋・真敷別など7箇所の基準となる水位観測所の水位をもとに市町村を含む水防関係機関に対し、河川の巡視や災害発生防止のための水防活動が迅速かつ的確に行えるように水防警報を発令している。

(3) 洪水予報

天塩川では、水防法および気象業務法に基づき、「洪水予報」を天塩川本流と名寄川を対象河川として気象台と共同で発表している。流域の雨量や水位の状況、水位予測等を一般住民にわかりやすく迅速に伝えるべく整備を進めている。



図－２６ 洪水予報区間及び雨量・水位観測所

9-4 危機管理への取り組み

(1) 水防連絡協議会との連携

天塩川において、洪水・高潮等による被害の発生を防止または被害を軽減するため、国及び地方自治体の関係機関が連携し、住民の避難、水防活動等を迅速かつ円滑に行うために、水防連絡協議会が結成されている。この協議会により、重要水防箇所の合同巡視、水防団、水防資材の整備状況の把握、定期的な水防訓練等を行っている。



H13.9.10 洪水の災害対応状況
名寄市南 5 丁目地先での活動状況



H13.9.10 洪水の災害対応状況
名寄市徳田 8-1 地先での活動状況

出典：旭川開発建設部

(2) 渇水調整協議会との連携

天塩川流域の渇水時における関係利水者間の水利使用の調整を円滑に行い、もって合理的な水利使用の推進を図ることを目的とした渇水調整協議会が組織されている。この協議会では、水利使用の調整時期及び方法、水利使用実態、合理的な水利使用の方策、水使用上の水質の維持、実施及び連絡体制の確立等について協議し、合理的な水使用の推進を図っている。

(3) 水質事故対策の実施

油類や有害物質が河川に流出する水質事故は、流域内に生息する魚類や生態系のみならず、水利用者にも多大な被害を与えている。水質事故が発生した場合、その被害を最大限にとどめるため、迅速で適切な対応が必要になっている。このため、環境保全連絡協議会により、連絡体制を強化するとともに、水質事故訓練等を行い迅速な対応を行うことが大切であり、また、水質事故に備え、常時から資機材の備蓄を計画的に行っている。



H11.4.6 士別市日向橋での水質事故に対する取り組み

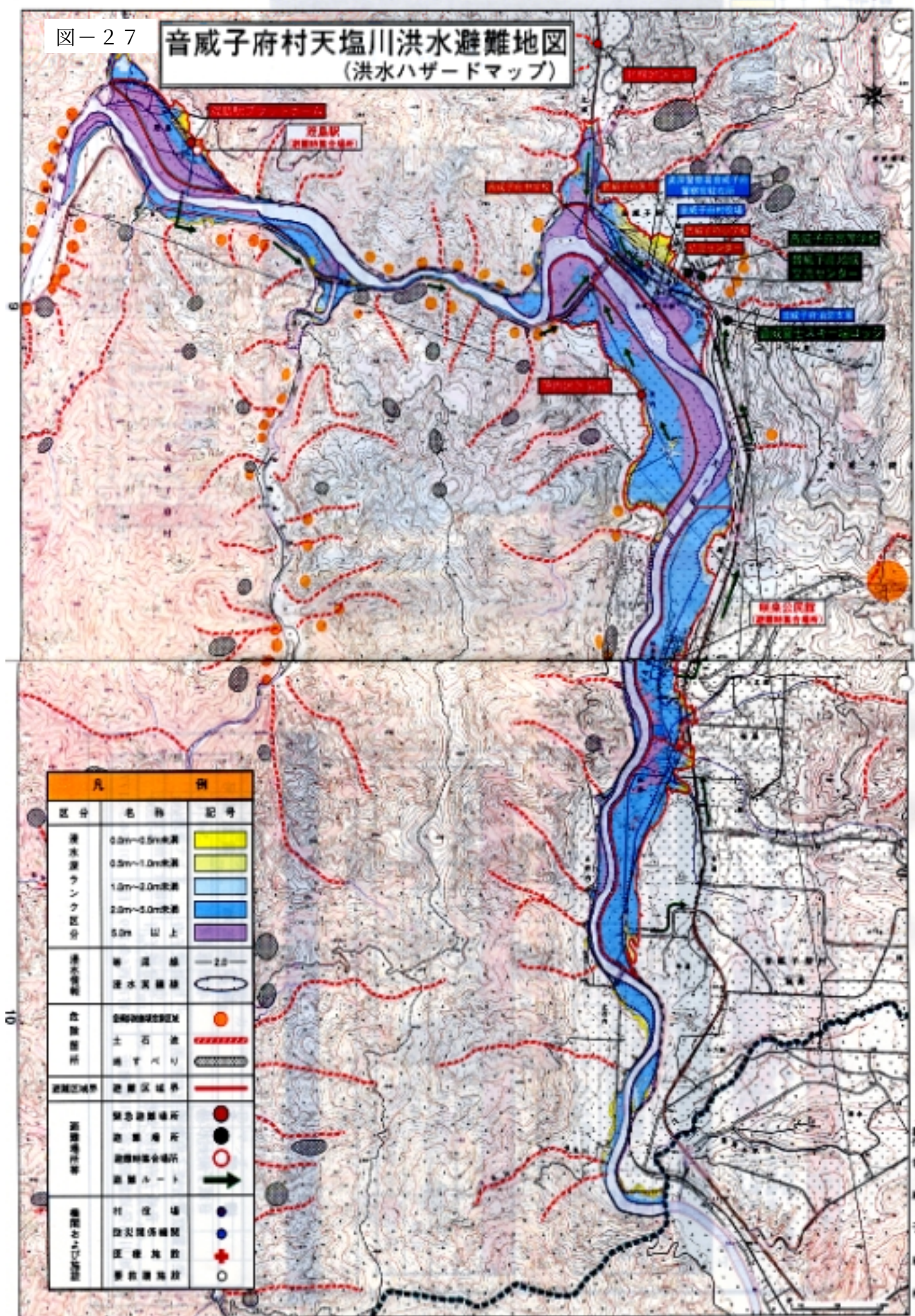
出典：旭川開発建設部

(4) 洪水危機管理の取り組み

洪水危機管理において、平常時から危機管理に対する意識の形成を図るとともに、洪水発生時の被害を最小限に抑えるため、洪水氾濫危険区域図を公表するとともに水防計画・避難計画の策定の支援、土地利用計画との調整を関係機関や地域住民等と連携して推進している。次頁に音威子府村の洪水避難地図(洪水ハザードマップ)作成例を示す。

図-27

音威子府村天塩川洪水避難地図 (洪水ハザードマップ)



この地図は建設省国土院院長の承認を得て河院発行の二万五千分の一の地形図を
複製したものである。(承認番号) 平12、通観第225号

9-5 地域との連携

天塩川流域は天塩川に沿って町が連なっており、天塩川を町おこしに取り組んでいる。近年、地域整備構想としてまとめられた「天塩川流域交流ふれあいランド整備プロジェクト」では天塩川でのウォータースポーツをはじめとする交流化の活発化をすすめ、これと結びついて地域産業の活性化や生活環境の整備を展開し、これらの相乗効果による地域の活性化を図るべく流域自治体・河川管理者等が取り組んでいる。



天塩川流域交流ふれあいランド整備
プロジェクトのイメージ図

出典：天塩川流域交流ふれあいランド整備プロジェクト会議資料

一方、今後、流域のまちづくり事業と連携し、河川を地域レクリエーション、防災、まちづくりの拠点として位置づけ、地域と一体となった河川管理を行うものとする。地域住民と協力して河川管理を進めるためには、インターネット等のメディアを利用するなどして、地域住民に様々な河川情報を発信するとともに、地域からの河川整備に対する要望等を集約し、住民参加型の管理体制を構築する必要がある。また、河川清掃や、節水・水の再利用などを通じて、地域の人々の河川に対する愛護精神を啓発していくことも重要である。



河川清掃活動



河川清掃活動



子供たちによる水生生物調査

出典：旭川開発建設部